

---

# **とある頭脳の思想統一《デマゴーグ》**

北沢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】 とある頭脳の思想統一

### 【著者名】 北沢

### 【あらすじ】

レベル5、<sup>デマゴーグ</sup>思想統一は家なき児だった。もともと研究所（裏）に住んでいて、ある日そこに住む者を皆殺しにしてしまったのだが、その時に頑張って暴れまわった結果、家は家として住むには隙間風がきつくなってしまったのである。

かねてより日のあたる所に根を下ろしたいと考えていた思想統一<sup>デマゴーグ</sup>だが、家出して早々に無理だと悟ってしまった。第二位のメルヘンと殺し合つことになったとの知らせである。勝った方はレベル6になれるらしい。

自分は十分頑張った訳だから、少しくらいは周りが頑張る事にな  
つても許されるよねえ？ねえ？ねえ？ねえ？ねえ？  
だから仕方ないんだぜ。大人しく死んでろや豚どもが、みたいな。  
そんな話でオーケーならば。

## 始まりから誕生まで

学園都市。

総面積が東京の3分の1も有るとか、テクノロジーの最先端が一堂に会す場所だと、都市一つであらゆる大国に勝る戦力を保有するとかそんなものはどうでもいい。

学園都市。つまり超能力が有るのだ。

トラックに撥ねられて、そうしたら田の前が真っ白になつて、気が付いたらきなり赤ん坊の体に生まれ変わつていた時は転生トラックなる物が本当に有る物かとなかなか感動した所だったが。

まさか、学園都市だとは。

学園都市。学園都市で、学園都市なのだ。

すごい事なので3回言つた上でもうあと5回は言いたいところなのだがマジです」このだ、マジで。本当に。

何がすごいってつまり学生の街で、だから学生が居なきや成り立たなくて、つまり奨学金がマジです」といのだ。

原作においては主人公たる上条当麻が金欠にあえぐ姿がお馴染みであるわけだが、それも件の暴食シスターが来てからの話でそれ以前は漫畫を買う余裕も有つたようで。

しかもアニメを見る限りでは住んでいる学生寮も、ボロいとか言われながらも、これが中々学生寮のくせに小奇麗な良い所のようだつたし、学園都市である以上不便とは無縁と言つても憚りは無いのであります。

レベル〇で二れ……。素晴らしいではないかーマジで……マジで！

一体それ以上だつたらどうなるのか。どうなつてしまつのか！  
どいままでブルジョワジイなら氣が済むのか！ ドキがムネムネである。

不覚にも忘れかけていた青春を思い出し、胸で悶える熱い心の内を魂の限り叫びそうになつて、自重して、と思つたら現在進行形で叫び続けるじやん。でも赤ん坊だから仕方ないよね！

なんて考えるくらいテンションが上がつちやつたのも思い出に新しい。黒歴史のページなんて簡単に増えるものさ。

そういうして、今俺は6歳を過ぎて能力に田覚めたのだが。

結果。なんでもレベルは現在3で、将来性は高いらしく田の前の白衣を着た青年は興奮して鼻息荒くマシンガンな調子で喋つている。

まったく先ほどからずつとこひつだ。正直言つていい加減気色悪いのだが、それも無理からぬことかもしれない。この俺の素晴らしい才覚はレベル5も視野に入る位だそうで、慣れればレベル4程度は

すぐにもだとか。

だが不思議にも、残念ながら最初に思つたほど嬉しくない。

まあ、何故かは分かるのだ。自分の事だし、そりでなくても客観的に見て多くの人が納得できるのではと思つ。

白衣を着た青年はずつと喋り続けている。自身と同じく、白衣を着た老人に。分厚いガラスの向こうはずつと、ぐどこ程に。

自分の有用性を示そようと必死なのだろうか。結構な事だが、当事者の俺を差し置いて生意氣である。死んでくれないかな、あいつ。

さて。そもそも自己紹介も済ませるべきか。俺の名前は回錠意澄。かいじょういすみ名前はあるが、どうにも人権まではないらしい。

チャイルドエラー  
置き去り。それが俺。

学園都市の闇の奥。

研究所とは言つが、焼却炉も兼任していることは「ゴミ処理所でもあるらしく、いつも炉には汚れが絶えない。そのゴミの大半をこの俺が出していくと思うと、なんとも、一言で表すなら「苦労様な感じであるが。

.....

その後、英才教育を一身に受けた俺は時間をかけてレベル5になつた。十年の成果である。良くやつたと褒めてほしい。

それはさて置き今日から家なき児だ、ビリジョウへ。

何せ住んでた研究所が謎の爆発で吹っ飛んでしまったのだ、まったくもつて由々しき事態だ、素晴らしい。白衣を着た連中は最後まで何か言おうとしてたが何を聞いたかったのか、聞く前に燃やしたのは少し失敗だったかもしれない。

まあ、新しい門出の祝福か何がだろ。可愛い子には旅をさせると諱じわいにも有るし、よほど俺の事が可愛かつたのだろう。いい子にしてたのだから仕方ない。

さて、当面の問題は住居の確保と戸籍の用意になるのだが、お金は白衣の奴等から貰つたし何とかなるかな？

さて、じゃあまずは。

「日付の確認でも、しようかな？」

どうでもこいけど独り言を言つのも久しぶりな気がする。

## 始まりから誕生まで（後書き）

感想、間違い、矛盾、誤字、脱字、その他諸々有りましたら書き込みお願いします。

## 第1話 誕生から遭遇まで

「今日は、あなたの御高名はかねがね、ゴミ処理所の奥にも届いておりますよ？」アレイスター＝クロリー

窓の無いビル、その中央。学園都市の頭脳の中心たるその聖域にその人間は浮かんでいた。

「戯言はいい、私も暇ではないのでね。手短に済ませてもうおつ  
人間は言つ。赤い液体の満ちたビーカー、無数の機械に繋がれた  
科学の胎盤。その中で。

「む… そとかね、なら」要望どうり手短に言おうかな。戸籍と家  
と金をくれ、ほら、つこさつきまでモルモットやってただろう？  
どれも足りなくてさ。作つて貰おうにま、どうにも勝手が分からな  
からこの街のボスにでも頼もうかと思つてきた訳だけど。良いかな  
？ 良いよね？」

家が無くなつた後に気付いた事なのだが、驚くべき事に金が有つ  
ても伝手が無かつたのだ。……当たり前か。しかし箱入り坊ちゃんな  
俺にとつてはそんな当たり前を満たす事も難しく、頼るべき原作知  
識も当然そんな所まで網羅してくれて居る筈も無くて、仕方なくそ  
の辺に居た空間移動能力者を手当たり次第にとつ捕まえてはマイン  
ドをジャックして案内人を探し出したのである。総数実に13回の  
チャレンジだ。

「可能か不可能で定めるならば、可能だらう

ん…？随分と曖昧な考え方をする。何と云つか、原作のイメージと違う様な、そうでも無い様な、なんか気持ち悪いな。…いけない、これはいけないぞ！唯でさえ逆さ吊りで変態なのに俺の何気ない一言で更に磨きがかかつてしまつた。一体何がこの変態をここまで駆り立てたのだろうか、急いで問い合わせねばなるまい。

というわけで質問してみた。

「はつきりとしない答えだね、何か不都合でも有るのかな？」

決意のもとに放たれた問いかけに対し、目の前の人間は一呼吸の後に言葉を返した。

「不都合ならばある。今まで影も形も無かつた存在がいきなりレベル5として表に出るのはね。情報統制をしなければならない。端的に言って面倒なのだよ、いらぬ事に気を向けなければならぬのはね」

むむ、確かにそうかも知れない、この街ならば人一人減ろうがが増えようが関係ないと思っていたのだが、レベル5の存在はやはり大きい様である。

元同居人がレベル5レベル5煩くしてたのも可笑しな事でも無く、むしろ自然な事だった様だ。何と！どうやらこの街に於いては変態である事がある種の普遍妥当性を確立されてしまつて居るらしい。さすが学園都市、正に外道の極み。

でもまあ、可能は可能らしい。

「ふむ、そうかね。では頼んだよ、主に、俺のためだ」

俺のこの頼みは絶対に認めて貰わなければ為らない、家や金は兎も角、戸籍は最低限人が人として生きる為の絶対要素だ。

第一条件では無く、前提条件。

これだけは、今ここで持つて帰らなければ、それ以外の結果は有つては為らない。

「住居ならば、長点上機学園の学生寮を使うと良い。書類ならば既に通して有る。当然だが戸籍もだ。

学生証は後日出来上がる、すぐにもでもその寮監から受け取れるだろ。レベル5である以上相応の奨学金が支給される。君の有用性ならば序列は第4位が妥当だろ、大抵の物を買うのに不自由はない筈だ。他に何か有るかな」

人間は然して考えた風も無くそう答えた。

たとえ変態でも理事長は理事長、納得の手際だ。

物言ひは「ミリコ障かの如くぞんざいだが、まあくれるのならば文句は言つまい。

「ふむ、ならもう此処に用は無いかな?じゃあさっさと失礼させて貰うよ。こうも辛氣臭い場所に留まつていては性格が歪んでしまうからね」

そう言い残して横の小柄な少女の手を取つて退出する。

収穫は十分と言えるだろう。アレイスターもああ断言したからには覆す心配も無いだろ？

さて、今日はもう遅いし新しい家に帰つて寝るとして、明日から何をしようか？久しぶりに甘いものでも食べようかな？

明日から訪れる事が約束された穏やかな日常に早くも思いを馳せるとはいえ、油断する余裕は当面は無いだろ？

戸籍が有つても闇に浸かつた自分の素姓が消える訳では無い。抜け出しても抜け出しきれいのは天下の第一位様が原作で証明済みだ。

第一位があれでは今の俺に如何こう出来るとも思えない。やはり平和はメインキャラの成長に任せるのが一番だ。

しかし、第四位。

まさか、四位とはねえ…。3位は狙えると見積もつていたけれど、ベスト3の壁は予想以上に厚いようだ。

齧す利益と応用力で上三人に勝つのは難しいし仕方ない。

だからと言つて戦闘力で勝負だ、と言えないのが悲しい所だが。

俺の戦闘力ではレベル5は愚かレベル4にも相性によつては負けかねない。精々が序列元第5位、現第6位の心理掌握メンタルアウトを完封できる程度しかない。

十全と言えば十全だがとても完全とは言い難い。

まあ良いか、取り敢えず今は睡眠をとることが先決だ。少しあはつ  
ちゃけたおかげで眠いつたら無い。

…おっと、案内人の洗脳は解いておかなければね。

翌日、学園都市の電光掲示板に一大ニュースが舞い込んだ。

超能力者レベル5

人の身を越えた、新たな科学の魔人の誕生は半日と経たず学園都市を駆け巡った。

学生にも教師にも、表にも裏にも。

東京の3分の1という総面積の隅々へと行き渡った。一寸した情報通ならば能力名まで知っている程に。

レベル5 序列第四位 デマゴーグ 『思想統一』 かいじょういづみ 回錠意澄

狂氣の街、その頂点。

少年が刻みつけた、自身の価値の全てだった。

.....

.....

「饅頭六つ、三十円…。だと…？」

安い、安すぎる。

余りに過ぎる真心プライスに、まだ固まつても居ない自分のキャラが不意打ち気味に崩れてしまつた。

しかしこの値段は一体如何なる営業方針のもとに付けられたのか。戸惑いを隠せない。

豚の餌でも混ぜているのだろうか？

田の前で、いつそ清々しい程に朗らかな笑みを浮かべている店員のねーちゃんは、その笑顔の裏で一体どんな策謀といつつかの渦を蠹かせているのだろう。

思わずガン見する。

「……どう致しましたか？お客様。……ああー大丈夫ですよ、視覚情報が及ぼす影響を調査していく……。採算は一の次なんです。危ない物は入つていませんから、安心して買って行って下さい」

成程、実験と言つなら納得だ。言われてみれば色んな形の饅頭がある。

そういうえば原作にもこんな感じのが有つたような気がするな……。

よし、丁度いい。」Jijiはひとつレベル5の財力の片鱗を見せて上げようじゃないか！

「ふむ、そうかね……。ではそのカブトムシの幼虫型の饅頭を二箱貰おうかな？」

Jijiは敢えてゲテモノを取りに行く。

チャレンジ精神を忘れてはいけないのだ。

「はい、お買い上げ有難う御座います！代金は……、はいー63円丁度ですね！…ふふ、良いですよね、カブトムシの幼虫。調査は今年の十一月までやつていますから、またお越し下さいね？」

彼女はカブトムシの幼虫が好きらしい。凄い勢いで喋り始めた。カブト虫の幼虫型なんて、結果が明白処じや済まない程明らかで、真っ白な代物を放り込んだのは若しかしたら彼女なのかも知れない。

「そうかね？じゃあまた来よつかな」

背中越しに再び有難うの言葉を聞き歩き去る。

ともあれ、三時のおやつは確保できた。

俺の能力はカロリー消費がかなり変態… もとい大変な事になつているのだ。

これからもエンゲル係数80%越えは難い。研究所に居たころは一日五食で、寸胴鍋を40回空にしたのは記憶に新しい。

その様は、大変… もとい変態と形容するのが最適とさえ称されたほどだ。

今俺は学園都市の表に居る。

表と言つのは… まあ比喩表現だ。一六年ぶりの、久しく忘れていた暖かさを満喫している…。そう云う事だ。

適当に歩いて、適当に景色を見て、適当に遊ぶ。暗くなるまで、ずっとずっと。

満たされなくとも、幸せな日常が其処にあった。光に満ちた、明るい世界。十六年前までは、当たり前だったもの。

これこそ俺の知る世界、そう思つていた。

だから忘れていた。自分の立ち位置を、不幸なんて、主人公の専売特許でも何でもない事を。

何故、こんな時間まで外に居たのか。

何故、寄りにも寄つて路地裏なんかに踏み込んだのか  
其処には闇が待つていた。闇は闇を引き寄せるのだと、お前はこ  
ちらの住人だと。そう語るように。

学園都市の魔人が一柱。闇の奥の、真なる闇。

超能力者　序列第一位

『<sup>レベル五</sup>未<sub>ダ・クマター</sub>元<sub>イ</sub>物質』

かきねていとく  
垣根提督

「ん？…ああ、見られちまつたか。まあ不運だと思つて諦める」

彼は、其処に佇んでいた。

「じゃあな」

瞬間、『見えないナーカ』が、襲いかかつた。

## 第1話 誕生から遭遇まで（後書き）

感想、ごしゃりをお願いします。

## 第2話 遭遇から決断まで

だんっ？ と、何か固い物を碎くような音が路地裏に響いた。

超能力という、異能の極みたる絶大な力を持つて齧されたその結果は、しかし彼、未元物質こと垣根帝督に納得を与えるには至らなかつた。

「…………、……」

顔の前へと掲げた手を下し、彼は思考する。

自身が誇る致死量の力を害意以つて振るおうとしたその瞬間、先ほどの男は手に提げた紙袋を突如として投げつけたのだ。

かなりの速度で放たれたその紙袋は、何の変哲もない箱を二つ吐き出しながらもこちらに飛来し、そして吐き出された箱二つとともに軌道を変えて隠された牙を剥いたのだ。

念動力系統の能力なら、たとえ唯の紙で有りうるナイフの様に鋭く固めることができると成る。

速度と、三つ同時に制御した事。そして素早い判断力。

これ等の状況を鑑みると、恐らくレベルは3以上で、戦い慣れしている。つまりある程度の警戒が必要な相手と判断。

未元物質を干渉させ箱と袋の制御を乱す。返す刀で攻撃性の未元物質を放つ。

…が。

カツ？ と眩い光が放たれた。

予想外の攻撃に顔の前へと手をかざす。

瞬時に展開した未元物質により、追撃の手は封じたが先手を打たれた事に変わりは無い。

チツ、と叩打ち一つ打ちなし、反撃するべく式を組み立て周囲を見やる。

「……逃げられたか」

残っていたのは、散乱した紙袋と箱。そして先の攻撃で砕かれたアスファルトだけだった。

…奴は間違いない堅気じゃない。

僅かな交戦から導き出された推論は、実に的を射ていた。

あの手際では一般人などと言われても信じることは難しい。

思い返せば最初の紙袋は端から無効化をせるための罠だったのだろ。

無効化される事を知っていた。それはつまりこちらの能力を有る程度知っていた、ということを意味する。

自分の能力を知る物は決して多くは無い。少なくとも、表の連中で知っている者は一握りだらう。そしてその一握りは全て科学者だ。

ならば態々追いかける必要は無いだらう。

彼はそう結論付ける。

しかし。

そうしかし。

最後の閃光は、話が別だ。

奴の能力は念動力、の筈なのだ。光を生み出すとなれば、それは別の能力だ。

だからこそおかしい。

デュアルスキル  
多重能力者

不可能と断じられた、レベル5を宿す怪物すら越えられない、究極の一線。

(…馬鹿馬鹿しい)

至つた答えを否定する。

当たり前だ。

確かにそれなら説明がつく、あの能力についてなら、だが。

しかしそれがここに居るはずは無いのだ。

仮に多重能力者が居たとして、だとしたら、認めるのは癪だがその重要性はレベル5以上の物になる。

研究所から出られる訳も無く、出られても直ぐに捕まり、今度は手足をもがれるだろう。

ここはそんな街だ。

だからあれは違うのだ。

事実能力以外の道具を使ったとすれば説明がついてしまう。

だと云つて。

拭えない。

形容し難い違和感。

言葉にし難い胸騒ぎ。

知りず知りずに口の端を吊り上げる。

おお？…俺あ今笑つてんのか…？

確信が、有つた。予感がした。

オカルトについては否定も肯定もしないが、しかし今この時感じた『予感』ならば、肯定しても良いと思えた。

奴とは、また近い目に会つ。

奇しくもその時。とある研究所が求めた答えに、驚愕すべき結論がはじき出された。

予感は、直ぐに当たる事となつた。

…………

会いたくも無かつた原作キャラとの、短い邂逅を済ませてやつて

あた長点上機<sup>シテ</sup>園の学生寮。

回錠意澄は、戸惑っていた。

つい先日我が帰るべきスイートホームとなつた学生寮。

この時間はこつもラウンジに寮監が居るのがお馴染みなのだそ  
だが、今田も今田としてそのお馴染みをバカ正直に踏襲しているよう  
である。

その寮館はこりに向けて手を突き出し無言で眼差しを向けてい  
る。

突き出した手には、受話器が画面に保留の文字を浮かべ握られて  
いた。

「ひらひら受け取れと言つたらしく。

黙つて座るのも気まずいので、さつと受け取り保留を解除。

「もうあつち行つて良こよ」

と、意澄は言外にあつち行けと催促します。なんぢやつて。

寮監に一言掛けるのも忘れない。

共用スペースに有るでかいソファに腰を落ち着け、受話器越しの  
聞きなれない声くと意識を向ける。

何事だらうか？

『……今晚は、統一思想<sup>デマゴーグ</sup>。今日は貴方に重要なお知らせが有つてこうして連絡をした次第で御座います』

丁寧な言葉使いで男が喋る。

何となく嫌な予感がするのは氣のせいだと信じたい。

無理っぽいかなー。

「ふむ……。で、そんな暇人の貴方が何の用件かな？俺はこの後、羊を数える予定が入っているんだ。時間を削がれたくないでの早くしてくれないかな？」

今が二十一時だから、この調子では、お風呂に一時間しか入れない。

お風呂で羊を数える程スリルを求めている訳ではないので、實際本当に時間が無い。

垣根帝督め、次に会つたら如何してくれよう。

次が無い事を祈らずには居られない。

『では、单刀直入に申し上げましょつ……。貴方には……』

……男の言つ用件は、彼の嫌な予感に見事的中して見せた。

「おおう……」

呻かなければやつてられない。

何と云つべきか、主人公たちだけでやつてゐる、と云つべきか。

……、ああああああ  
。

「やつてらんね——」

そんな感じ。

『大変です白井さん!』

並んで歩く一人の少女。

その片割れであるツインテールの少女は、可愛らしい顔に似合わぬ真剣な表情で、電話の向こうの相棒の声に耳を傾けていた。

お姉さまとの優雅なひと時。

無粋にも、それを壊してくれた携帯の着信音の送り主には、一度ハリネズミにでもしてから説教くれてやらねばと、一秒前まで半ば本気で考えたのだが…、どうも事情が事情らしい。

白井黒子は、頭のスイッチを瞬時に風紀委員(ジャッジメント)の物へと切り替える。

「落ち着きなさい初春何が有ったんですの?」

何時になつても落ち着かない後輩との、何時も道理のやり取りに、不意に気が緩みそうになるも慌てて締め直す。

後輩に見つとも無い所は見せられない。

彼女は意外と見栄つ張りなのだ。

『第七学区東公園前で能力者同士の争いが勃発!人数は四人です、急いで向かってください!』

風紀委員の仕事は実に多岐に渡る。能力者間の争い事の鎮圧もその一つだ。

「黒子…、もしかしてまた風紀委員の？」

並び立つ短髪の少女、御坂美琴は、愛おしくも危なつかしい同居人の後輩へ、心配そうに顔を向ける。

「ええ…、そうです。また能力者の鎮圧ですわお姉さま…。まつたく今月で三件目、いい加減鬱陶しくなりますわ」

本当に鬱陶しい。つい昨日銀行強盗を鎮圧した矢先にまたこれだ、少しくらいこは休ませてくれても良い物を…。

憂鬱は募るばかりだ。

「そひ…、じゃあ私は先に支部の方で待ってるから。…わざと片付けてきなさい、黒子」

某K条丁麻以外には別段シンデレラでもない彼女は軽く声を掛け送り出す。

心配では有るが、それ以上に信頼しているからこそ出でてくる言葉は、学園都市により磨かれた変態性を開放し続けるこのド変態に、限りない勇気と喜びを与えた。

「当然ですわお姉さまー、この黒子、全靈を以つて雑事を片付けて参ります。そして…！そしてその後はお姉さまとー、お姉さまとー…、つああー、黒子、いつて参ります！」

白井黒子は走り出す。

彼女の能力は空間移動。テレポート

時速に換算して二一八ハメートルのそれを使えば、速やかに現場へと辿り着く事が出来るだろう。

目指す場所はもうすぐ其処だ。

足元には、三人の男が倒れている。  
曲がりなりにもレベル5だ、この程度の雑魚にはさすがに負けない。

「風紀委員ですの…、ってあれ？」

間抜けな声に振り返る。

「さあ、やっと来たよ！」

白井黒子。

原作の主要人物である変態だ。

「…風紀委員かね？随分遅い。お蔭でもう方が付いたよ」

挨拶は重要だ。

「の場合は、特に。

「事情は判りかねますが…、取り敢えず御同行願いますの」

やつと、やつとだ。

来ないのならば来ない方が良かつたが、必要に為つたのならば仕方無い。

本当に…、仕方ない。

だが、遣らなければ駄目だから。

そうしなければいけなくなつて仕舞つたから。

嫌々遣るのも如何かと思うが、嫌でも遣らなきや駄目な所がこの街の嫌な所だ。

「ふむ、まあ良いけど……。反省文免除とか、ダメかな？」

原作に、闇わらう。

「駄目に決まつてますの、さあ早く此方にいらして下せ」まし

これはその第一歩

「はあ……。わかつたわかつた、ほら、空間移動能力者だろ？早く連れてつてくれ」

物語は、動き出す。

はああ……。

## 第2話 遭遇から決断まで（後編）

感想をトマロ、エリビートマロ。

### 第3話 決断から布石まで

「何で…、あんな事をしましたの？」

とあるビルの、とあるオフィス。

様々な情報と機材が詰め込まれたこの一角には今、一組の男女が向かい合つて座っていた。

原作は原作でもアニメ準拠らしい。

「ふむ…、襲い掛かられのでつい、ね。いやー、やっつけった  
やっつけった」

「やっつけたじゃありませんの。こくら身を守るためにとはこえ、肋骨を折るのは少しやつ過ぎです。… 一歩間違えば大変な事になつて居ましたわよ?」

書庫よりもDFE値が高いとの専らの噂で有名な、DIE<sup>パンク</sup>。風紀委員第一七七支部にてこの俺、回鋸意澄は黒子ちゃんと素敵な雑談に興じていた。

…ぬ、お茶が切れた。

「飾利ちゃん、飾利ちゃん。お茶のお代わりを、くれないかな？」

「はい、只今」

話し始めてかれこれ一時間。

実に楽しい会話の応酬に、頬と口の緩みを抑えられない。

ああ楽しい楽しい。

対して、黒子ちゃんの表情は優れない。

まるでカブト虫の幼虫を噛み潰したような顔だ。

如何した事だらう？一時間五十分前から」の顔である。

…悩み事、だらつか？…ならば相談に乗つて上げねば！

「黒子ちゃん、先程から可笑しな顔をしているけど。悩み事かい？…お兄さんに解決できる事なら、可能な限り協力しよう。まあ、話していいんだ？」

「…では、いい加減早く名前と通う学校を教えて下さいまし。ああ…、この質問ももう何度目になりますの？…全く、折角のお姉様

との放課後が…。『無しですの』

黒子ちゃんの恨めしそうな視線を真正面から受け、ついつい抱き締めたい衝動に駆られる。

まあやらないけどね。

そんな事をしたら。

嫌われちゃうから！

「所で黒子ちゃん、今度お兄さんとお化け屋敷に行かないかな？お兄さんはお化けに詳しくてね。今、唐傘お化けがアツいんだ」

『データしょひざーデーター！

「……もう良いですの。諦めましたの。…好きだけ喋って下さいまし、正面から、吸けて立ちまその。わあ…どんどん来いですの…」

…「

黒子ちゃんが、燃えている。

蠅燭は、最後に一際大きく燃え上がってから消えると謂いつ。

これは……！ 覚悟したと、そう云いたいんだね？！

では、期待に応えるとしよう。

「飾利ちゃん、今度時間開いてるかな?...美味しいカブト虫の幼虫が有る店を知つてゐるんだ。今度一緒に、どうかな?」

さあ。

どうだ……っ！

「ええっ…カブト虫、で、「ちよつとおお！貴方は何がしたいんですのぉおおー！」…し、白井さん！抑えて下さい！」

さすが、さすが黒子ちゃん……！

素晴らしいリアクションだ！

黒子ちゃんなら、出来ると思ひていたよ...!

黒子ちゃん。

君が。

ナンバーワンだ！

「ふふつ。可愛いな、黒子ちゃんは。お兄さんにはそんなキャラ崩壊、とてもじや無いけど出来ないよ。君には負けたよ、ぐるぐる何なんですかー何なんですかー意味が分かりませんのおおおおー！もう嫌！もう嫌ですのおおおおー！」…………あれ？

振りつて何ですのあああ…………つ！

黒子ちゃんは、最後にそう叫んで机へと突っ伏した。

一  
体。

何が彼女をこんな有様になるまで追い詰めたのか。

久し振りに実家で食べた晩御飯の味の様に、甘くて優しい俺の頭脳では、皆理解できない。

仕方ない……、そつとして置いてあげよ。」

思春期なんだから、こんな事も有るさ。

どんな奇特な行動で在りうと、広く受け入れて上げるのもまた、年長者の務めだ。

「黒子、大丈夫ー？」ああ、駄目だこりや。完全にダウンしちゃってるわ。…あ、ええっと…まあいいや、あんたも。いくら黒子で遊ぶのが楽しいからって、少しば自重して上げなさいよね。こんなのも、一応大事な後輩だから」

美琴ちゃんのアドバイスで、やつと得心がいった。

そうか、手加減が必要だつた訳か。

さすがレベル5、見た目は子供でもその高い知能には脱帽せざる負えない。

勉強になる。

だが、そんな彼女の言葉にも、些かでは済まない程度に聞き捨てならない部分があった。

今度は此方がアドバイスする番だ！

「美琴ちゃん…。あんた、だなんて、そんな他人行儀な呼び方は止めてくれよ。俺の名前は、回錠意澄。…意澄と、呼んでくれない

かな?」

仲良くじゅうわせー・美琴ちゃん!

「……あー……、わつ。……分かつたわ、じゃあ意澄さんで。……回錠意澄、つて……、うーん。なんか最近、どつかで聞いたような……」

「「……かつ、回錠意澄!…?」」

驚愕の声が一重に響く。

それきまで、自身の存在感を、空気中の「酸化硫黄もかくや」と云う風に薄くしていた涙子ちゃんまでもが叫びを上げる。

おやかこれ程までにほしゃ『お玉すとま』。

よつほど寂しかつたらし。

「知つてゐるの? 初春さん、佐天さん」

「知つてるも何も……、新しいレベル5ですよ! 御坂さん! ついこの間! コースでやつてたじやないですか! 第4位!」

「ああつー……わつー! 其れよ其れ! そつそつ、やつと思ひ出したわ

!

「まつたくもー、御坂さんつて、たまにドジな所有りますよね

「佐天さんそれ、ジー言つ意味よもー」

これが、有名税か

成程

以外と、気分の良いものだな……。

「でも…何て言いますか…、御坂さんの件で…。何となく、察してはいたんですけど…。その…。レベル5の方って変わった方が多いんですね…」

なんと...!

飾利ちゃん！

君からも、素質を感じてはいたけど。

まさか、そこには気が付くとは……！

風紀委員第177支部の人員は化物つだつたのかい？！

「ふつ…、そうだね、その通りだ…。レベル5つて言う人種はね、お兄さんを除いたら、皆変人ばかりなんだ。…また一つ、生活の知恵が増えたね。これからも、どんどんお兄さんに聞いてくれ。沢山の事を教えて上げよ!…」

頼れるお兄さんポジションは、この俺を於いてはは他に居ないからね。

「これから…、青春を謳歌する日々が日に浮かぶよつだ…。

「…確かにそうみたいね…、間違つても私はここにと同様組みには居ないけど…」

あれ…?

美琴ちゃんに認知症なんて設定、有つたつけ？

まあ些細な事は脇に捨てとこい。

随分長くなつてしまつたが、原作キャラとの接点はこれで持つ事が出来た。

…ほとんど、仕事に近い事だったとはいえ。楽しめる事が出来た  
し…、そこは良しとしよう。

何はともあれ幻**レベルアップバー**想御手までにコントラクトを取れて良かつた。

…これは俺のために確実に必要になる事だ…、外したとなれば笑  
い事じゃ済まされない。

「所属は長点上機学園だ。…黒子ちゃんにも伝えておいてくれた  
まえ。それじゃ、お兄さんはこれから用事があるから。帰らせて貰  
うよ?…また近いうちに会おう。…バイバイ、またね」

そう伝えて俺はその場を後にする。

マジカルパワード  
超機動少女カナミンはとても面白いことだけ言つておいつ。

録画予約は、人類の宝だ。とも。

夜の学園都市。

見つめるだけで吸い込まれそうな暗い路地裏を、少女、滝壺理后は走っていた。

彼女の能力は能力追跡。<sup>AIMストーカー</sup>他者の能力の特徴、つまりAIM拡散力場を観測する事が出来る能力は、能力体結晶。通称で体晶と呼ばれている薬物を飲まなければ、高レベルを保てない事を差し引いても、有用かつ強力な代物だった。

少女、滝壺理后は。『アイテム』の名前を持つ、学園都市暗部の少数精鋭で知られる組織に所属していた。

アイテムでの仕事では、その能力を用いた探索、解析を一手に担ってきた彼女は、この学園都市に於いて能力者間の追跡。或いは逃走では誰にも譲らないと、過信では無い自負を抱いていた。

たとえ体晶を使わなくても。

自分一人だけを逃がすのに、梃子摺る事は有つても、無理な事は無いと。

その筈だったのに。

「つ、まだ…」

彼女は、自身の能力におんぶ抱っこで頼り切っていた訳ではない。固有のA.I.Mがある程度観測を出来さえすれば、暗部で得た大量の経験から、相手の思考パターンを五分も有れば算出できる程には使いこなしていた。

だから、普通なら既に敵の追跡を振り切って。仕事が終わり、各自が思い思いの場所に散つて行った仲間達と連絡を取り合い、保留なり報復なりの対応を練つてている頃なのだ。

だが、敵は普通では無かつた。

常に此方の位置を把握している様に追い続けている事も。

かなり走っているのに、地下でも無しに携帯の画面表示が圏外から変わらない事も。

確かに普通ではない。

だが違う。

そんな物ではない。

どんな能力でもこんな事はあり得ない。

AIM拡散力場が幾つにも変わるなんて。

「こんな事は…、有り得ない…っ！」

「ふむ…、追いかけっこもこれ位で良いかな？疲れも大分溜まつたみたいだし、…。うん、そろそろ頃合いだね」

背後から声が響いた。

半ば直感的に悟る。

追い詰め、られた。

「おお、その顔は中々くる物があるね。仕上くんが惚れるのも良く分る…。あ、これ言っちゃ駄目な奴つだつたわ、…忘れさせる事柄が増えてしまった…。おっと、だからと言つて時間は取らせないからね？これから用事が有つても大丈夫だ。直ぐに終わらせるから」

振り返ると、もう目前に迫った男が一方的に喋り出した。

何を言っているかは理解できないが、自分にとつて良くない事がこれから起ころのは間違い無さそうだ。

だが抵抗は許されそうにない。

もう、逃げられない。

「今から何をするか気になる様だね？…気になるよね…？…ふつ、まあ良い。ちょっとここ…、脳みそを見て貰うだけだよ、四〇分位したら解放するから安心してよ。当然、後遺症も残らない。何で言つたつて残したら予定が狂つてしまつからね」

言いながら男は此方に迫る。

脳みそを見る、という事は…。テレパス精神感應系の能力者だろうか？

だとしても、A.I.Mを乱すほどの精神干渉など尋常から外れ過ぎている。

机上論では可能かもしれないが、たとえレベル5の心理掌握でも、出来るとはとても思えない。

レベル5…、レベル5…？

そう言えば新しいレベル5が誕生したと。少し前にコースでやつていたような…。

つ！

やつと気が付く。

考えてみれば当然ではないか…つ！

レベル5になる程の逸材が、今まで人伝ですら聞いたこと無かつたなんて…、その手の情報に目敏い学園都市にある以上。今まで戸籍すら無かつたでもない限り考えられない。

戸籍が無い。

つまり『チャイルドエラー置き去り』。

学園都市の裏。

普通じやない能力者を作るのに、苦労はしないだろ？。

「その通りだ、と言つた方が良いかね？…こんな格好良いセリフ、一度言つてみたかつたんだ…。ふつ…、理恵ちゃんには、感謝しなきやね」

男の手が此方に伸びる。

開いた掌には、今までどんな敵からも感じた事の無い。言い知れない、巨大な不安を搔き立てられる、余りに異質な力が渦を巻いていた。

そして。

ツツツ！・！・！

声にも成らない悲鳴が木靈した。

「ああーあー、…何度もやっても慣れないなー。これは

男の声は、無情なまでに淡々としていた。

…………

…………

回鋌意澄が。

女の子の尻を、これでもかと追いかけまわした。

その翌の日。

唐突にしてシリアスフォームへと変身し、レベル5の威厳をドン引きするほど見せつけた彼は、今、自室のパソコンを操作してネットサーフィンを嗜んでいた。

「ふむ……何とか見つけられたか……」

『ヘルアッパー』  
幻想御手。

彼の予定に必要となる、原作のキーアイテム。

それを探していたのだ。

幻想御手。

簡単に説明すれば、手軽に能力のレベルを上げられる夢の音楽である。

既にかなりの人数が使っているであろう事が、簡単に想像できる、この青髪ピアスの関西弁より胡散臭いアイテムはしかし、使用者を昏睡させる素敵仕様が搭載されていたのだ！

これは何も、夢は寝て見る物だと云つ教訓を若者たちに与えるための物とか、当たり前だがそうでは無く。

ある先生の悲願を叶える為の、ある意味では本当に、夢のアイテムで有るのだ。

尤も。

それを利用してやるうなどと考へている俺が語ったのでは、嫌味にしか聞こえないだろうがね。

… もて、と。

これで、大方の準備は整つた訳だが……。

…布石は多いに越したことはない。

「よい、しよう……とおー！」

まずは、布石の布石から……、つて処かな？

## 水穂機構病院。

虚空爆破事件の犯人が昏睡状態に陥った、との知らせを受けて急遽この場に足を運ばせやつてきた、白井黒子と御坂美琴は混沌の最

中に居た。

「……」ひりが、今回の件で応援に来て頂いた、大脳生理学専門チーム所属の木山春生先生と…」

「…………」  
「自分だけの現実及び能力者に於ける脳構造の変異・活動観測研究室室長代理の回鋸意澄お兄さんだ。ふふつ、久し振りだね、黒子ちゃん、美琴ちゃん。元気してたかい？」

…………

「…………はあああああーーー?」

カブト虫の幼虫型饅頭を、初めて目撃した様な顔で黒子ちゃんと美琴ちゃんが叫び声をデコエットさせた。

やはり俺が見込んだ田に狂いは無かつたらしい。

見事なまでに驚いてくれた。

「君たち……ここは病院だ……少し静かにしてくれないか?患者さん達に迷惑がかかつてしまつ……」

「脱ぎ女に常識を諭された……」

騒がしい彼女たちは見ていて飽きないが、何だかんだでこじら辺  
が正念場だ。

割と真面目に頑張らねばならない。

果たして、上手く事が運ぶかどうか。

まずは、<sup>AIMパースト</sup>幻想猛獸だ。

…あんなグロいのの相手だなんて。

…気が進まないなー。

### 第3話 決断から布石まで（後書き）

感想、指摘、評価。

どんどん下へ。

## 第4話 布石から開戦まで

「ふむ、では解散。各自、役割を確りと果たすよう」

七月二十一日。

レベルアップ

幻想御手事件の終結を、ついに明後日へと控えた今日。

既に授業が始まり、学生ならば登校していなければならぬ筈の午前九時。

この俺、『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>と回錠意澄は、洗脳しておいた三十人ほどの『電撃使い』<sup>エレクトロマスター</sup>を伴い、兼ねてより練つていた計画を実行に移さんと路地裏にて最終調整を施していた処だった。

『学習装置』<sup>テスタメント</sup>の真似事も楽じやない。

高レベルの電撃使いともなると、『自分だけの現実』<sup>パーソナルリアリティ</sup>ならなければ生体電流を直接操つて無理矢理に体の自由を取り戻されかねないので、他の能力者に比べて少し難しいのだが。

思考能力や運動機能まで奪つて仕舞つては意味が無いし、やり過ぎれば『自分だけの現実』<sup>パーソナルリアリティ</sup>に影響が出てしまうし。

能力柄、『自分だけの現実』<sup>パーソナルリアリティ</sup>に詳しい俺で無ければ、レベルを下げずに洗脳するなんて芸当は不可能なのではないだろうか？

まあ、何はともあれ上手くいって良かつた良かつた。

あの手駒たちには頑張つて貰わねば。

原作では、レベルアップ幻想御手を使ったのは一万人程度だったようだが、その程度では足りな過ぎるからね。最低でもあと倍は欲しい。

さてさて、では俺も精々働かなければ。

研究者共の助けになるのは、盗んだバイクで走り出したくなる位に癪に障るが、背に腹は…、変えられない事も無いのだが。無理して変態になる必要も無いので頑張らせて貰おう。

高レベル能力者の巣窟、常盤台中学。ネットワークに取り込むには打つて付けだ。

学舎の園は、何処だつたかなー？

一昨日。

木山春生を交えた幻想御手講習会にて。  
レベルアップ

アドバイスもそこそこに黒子ちゃん達には洗脳をかけまくつておいたおいたので、今頃は気分が悪くなつて保健室で耳栓して眠つている事だろう。

彼女たちは幻想御手レベルアップを聞く事は無い。

彼女たちに邪魔立てされる心配も無い。

勝負は日常的に始まつてゐるのだ。こんな事に抜かりなど有る訳がない。

常盤台へのスニーキングは恙無く完了する事請け合いだ。つらつらと雑念をしながら歩を進める。

さすが名門校、授業中に廊下を出歩く不良は到底無縁と見える。

お蔭で監視カメラをやり過げただけで良いので、楽タイーゼィーこの上ない。

専門外の能力は、使うと疲労感がマツハで気持ち悪いのだ。認識力がマツハなのは事実なので、間違いは言つてない。

うん？

入口に有つた地図によると放送室はこの辺りの筈なんだけど…、あれー…？

……迷つた…？

何て事でしょ。

準備万端と宣言しておきながら。まさか。道に迷つなんて…。

どうしよう…。人に聞ければ、早いんだけど…。うん。

丁度、向こう側から教師らしき人があつてきたり。恥を忍んで聞いて見る事にしよう。

「すいませーん。放送室が何処に有るか分からんんですけど、教えてくれせんか？」

すると教師らしき人は、少し驚いた顔をして見せて、一拍置いて喋り出した。

「…放送室？すぐ隣に有るじゃないか」

そう言つて、教師らしき人は俺の隣の扉を指し示す。

指し示した指の先には『STUDIO』と、飾り文字で書かれた文字板が。

…日本語使えよ！飾るなよ！

あまりと言えばあまりな落ちに、脱力を禁じ得ない。英語には慣れて無いのだ。

「一つ君に聞きたいんだが」

教師らしき人が何か言つている。まだ居たのか？鬱陶しい奴だ。

「…君は一体…、誰なんだ？」

何かと思えばそんな事か。

ふう…、やれやれ。全く、ため息が出ちやつた。

「そんな事は如何でも良いから適当に首でも絞めて氣絶してくれないかな?」

「…、仕様が無い奴だ…。今回だけだぞ?」

最後の言葉も早々に、教師らしき人は自分の首を手でつかむ。

あまり時間を立てずに、教師らしき人の体は崩れ落ちる。

実際に面倒くさい奴だった。こんな事、言つまでも無く自分でやって然るべき事なのに。全く、最近の教師は…。

面倒くさいと言えば、この放送室の扉もだ。

軽く調べた限り、電子ロックなのが無理に開けようとすれば、何やら何処かに知らせが入るように出来ているらしい。かと言つて合意鍵など持つてる訳もない。

…仕方ない。

正面突破と、洒落込もつではないか…本当は…もつとスマートに行きたいけど…

そして、万感の思いを込めて腕を振り上げる。

バコオツ。と、堅い扉が無理矢理ぶち破られる清々しい音が廊下に響いた。

此方の棟に授業をやつてる教室は無いので、大っぴらに知れ渡る心配は無いが。無理に開けた以上、アンチスキル警備員をやつてる教師やら、風紀委員をやってる生徒やらが来るのも時間の問題なのははっきりしている。

それまでに、最低でも八割は終わらせなくてはならない。

これ位は想定内。

幻想猛獸までの、これが最後の布石だ。

彼女たち、風紀委員の生徒一人と警備員の教師一人の計三人は、放送室の前へとやつて来ていた。

授業中、教師に呼ばれたと思ったたら、突如として流れ出した謎の音楽。何が起きたか突き止めようと放送室に急いで見たが、辿り着いて目に入つたのは、倒れた教師とぶち破られた部屋の扉。

何が起きたかは察しが付いたが、何のために放送室？

「犯人、どうやら一人しかいないみたいですね」

「此処から確保は出来そうか？」

「いえ、確保となると、やはり目で直接見ない事には…、すいません」

せん

相棒は精神感応系の能力者だ。

相手の思念を感じ取れる力は、この様な場面では大変役立つ。

対象を視認しなくても、精神を縛る事が出来たら言つ事は無いのだけど…。

それより犯人の目的は何だ？

態々音楽を流しに此処へ来たのも謎だが。一人で来たと云うのはもつと分からぬ。常盤台を甘く見て居るだけなら、良いのだけど……。

いや、今考えるのは止そう。取り敢えずは確保が先決だ。

先生も相棒も同意見なのか、此方を向いて一つ頷き立てた指で数え出す。

三。

二。

一。

突入！

立てた指が無くなると同時に、私たちは身を翻し開いた穴から部屋の中へと雪崩れ込む。

が。

凄まじい勢いで飛んできた椅子が出鼻を挫く。

しかし、私たちの前に立つた先生がそれを軽く受け流す。

最近思うのだが、常盤台の人達は果たして私達と同じ人類なのだろうか？ 能力者の私が言つのも何だけど、色々可笑しいのでは？と思ってしまう。

主に、常識とか。

特に、寮監とか。

超電磁砲を取り押さえた時は、驚くより先にまず首を傾げたのを覚えている。

何だろ？…、能力を磨く前に筋トレとかした方が良いのかな…。

そんな、常識外れの筈の先生が唐突に動きを止める。

傍らの相棒が一瞬その顔を驚愕で染め、また直ぐに集中を始めた。

「気をつけて下さい！那人、私と同じ能力を持つてます！」

同時に、先生は再び動き出した

相棒の切り返しは早い物だった。鮮やかと表現しても差し支えない。

だが、それでも遅かった。

目の前の、一見すると真面目で誠実そうな少年はあまりに速かつた。

半秒もしない内に先生は、少年の細い腕につかみ取られ壁に叩き付けられる。

バキイツ！と、壁に鱗が入り、それに混じり何かが折れる音が耳に入る。

ツツー！息を飲み、次いで怒りが頭の中を支配する。ビュンショウもない激情が、感情の全てを押し流す。

「ツ、よくも…先生をおおおツツー！」

怒りに任せ能力を行使する。狙つは奴の右手足。

その程度ならば、直ぐに処置すれば死ぬ事は無い。

だが、手足が無くなる恐怖は味わつてもいいつー！

私の能力は『ニアロショーター 風力使い』 文字通り、風を自在に操る念動力の一形態だ。

小規模の真空刃を生成し、憎きあの男の手足を切り捌かんと音速に迫るスピードで浴びせかける。

じぱっ、と赤い飛沫が宙に舞つ。

しかし…。その光景は、望んだ物とは全く違う物になつた。

思考の追いつかない事態に、私は顔を強張らせる。

…無い、のだ。

…目の前の男の、体の、右半分が。

私は唯、手足を軽く切り飛ばそうとした筈なのに。

何時もなら、たとえ感情が溢れても、こんな簡単な制御をしへじる事なんて無いのに。

私の狙つた場所と、その周辺は。

丸ごと、細切れの肉になつて。

部屋中に、飛び散つた。

私  
…。  
。

人を、殺しちやつた…？

「……おおおう…。 痛いなあー、全く。能力の制御はよちやんとしてくれないかな？危ないよ？…体重が二十キロ位減つちやつたじゃないか」

その考えは、最悪の形で、すぐに裏切られる事となつた。

「ほら、呆けている時間は無いよ？」

「……つそ……。『<sup>デュアル</sup><sup>多重</sup>スキル』……？」

理解を越えた出来事が起きた時。人の頭は、驚くのでは無く止まってしまうらしい。

今それを、初めて実感してしまった。

有り……得ない……。

横では。

相棒が床に膝を着いて、目を見開き、体を震わせている。

完全な、敗北。

これまで、か。

しかし、此方の状況もお構い無しに男は喋り続ける。

「ふむ、多重能力なんて、高尚な物じゃないよ。……表現するならば、……、そう!『<sup>ハーフスキル</sup>多角能力』!って処が妥当かな?……おっと、そんな事より早く記憶を消さなければ。後、この部屋も燃やす……の

は、時間が足りないから。…溶かさないといけないね。君が景気良くにやつたお蔭で、血がこんなに派手な事に。…やれやれ、また食費が変態な事になる」

言いながら近づく男はしかし、この惨状に於いて、自分の体が半分吹っ飛んだにも拘らず、恐ろしい程に泰然としていた。

まるでこれが、当たり前の状態だと語る様に。

「バイバイ。次に会うとしたら、初めまして、だね」

私の意識は、そこで途切れた。

常盤台に潜入し。

女の子の心に、深いトラウマを残しては取り扱つたりした。

その日の夜。

体は再生したが、破れた服は戻らない。

そんな理不尽に対抗するため、人の目を盗んで、見つかってはいけないとびくびくしながら自宅に戻り新しい服に着替えて…、なんて面白いイベントが無事に終わる訳も無く…。

だと思つてワクワクしていたら、本当に山も落ちも無く帰つてしまつた。

……。

いや、別に良いんだけどね。

でも上條くんなら絶対何か起ころじやん？

それが如何したと言われれば、まあ、そつなんだけじゃ。

……ほら、だから、何で言つか……、ねえ？

.....。

そんな訳でやけ食いだ。

夜景の見える、レストラン。

其処で俺は食糧庫の限界に挑んでいた。

今宵はここが戦場だ。

常盤台の件で、一度体重も減つてた所だったしね。

油断をすれば直ぐこいつなる。

腕一本は元々くれてやる予定だったが。まさか、常盤台の奴が制御を誤るほどのポテンシャルを幻想御手が秘めていたとは。

見立てが甘かつたと言わざるを得ない。

しかし、洗脳した電撃使い共は、どうやら上手く幻想御手をばらまいてくれたようだ。

やはりハッキングの技能は何かと役に立ってくれる。学校のスピードまでネットワーク制御の学園都市なら尚更だ。

常盤台はその辺が厳しいから俺が出向いた訳だが……。

それあの様だ。恥ずかしいつたら無い。

でも、予想外は何事にも有るから仕方ないと思つんだ。

うん。仕方ないよね！

と。

言い訳は、これ位にしてだ。

今は、折角の晚餐を、楽しもつではないか！

「…あ、すいません、ここからこのページまでの、全部持つてき  
て下さー」

「ぜ、全部で御座いますか？」

ウェイターが、にこやかに狼狽える。

頭だけで曲芸をやつてみせるとは。面白いパフォーマンスだ。

この店のサービスは中々行き届いている様で、とても気分が良く

なる。

「ええ、全部、一皿ずつでお願いします」

気分が乗ったで追加注文。

此方もこいやかに直書きする。

「か、かしこまりました、ごゆっくり、当店での時間をお楽しみ  
ください」

そしてウェイターは去っていく。今度はこいやかに引き籠つてい  
た。

最後までサービスを忘れないとは……、流石だ、早くもまたここに  
来たくなってしまった。

そう言えば、割とそこそこ頼んだのは良いけど。テーブルに收ま  
り切るか少し心配だ。

まあ、次の皿が来る前に食べ切れば問題無い。

さて。

早く来ないかなー。

「がッぐ、ネットワークの… 暴走?」

木山春生。

今回の事件の首謀者。

即ち、幻想御手をばら撒いた、張本人。

自らが通う、常盤台中学の生徒すら巻き込み、多数の学生処か、教師やその他大勢の大人まで、無差別に昏睡させ、被害者を増やし

続けたその元凶。

総数を約三万にまで増やし、束ね、ネットワークに組み込み、それこそ膨大な力で振るわれた、目の前の木山春生曰く『<sup>マルチスキル</sup>多才能力』を下した御坂美琴は、その光景に、ただただ呆然とする事しかできなかつた。

「いやつこれは…虚数学区…の」

常盤台中学への襲撃を含む、不可解な事はまだまだ残っていたが、取り敢えずこれで一つの終わりが来る。

そう、思つていた。

『ボコリ』、と何かが蠢いた。

…生まれ、る。

何かは分からぬ。

意味も分からぬ。

だが。

レベル5としての…、否。

唯一能力者としての勘が叫んだ。

まだ、終わらない。

『…

ツツツツ！…』

悲鳴のような、産声とともに。

『ナニカ』が、姿を現した。

「ふむ、やつてゐね、うん、やつてゐやつてゐる」

「なあッ…あんた…じゃなくて、意澄さん…今まで何やつてた  
のよー」

「…何でも良いだろ、それは、今こりでは意味が無い」

「……さて……、来るぞー！」

怪物たちの戦いが、始まつた。

## 第4話 布石から開戦まで（後書き）

感想、評価、指摘。

たとえどんな時でもお待ちしております。

## 第5話 開戦から協力まで

レベルアップ  
幻想御手をばら撒いたのには、理由が有る。

当たり前だが、それは木山先生を助けよう、とか。美琴ちゃんを邪魔しよう、とかではない。

というか、そんな理由で原作に関わろうなど正気の沙汰とは思えない。

俺は元々、奨学金を当てに、一ート暮らしでもHンジヨイする事を望んで表へ出てきたのだ。

時に買い物をして、時に食べ歩きをして、時に友達を作つて。時には家に籠もつて不健康に徹夜でゲームをするのも良いし、時には学園都市から出て、山や海で健康的に自然を満喫するのも良いだろう。…間違つても戦うために出てきたのではない。命のやり取りなんて論外だ。

それでも、やらなきゃいけない。

…恐らく、アレイスターのプランに組み込まれてしまつた以上、原作知識に頼らなければ、本当に死んでしまう。

レベルアップ  
幻想御手の特性は、使用者の脳波の統一と、それに伴うAIM

拡散力場の収束だ。

俺の能力が、<sup>デュアルスキル</sup>多重能力の真似事が出来るのは、本当に今さらだが。

それには、その能力を理解しなければならない。

実践をするには、まず観察から。

基本中の基本…、といふか、そもそもの大前提だ。

俺自身、その大前提の、例外ではない。

理解とは、即ちパターンの解析。

実例を見れば見るほど、パターンが多くなるほど、理解はより深く確かな物となる。

学園都市に有るそのパターンは、実に膨大な数に上るが、その内の約三万は今まさに眼と鼻の先に存在している。

後は、理解するだけ。

A.I.Mバースト  
幻想猛獸には、俺の糧となつて貰う。

あんな、形を崩した胎児といつが、触手といつが、本物に怒られ  
そうな天使といつか。グロいの一言でニコアソスが伝わる雑種に  
頼るのは、甚だ遺憾だが。

これも生きるためだ、我慢しよう。

さて…、戦いの、始まりだ！



「オツーと、形容できない何かで形作られた触手が、勢い良く振  
り抜かれた。

あの化け物が、動き出したのだ。

呆けている暇はない。

体の生体電流の動きを加速させ、無理やり後ろへとび跳ねる。

同時に、雷撃の槍と、砂鉄の剣で化物が放つ数々の攻撃を迎撃する。

電撃を、砂鉄の塊を、強力な磁場を、電気が出す熱による空気の爆発を。

自身の力が許す限りの、あらゆる手段を以って、あの化物の攻撃を潰し、焼き、叩き、壊し、切り刻み、逸らし、無力化していく。

一見すると拮抗しているこの戦闘、しかし、間違いなく彼女は押されていた。

御坂美琴は、焦っていた。

化物の出現自体、大いに焦燥に値する出来事だがしかし、今の彼女はそんな小さな物に思考を割く暇すら無かった。

…攻撃が、通らない…っ！

あまりにぶ厚い、能力の弾幕。

瞬間的な出力では勝っていても、暴力的に過ぎる数の奔流が、彼女の攻撃を一つ、また一つとすり抜け、彼女のもとへと迫り来たの

だ。どれも避けてはいる物の、体力と氣力は着々と削り取られ、それに比例して体の動きを鈍らせていく。

今でこそ何とか為つてゐるが、あの怪物がまともな人間の範疇に収まると思えるほど、樂観的な理解力は持つていない。

此方の体力に限りがある以上、いづれ押し切られるに決まつている。

敗北。

脳裏を過ぎたその一文字は、否が応でも彼女を焦らせ追い詰めた。

御坂美琴は、人に頼るのがとても苦手だった。

レベル5としてのプライド、対等と呼べる人間の数の少なさ。

自分が、助けを求める程の力を持つた存在自体、殆どいないのだ、頼るのに慣れると言うのは、彼女にとってはひどく酷な事だった。

それらの要因が、彼女の選択肢を狭め、思考に膠着を齎していた。

しかし、彼女は、この時の彼女は、一人では無かつた。

「……お兄さんを忘れるなんて、酷い脳みそだね、美琴ちゃん」

学園都市が誇る、超能力者 レベル5 その第四位。

彼女が知る由もないが、今のこの状況を作り出したのは彼なのだ。  
その動機も、到底納得の行く物では無いだろう。

だが、彼が戦いに来たといつのは紛れもない真実なのだ。

……、行ける、……！

彼女の顔から、既に焦りの色は無くなっていた。

「ふむ、ではまず、あの雑種の『核』を探す事から始めようか、

絶えず飛んでくる雑種からの攻撃を、鎧の様な姿に見た目を変えた己が拳と、念動力の多彩な応用を以つて、次々と受け流していく。

美琴ちゃんのお手伝い、つまり雑種の駆除をする為に、その具体的な方法の相談をする。

こんな所で死にたくはない。そんな些細なお願いを実現するには、美琴ちゃんを如何にして有効活用出来るかが重要なポイントだ。

「『核』？…。そんな物が本当に有るの？…、ていうか意澄さん…。それって、今の多重能力…」

「見る限り、奴の正体はAIM拡散力場の収束体。力が収束している以上、収束させるための核は有つて然るべきだ。…お兄さんの能力についてはまた今度、機会に恵まれたらね。今から、その核を探し出す。…直接的な戦闘も、引き続き手伝うけど、あくまで手伝いしかできない。もう少し、頑張つて貰うよ?」

喋りながらも、迎撃の手は緩めない。

先程から、俺が戦闘に加わったお蔭で攻撃を抑えるだけならば随分楽になつた。美琴ちゃんの顔にも余裕が出てきている。油断など、とてもやりようは無いが。しかし、解析作業に多くの演算領域を使えるのは美琴ちゃん様々と言つた所だろ?

レベル5の肩書は、飾りじゃない。

だが、倒すとなれば事情が変わる。

俺には、<sup>A.I.Mストーカー</sup>能力追跡の能力がある。滝壺理<sup>后</sup>を襲つたときには手に入れた物だ。

解析作業が完了すれば、この能力を使い幻想御手のワクチンソフトなしで、暴れに暴れているあの生意気な雜種の力を削り取る事が可能だろ<sup>う</sup>。それに、核の場所は既に先程から特定済みだ。

他人よりも、多くの事象を知覚できるように機能を変化させた俺の脳と感覚器官は、たとえ普通は見えない物も、容易く捉えて離さない。ならば後は美琴ちゃんの超電磁砲<sup>レールガン</sup>で核をぶち抜けばいい、それで此方の勝利、一件落着だ。

尤も、美琴ちゃんの体力が続けば、の話だが。

俺の能力では、美琴ちゃんの超電磁砲<sup>レールガン</sup>に並ぶような大出力を叩き出す事は、現状では不可能だ。

ワクチンソフトも併行して使えば自然消滅させることも可能かもしないが、ある理由からそれは期待できない。

つまり、美琴ちゃんが対幻想猛獸<sup>A.I.Mバースト</sup>の生命線になる訳だが…。彼女は、先の木山春生との戦いで、大分消耗している。彼女が何時までもつか…。正直、体力自体は唯の中学生の美琴ちゃんには、あまり

期待できない。

「 ドラク Hで言つ所の、ハーゴンに当たる木山春生が原作より強くなつてゐる事を差し引いても、こんなに消耗が激しいのは少し予想外なのだが…。」

「 …、もしかして、常盤台中学の件に責任を感じているのだろうか?」

それを引き摺つてゐるとか、その所為で寝不足だとか、ストレスになつてゐるとか?…お蔭で、コンディションが最悪だとか…?」

「 …、」

「 やべえ…。」

「 うわあ…。」

「 どうしよう…。」

「 俺が、原因じゃん…。」

「 …いや、いやいやいや。」

確かに、初めから隠れて見ていた限り、何か何時もより疲れてるなーとか、一寸思い詰めた感じがするなーとか、何となく感じては

いたけれど！いたけれども！

でも俺じゃ無いかもしれないし！ 不意に来た腹痛とかかもしれないし！

ないし！

上条当麻の所為で夜も眠れなくなつてただけかも知れないし！

レベル5でも人間なんだから！ 理由も無く調子が悪くなる田もあるつて！

「み、美琴ちゃん！付かぬ事を聞くけど、疲れているみたいだね！木山先生と、交戦した様だけど、本当にそれだけなのかな！？」

「……っ！そり……、ね。確かに、そうかも知れないわね。……黒子にも言われたわ、疲れてるみたい、つて。……常盤台中学襲撃事件、テレビとかのニュースでは伏せてるみたいだけど……。意澄さんは、知ってるでしょ？ 結構、噂になつてるし。自分では自覚ないんだけど、結構気にしてるのかもね。私」

疲れているのに、随分長く喋つてくれた。

美琴ちゃん曰く、不思議な事に、原因は俺らしい。

……うわああー……。

……だが、何にせよ、彼女が最後まで立つていられる程の体力が残つてい無いのは如何しようも無い明白な事実だ。

彼女は、間違いなく途中で倒れる。それは、俺の見通しの悪さが招いた結果でも有る。

助ける暇は、いや、それ所か。目の前の化物を倒す手立ては、残されて、いるのだろうか？

…まあ、その時はその時だ。今は、当初の予定通り解析に専念しよう。この話は、目的を終えてからでなければ意味が無い。

解析完了まで、軽く見積もつてあと七分。

あと七分で、目的が達成される。

取り敢えずは、それまで壁になつていってくれれば、それで良い。

原作からの乖離を抑えるために、彼女にはあまり死んでもらっては困るのだが…、俺が生きる為には仕方ない。罪悪感も、切り離せば消えて無くなる。

美琴ちゃん、精々、死なないでくれよ？

意澄さんには驚かされっぱかりだ。

初対面の時のふざけた態度や、病院で再開した時に知った、研究室室長代理という肩書にも確かに驚かされたが、何よりも、その不可解な能力と高度な戦闘技術には、目を見張るという以外に当て嵌まりそうな言葉が無い。

正に出鱈田だ。

始めは、見た事も無い怪物の相手に苦しんでいる様で、正直危なつかしくて心配だったのだが。見る見る内に彼の対応が滑らかな物になり、遂には戦闘中に会話を出来る迄になつたのだ。

パターン解析と、新しい何かの学習は、能力者にとつては基本中の基本だが、これ程鮮やかにこなして見せる人は、学園都市広しと言えど彼だけだろう。…と、言つた、十秒も経たずにあれに慣れるなんて…、そんな人は一人で十分だ。何人もいたら、今まで積み上げてきたレベル5の自信が粉々になる。

ただ、どうも先程から確認する限り、出力の高い攻撃は苦手みたいだ。最小限の力で、攻撃を受け流す事しかしていない。能力の使い方が上手い、と言えば確かにそうなんだけど…。どうも、紙一重といった感じがする。

紙一重と言えば、確かに聞こえが良いかもしないが、それは肉弾戦に限つた話だ。

能力とは、素手で持てる兵器の様な物。重さや携帯性と謂う概念から解放された以上、出力は大きければ大きいほど良い。数が多いのならば、一度になぎ払つた方がずっと効率的だ。彼が、それを分かつていかない筈が無い。

でも、そんな事情が有つても、あれは本当にすごい。…私も真似出来ないかな？「うーん…」、私に最小限つてやっぱり難しいかなあ。

パーソナルリアリティ  
自分だけの現実は、個人の性格によつて結構変わるそうな。同じ能力でも、攻撃面や防御面で、それぞれが違う使い方が出来たり。方向性に違いが出るとか、なんとか。

あれが、意澄さんの方向性なのかな？…確かに、それっぽい感じがする。

私の場合はやっぱり超電磁砲かな？  
レールガン超威力で吹き飛ばす。…正にロマンよね、ロマン。

つて、それだと私がガサツで好戦的みたいになるじゃない！ 私  
だってか弱い女の子なのよ？！ それなのにあいつはびりびり中学生  
とか、凶暴だとか、いい加減にしりつついの！

ふう…、全くもう…。この前だつて私が…、つてこんな下らない  
事考えてる暇はないわね、集中しなきや、集中。

意澄さんは、核を探し出すと言つてくれた。おまけに、直接的な  
戦闘にも参加させてしまつてはいる。私が、疲れているのを見抜いて  
の事だらう。…これ以上、負担を掛けては常盤台の超電磁砲の名折  
れだ。

もう一踏ん張り、しなければ。

そう思つたら、不思議と力が湧いてきた。

今は耐える時だが、意澄さんなら直ぐに核を探し出してくれる。

雷撃の槍を、砂鉄の剣を、雨霰の様に浴びせ掛ける。

潰し、焼き、叩き、壊し、切り刻み、逸らし、無力化し、化物の  
攻撃を確実に遠ざけて行く。

迎撃、迎撃、迎撃、そしてまた迎撃。

迎撃しか出来ない、けど！ 何時もなら、こんなまじめつこじこ

事はイライラするだけ、だけど！

肩を並べて戦える人が居るのが、こんなにも気分を高揚させるなんて！

最初の苦戦が嘘の様に、冴え渡る頭で化物の攻撃を抑え続ける。

時折聞こえる悲鳴の様なノイズは、もしかしたらあれに脳波を取り込まれた人達の心の声なのかもしれない。…皆、あんなに苦しんでいたなんて、知らなかつた。

私は、努力をしてレベル1からレベル5にまで上り詰めた。だから、努力が報われないとか、才能が無いとか、そんな事が本当に有るなんて知りもしなかつた。考えも、しなかつた。

佐天さんが、それで苦しんでいる事にも、気付いてあげられなかつた。

…、こんな私が、何かを言つ資格なんて無いけど、…それでも、一つだけ、はつきりと言える。

『自分だけの現実』を、他の何かに預けるのは、間違つてる。

…間違いは、正さなきやいけない。

あんた達も、そんな所で苦しんでばかりなんて、悲し過ぎるでし

よ？

…今、私達が開放して上げるからね…。

突如、能力の弾幕に覆われていた視界が、拓けた。そればかりか、どんな攻撃が届かなかつた化物の頭に、穴があいている。

そして、その先には…。

「あれが奴の核だ！さあ、打ち抜くんだ！美琴ちゃん！！」

言われる頃には、もう準備をしていた。

不思議な質感の三角柱。

あれほど激しかつた戦場は、たつたこの瞬間だけ、耳鳴りが聞こえて来そうな程の静けさで満たされていた。

指で弾いたコインに、すべての神経を集中させる。

が。

必然の未来は。

この、最後の時に訪れた。

え？。

ガス欠？

そんな。

こんな、終わり方つて。

急激に、体から力が抜ける。

彼女を今まで立たせていた、脳内麻薬の分泌が、一瞬の思考の停止で途切れたのだ。

最早、逃げる事すら叶わない。

死。

人にとっての最悪は、彼女の脳内で、最高のリアリティを以つて想像された。

…だがそれは訪れない。

何故なら彼女は、一人では無かつたのだから。

首と、掲げていた右手首が掴まれ、力強く支えられる。

一瞬走る、火傷にも似た、鮮烈な痛み。

皮膚の下に入り込み、蠢き、溶け出し、融合する。

…この場に居る人間は、私を除いて一人しか居ない。

…意澄、さん…？

「説明は後で、今は超電磁砲レールガンを撃つ事だけに集中して」

そして、体に力が満ちる。

説明の出来ない謎の現象。つまり、これは、彼の能力。

ふと、こんな考えが浮かんだ。

何故浮かんだかは、見当も付かないけれど。何故か確信できる、  
不意の直感。

意澄さんは今、私に力を分けてくれている。

自然と、目に力が入る。

口の端を吊り上げ、不敵に、凶暴に、美しく、晒つて魅せる。

学園都市 序列第三位。無敵の電撃姫が其処に居た。

瞬間。全ての音が消えつ去った。

放たれる閃光。

鳴り響く轟音。

『超電磁砲』  
レールガン

彼女の字。あさな

圧倒的な魔人の力は。

化物の急所を。

寸分の狂いも無く。

貫いた。

…………

…………

「よく頑張ったね、美琴ちゃん……でも、一寸まだ動かないでね  
——？」

今にも踊り出しそうな美琴ちゃんに、先に釘をさして置く。

くつ付けた腕と首を外す前に動かしたら、とても痛グロい事になる。

「そ…、そうだ！忘れる所だつたわ！ 意澄さん、これつてもしかして…。『**肉体変化**<sup>メタモルフォーゼ</sup>』ですか？」

言つてゐる側から、美琴ちゃんが動き出す。

「のまま痛グロくしてやりたくなるな…。うん、折角、格好良く化物を倒したのに、格好悪い落ちが付くつてのも、意外と有りかも…、いや、待て待て。抑えろ、抑えるんだ、俺。

お前は、頼れるお兄さんポジの人間だら？ 頑張れ、お前なら出来るつて。回錠意澄。

「…よく…、気が付いたね。流石だよ、美琴ちゃん、偉いぞ。気が付いた以上分つてると思うが、美琴ちゃんの腕と首に、お兄さんの両手を…、正確には、神経と血管を融合させて貰つた。…実は結構危険な事でね、もつと早く核を見つければ良かったんだけど…。結果オーライと言つてで許してくれ、すまなかつた」

素直に謝罪する、核の位置を、始めから見つけていた事は、言わない約束だ。

「謝罪なんて良いですよ！ああでもしなきや私、死んでたかも知れないんですからー此方こそ、言わせて下さい、その…、手伝つて

くれて、有難う。意澄さんが居なきや、倒せなかつたわ」

美琴ちゃんのお礼が心にしみる。

実に単純だ。こんなに単純で、何時か痛い目を見ないかとお兄さんは心配だ。もう、手遅れかも知れないけど。人助けと建前が有つたとは言え、自分のDNAマップを無条件で渡すとか、気が狂つてるとしか…ねえ。

閑話休題。といった感じで下らない事に思いを巡らせていくと、今回の話で2006年の冥王星並みにハブられていた、黒子ちゃんと飾利ちゃんが慌てた様にやってきた。

そろそろ、潮時かな？

「「めんなさいー!」わ、私が、ワクチンソフトを無くしたばっかりに…。こんな、御坂さん達を、危険な目に…。本当に「めんなさいー！」

「全く、うちの初春は…、ドジも程々にしてほしいですの。まあでも、研究者のパソコンを不用意に触った警備員アンチスキルにも非が有りますの、何だかんだで倒せたんですし…。良いじやありませんか？」

…あの会話に混ざるのは、色々と疲れそうだ。早々に退散をせて貰おうかな?

今回の件で、約三万人の能力のパターンを手に入れる事が出来た。

誤差が有れど、一応原作通りの範疇にも納める事も出来た。結果は上々だらう。苦労した甲斐が有つた。

後は最後の締めだ。

そして、その場を後にする。交渉は、得意じゃないけど、此処まで来たら、やつておいて損は無い。

見てたんだら？ 今から行くよ。統括理事長様？

…………

「やあ、木山先生。久しぶり……って程でも無いかな？釈放、オメテトウ御座います」

「……何故……、君が此処に？」

木山先生の釈放。交渉を終えて迎えに来たのだ。それが最後の締め、と言つ訳だが…、何故、ね。ではまずその疑問に答えて上げようか。何も知らずに協力なんて、そんな、あの子供たちの一の舞みたいな事は、もう嫌だもんね？

「木山先生。巷では、幻想御手レベラルアッパーで昏睡した人が順調に回復しているそうだけど、…何か、心当たりが有るかな？…無いよねー、つくる…。木山先生。貴女の作ったワクチンソフト、交渉には、随分と役に立ってくれた。有難う、お蔭で、貴女の身柄を任せて貰えた。…さあ行こうか、新しいお仕事が待っている」

木山先生の手を取つて歩き出す。

いやー、上手くいって良かつた。三万人が昏睡したままのは、流石に拙いらしい。常盤台を落としたのも、大きかったようだ。…笑いが止まらないね、…つくる。つふははは。

「つま、待つてくれ！それは、如何言つ事だ！」

「意外と鈍いねえ、木山先生。…腑に落ちないでしょ？　あんな短時間で、一度に使用者が増えた事。必要無い筈の、高レベル能力者までもが使用した事。あれで、結構注意深い飾利ちゃんが、都合良くワクチンソフトを無くした事。…これらの事件は、全て繋がっていたんだーっ！…なんちゃって。…どう？楽しめた？今どんな気分？」

愕然として、肩を落とす木山先生。あ、何これ可愛い。

「何故…。何故、そんな事をした。…君は、彼女たちに協力をしていたんじゃないのか」

絞り出す様に呴いた。木山先生がそれを言うのも、中々滑稽だ。

「ふむ、立ち話も何だし、夜景の見えるレストランにでも行こうじやないか。サービスが利いている所を知っているんだ。きっと気に入るだろう」

あそこには、次は誰かを誘つて行くと決めていたから丁度良かつた。木山先生への労いにもなる。イヤー、本当。木山先生には、労つても労い切れない。

こんなに気分の良い日は何か良い事が起きそうな気がする。

…フラグを立てた訳じゃないよ？

すぐ近くで、不幸だ！とか、某K条T麻の声が聞こえたけど。別にフラグなんて立てて無いからスルする。こんな良い日に、不幸だなんて叫ぶ人は知らないよ。

。 . . . .

「……あ、未<sup>ダ・クマタ-</sup>元物質」

「……お、思想統一<sup>デマゴーグ</sup>」

……これは予想外。もっと脈絡とかを大事にして欲しかったわ。

「よおー、奇遇じやねーか。こんなところで何してんだ？死ぬかも知れねーってのに、随分余裕じやねーかよ。なあ、被験者サマ」

チンピラが馴れ馴れしい。まあ、大方友達がいなくて寂しいんだわ。此処は付き合つてやるのが大人の対応だ。

「ふむ、確かに奇遇だね、帝督くん。そちらの具合はどうかな？特殊な機材を使うようだけど。その様子だと、まだみたいだね。良きかな良きかな。まだ、時間は有るみたいだ」

「つは、逃げても良いんだぜ？ てめ もスペアプランに上がつた以上、逃げても潰す事になるがな」

和やかとはとても思えない会話の内容に、木山先生は困惑を顔に浮かべておろおろしている。あ、何これ超可愛い。

「それが分かっているから引き受けたのさ。やれやれ。レベル6なんて、第一位様だけで十分なのに。研究者も、こんな事を考えるくらいなら、巨大ロボでも作っていればいいのにねえ」

「分かつてんなら話は早い。がつかりさせんなよ?」、しかしよお、お前もなかなかやるじやねえか。調べたぜ、**肉体変化**だつてな。それも、脳みその何所に在るかも良く分かつてねえ自分だけの現実まで『**変え**』て、**多重能力者モード**キまで出来るとはな。俺の相手になるんだ。それくらい出来るのは当然だがな」

じゃあまたな、と。

帝督くんは、それだけ言つて歩き去つて行つた。

何がしたかったんだろう。やっぱり友達が居なくて寂しいのか。

ともあれ、木山先生への説明は省けた。さつさと方針を伝えてお  
う。

「と、言つわけだ。『**絶対能力進化実験**』彼と俺を殺し合わせて、生き残つた方が晴れてレベル6に進化出来るそうだ。今の俺じゃあ、到底勝てないからね。聞いての通り、俺は**自分だけの現実**を操れる。それが勝利への、唯一のカギだ。専攻は、AIM拡散力場だそ�だね。あの化け物を作り出す程の頭脳。俺の為に、役立てて

眞つみ？」

そして、再び歩き出す。

生き残るためには仕様が無い。法律書にも、そう書いてある。

断るとは言わせない。自分が死ぬなんて、許せないからね。

「協力有難う、木山先生。なに、気が変わらなければ、例の子供たちには手を出さない。まあ、行きましょうか」

やつと一段落。

ああああ……。長かったなー。

## 第5話 開戦から協力まで（後書き）

感想、評価、指摘。

とてもお願いします。

取り敢えず、今までプロローグ的な物が終わります。

だからと書いて、次回何がある訳でも無いんですが。

これからも、宜しくお願いします。

## 第6話 協力から進展まで（前書き）

今回から第一章的な物が始まります。

状況説明みたいなもので、会話が全く有りません。…如何してこうなったのでしょうか？やつぱり慣れでしょうか？

ともあれ、お楽しみ頂ければ幸いです。

では、どうぞ。

## 第6話 協力から進展まで

久し振りに、昔の夢を見た。

それっぽい事を言つたけど、別に大した事じゃない。ただ、何となく、そんな事も有つたなー。…と、そう思つただけ。…本当に、それだけ。

焼かれた事も、碎かれた事も、バラバラにされた事も、溶かされた事も、やり返した事も。

幾度となく死にかけた事も、数え切れない程の人を殺した事も、壊れるまで頭の中を覗いた事も、遺伝子を弄られた所為で姿が変わつてしまつた事も。

非道で、外道で、痛くて辛い、全ての事も。

…まあ、そんな事も有つたなー、懐かしいなー、…と。別に大した感慨も無く、昨日見たバラエティ番組のごとく、思い出しては通つて、過ぎて、すぐに忘れる。…だから、大した事じやない。頭の中まで都合良く変えられる俺にどうては、その程度の事。

問題だらけだけど、まだ、大丈夫。

。

止めよう。朝っぱらからこんな不健康な事を考えるのは。

自嘲もナルシズムも、主人公様と第一位様の仕事だ。柄じゃないし、非生産的だ。俺はもっと、健康な事を考えよう。

そう言えば、木山先生に行つた例のレストラン。

初めは木山先生も、いつも通り疲れた顔で淡々としていた物だった。見ていた何こいつ誘つてんのか、と、ほどばしる萌え心を抑えのに必死で、戦々恐々と食事どころでは無かつたのだが。運ばれて来たサラダを食べた瞬間に、彼女はモノ凄い勢いで目を見開いたのだ。

不意打ち気味に繰り広げられたその光景に、今度は別の意味で戦々恐々としながら、あえて放置のスタンスを取つていたのだが、おもむろに、彼女は口を開きこう言つたのだ。

こんなに美味しい物を食べたのは、久しぶりだ、と。

…っえ…、…これ、唯のサラダ…。

確かに、その辺の適当なサラダよりは、美味しいには美味しいが、それにしてはそれだけでも無さそうな、過剰で唐突な反応に、困惑を隠す事が出来ない。とても気になる。

俺の訝しむ様子を目に留めた木山先生は、食器を掘む手を止めて。  
：噛んで、噛んで、呑み込んで、水を一口、そしてこちらに向き直  
つた。

曰く、今まで研究に夢中で、レーションしか口に入れてこなかつ  
たそうな。

泣いた。

初めての実験で、両腕をもがれた時より泣いた。

駄目だらう、駄目だらう、それは。

海よりも深く山よりも高い居た堪れなさに、俺の喉は自然と駄目  
の一文字を発して震えていた。

栄養的には問題ない。と、妙に自信満々に答える木山先生は、そ  
の言葉だけで、残念美人の實録をまざまざと見せ付けてくれた。栄  
養以外は問題だらけだった。

：ん？。健康的な事を考えるつもりが、何時の間にか不健康な人  
の事を考えていた。

…、でも、気分は晴れたし、これはこれで良かつた…、のかな…?  
…あれ? それでも無い…、のか…?

何とも微妙な気分になってしまった。

むやみ不健康な事を考えるのは良くないが、これはこれで如何なのだろう。

木山先生が、変人だつたり残念だつたりするのは今さらなので、もうとやかく言う気は無いが。もう少し自重とか、一般常識とかを覚えてくれるのも有りではないだろうか。首を傾げられても、此方は困る以外に何も出来ない。

あれは何だ。もう手遅れだと言いたいのか。求める事が、最早罪だと言つていいのか。

無心にご飯もきゅもきゅ食べ続ける木山先生は、それはそれは微笑ましかつたが、同時に物凄くシバキ倒したくなる位憎たらしかつた。

可愛さ余つて憎せ百倍は、何も子供や恋人にだけ使う謠でも無いらしい事をこの時学んだ。

晴れた気分は、別の理由で加速度的に曇っていく。

木山先生の業はあまりにも深い。

…それはさて置き。

現状として、木山先生の協力を得たのはとても大きい。俺の能力を発展させたのは、間違いなく俺自身の功績だが、悔しい事に、その指針を示してきたのはいつも研究者達の頭脳だつのだから。

俺自身、何か新しい事を覚えたり、覚えた物を再現する事は得意だが、其処からの発展や創造は得意じゃないのだ。それが得意なら、<sup>A.I.M.バースト</sup> 態々幻想猛獸に頼つてまでパターンを増やす様な真似はしていない。

しかし、能力の発展と創造は、苦手だからと怠つては居られない、強くなるには絶対に避けて通れない道だ。レベル5だからこそ、その先を見据えなければ、文字通り先は無い。

俺は、学園都市第一位と謂う、正真正銘の化物と殺し合わなければいけないのだ。形振りなど構つていては、あつという間も無く冷蔵庫にされてしまう。

自分に出来なければ他人にやらせる位、何度もやつてみせるさ。

命が掛かれば、大抵の事はやつても良い。神様だつて言つている。免罪符と言う奴だ。

…そろそろ、出掛けれるか。

木山先生は、俺の能力開発の為に、まずは過去の研究資料に目を通して見るそうだ。

研究者として、何より眠っている子供たちの先生として、最後まで確りやつてくれるらしい。裏切る心配は、しなくて大丈夫そうだ。頭の良い人の相手は無駄に疲れる事が無いから楽で良い。

木山先生はやる事を既に始めている。俺の計画も、早いとこ次へ進めなければ。

さて、差し当たっては、久し振りにあの場所へ行ってみようか。懐かしい、と言つても、結構最近まで寝泊りしていた所だけだ。

思い出がいっぱい詰まつた、あの地獄の跡地に。

田の前に聳える、白塗りの、巨大な建造物。

俺が六歳から十六歳になるまで住んでいた建物は、研究施設が持つ、ある種独特の如何にもな存在感を放つて変らず其処に建つていた。

巨大とか、聳えるとか言つておいて何だが、別に見た目の大きさはそれ程でも無い。ごく普通の一階建てだ。変形したり、飛んだりする事も無い、がっかり研究所だ。

ついこの間、この俺が脱走がてら潰しておいた施設なのだが…、まあ、見た感じ今でもちゃんと潰れている様だ。そこそこ念入りに潰したから、電子媒体だろうと紙媒体だろうと、俺の能力に関するデータは一切残つていない。

俺の知る限り、この施設はけつこう高い功績を上げていたらしく、資金や人材は潤沢で、他の施設からの援助も必要無い、独立した研究所だつたらしい。当然、その技術や知識も独占状態だつたとか。

この研究所が潰れた以上、俺のデータは何所にも洩れようが無いのだ。

今、俺以外でこの研究所の実験内容を知っているのは、俺が此処を潰す時に持ち出した、研究資料を読んでいる木山先生か、滞空回線で学園都市中の事情を把握しているアレイスター位しかいない。

それらを除けば、例え誰であろうと思<sub>デマゴーグ</sub>想統一の素性を知つている

奴は、少なくともこの世には存在しない、…筈なのだが。

ところがどうして、それでも無かつた。

何でかなー、何で知っているのかなー第一位様は。俺の未元物質ダーカマタに、常識は通用しない（キリッとか言いたいのか。いい加減、俺の心労を増やすのは止してほしい。いや、能力を使えば疲れも消せるんだけださ、）つい…気分的な問題で。

「冗談はこれ位にして。奴は、調べた、と言っていた。それも特に他意も感じさせず、調べたら分かつたぜ、ははつやるじゃねーか」と世間話感覚で言つてきたのだ。

…ふつちやけ訳解らなかつたのだが、少し考えた結果、一つの仮説に行きついたのだ。それもすつごく嫌なやつ。

「この仮説が当たつていいたら、むしろ俺にとっては助けになる物なのだ。それはそれ、これはこれ、みたいな。助けとは別の、物凄く鬱になる答え、と言うか。具体的には俺の能力の研究はまだ終わっていなかつた、つて類の話で。

…はあー。と、溜息をつきながら研究所の中を歩く。

研究所の中は、俺が叩き潰した時から相も変わらず、嫌味なまでの白さを保っていた。所々赤黒くなっているのは、家出の時に少しやんちゃをしたからだ、あまり気にする必要もない。これも一つのチャーミングポイントと思えば良い。

フロント、廊下、研究室、実験室、資料室、仮眠室、個室、シャワー室、

ざつと確認した限り、データの類は一切残つてはいなかつた。これはいよいよ件の仮説に信憑性が付いてきた。仮説が答えとなる事を、殆ど確信しながら最後の仕上げに入る。

瓦礫の一角に腰を下ろし、目を閉じる。

人の記憶は、基本的に忘れると言う事は無い。

人の脳は、色々欠陥も多いとは言え、其処まで杜撰に出来てはいない。実際のところ、忘れたと言つている人間は、大体の場合『忘れた』、では無く『思い出せない』状態なのだ。見聞きした物、感じた物、考えた事は、その人間が死ぬまで、脳が壊れるまで残り続けるのだ。

俺は、死んだ事も無ければ、脳が壊れた事も無い。俺の記憶は、今も俺の頭の中に残つている。

……ならば、俺の能力を以つてすれば、それをサルベージするのも極々簡単な事。擬似的な完全記憶能力だ。これを用いて、今から検証を開始する。

思い出すのは、最後に見た此処の記憶。そして検証するのは、先程まで確認してきた、今の此処との違いだ。

足りない物は無いか、増えた物は無いか、本当に、何も変わっていないのか。……俺が此処を出た後、本当に誰も入っていないのか。

…………。

……答へば、直ぐに出た。

何も変わりは無い、誰かが侵入した痕跡は、存在しない。仮にも俺はレベル5だ、専門分野で間違えたりは、流石にしない。

……これで俺の仮説が正しい事は、余程のイレギュラー要素でも無い限り間違い無い事になつた。

この研究所の情報規制は、異常なまでに徹底されている。

出入り口は一つで、窓も監視カメラも無く、潰れるまでは、施設内の至る所にAIMジャマーが設置され、二十四時間絶えず稼働させていたほどだ。中に入らずに中の様子を知る事は不可能と言つて差し支えない。

中に入るにも、指紋、網膜、静脈、さらにはDNA情報を、入る時、出る時は当然の事、中に居る時も一時間おきに確認されるのだ。

外から中を知る事は不可能、部外者が中に入るのも不可能、潰れた後も、潰した時と全く変わらずに、データや資料は残っていない。

不可能、不可能、不可能。

これだけ徹底されていっては、一見して、外部に情報が漏れる事は有り得ない様に思える。潰れてからにしたつて、潰す時にデータを完全に消せていたことが証明されている。此処の情報が得たいなら、潰れる前に見ておかなければならないのだ。

しかし、現に情報は漏れている。…これはおかしい。

ならば、俺が外で能力を使っているのを見て、其処から推測したのか？…だがそれも考えにくい。

そもそも、思想統一の前身たる肉体変化自体、俺を含めて学園都市に三人しか居ないかなりマイナーな能力だ。

さらに、<sup>パーソナルリアリティ</sup>自分だけの現実まで弄れる思想統一ともなると、当たり前だが持っているのは俺一人だけだ。

唯でさえ珍しい能力が、さらに珍しく進化しているのだ。<sup>メタモルフォーゼ</sup>肉体変化からして知っている人間の方が少ないので、それを思想統一に結

びつける事が出来る人間など、それこそ木原くんやアレイスター辺りの、歴史単位でのほんの一握りの頭脳チート位の物だ。

俺自身から漏れた、という可能性も、この事情から考えるに限りなく低い。

如何有つても、部外者が俺の事を知る事は絶対に出来ない。：あくまで、部外者だけなら。つまり、部外者以外は知る事が出来ると言つ訳だ。

散々引っ張つて置いて何だが、答えは至極単純な事だ。

外から見れないなら、中から見れば良い。部外者が入れないなら、部外者じゃ無ければ良い。

よつは、あれだ。スペイガ、中に居たと。そつまつ事。

「はあーー……。迂闊だな、俺も」

本当に迂闊だ。

他の研究員が気付いていなかつた事を考へると、裏切るなんて思ひも寄らない、恐らく研究の中心に居た人物がそうだつたのだろう。

もし、もつと前にこの事に気付いていれば、あんな強引な方法で此処を潰さなくとも良かったかもしれない。もつとスマートに、例えはその裏切り者が渡りを付けていた組織を、協力者として利用する事も可能だつただう。

くそつ、懶々あんな面倒くさい事をしなくて良かつたとか、今更になつて分かるなんて…。迂闊な自分に、嫌気が差す。…はあー…。

…………。

…まあ、過ぎた事は仕方ない。

何はどうあれ、これは色々と利用出来そうだ。スパイを寄越した位だ。俺についての研究は、まだ続いている事だらう。何だかんだで、うちの研究員は優秀だつた。それをスパイとして使える程の組織となると、…まあまあ期待しても良いだらう。

まずは、何処の組織か調べなければ。無断で俺を利用したのだ、料金は払つてもらわなければ、割に合わない。

研究成果は、全て頂くとしよう。

しかし如何やって調べようか、痕跡は残つて無いし、裏切り者も、他の連中共々多分まとめて消しちゃつただらう。

……うん。

……あれ、マジで如何しよ?。



化物とは、一体何だらうか?

一方通行の様に、何もかもの一切を拒絶し、あらゆる全てを破壊し尽くす絶対的な力か。

それとも、未元物質<sup>ダーカムタ</sup>の様に、既存の常識の悉くを塗り替え、法則すら敵にしてしまう、理解不能の何かか。

どちらも、確かに化物と言えるだろう。相対した物が何であろうと、等しく消し去り絶望を与える。その力を前にしては、抵抗すらも許されない。

正しく足元にも及ばない、立っている次元が違うのだ。彼らは、人の身に有りながら、神話に出てくる化物よりも化物だった。

だが、今の彼は。彼を前にした人間達にとつては、より直接的で根源的な、それ以上の化物に見えた事だろう。

ドゴオオツツツ！！と、凄まじい音と共に、その化物は現れた。

それは、人の姿をしていなかつた。

スライム状で、色は赤く、所々から、骨や神経と思われる纖維が露出していて、体全体を常にドクドクと脈動させて、それらの構成物を蠹かせている。

必要に応じて腕や外殻を作り出し、施設の防衛線である銃火器や能力者を、まるで餌か何かの様に蹂躪し、手当たりしだいに食い散らかして行つたのだ。

その冒涜的で、暴力的な光景は、学園都市の裏と言つ名の地獄に

有つて尚、余り有る程に鮮明で、凄惨に映り、目にした人間の心を、意図も容易く、完膚なきまでに打ち碎いた。

この化物が、レベル5の能力者とはいえ、唯の人間だと誰が信じるだろう。

戦っていた者も、守られていた者も、全てを投げ出し、ただただ生き延びようと逃げ惑う。

化物の前から一歩でも遠く、上位者の余裕も、プロとしてのプライドも、殺し殺される覚悟も、自分の普段を形作る物をかなぐり捨て、他者を押しのけ本能のままに恐怖する。

誰もが思った、地獄は、地上にも有るのだと。

化物の蹂躪は無情に続く。

三十分も経つた頃か、やがて、施設からは音が消えていった。

後に残つたのは、むせ返る様な血の匂いと、一人の化物のみとなつた。

化物は、徐々に元の形をとり、その姿を人の物へと整えていく。

化物、回錠意澄は一人、血溜まりの中で息を吐き、気持ち良さそうに伸びをする。

裸<sup>ヌード</sup>なんて事も無く、ちゃんと服を着ている。幻想猛獸<sup>A.I.Mバースト</sup>を解析した思想統一<sup>デマゴーグ</sup>は、元の体には無い物質までもを作れる様になつたのだ。

「…ふむ、人以外の姿は、やっぱり疲れるな…。しかし此処も外れか、何時になつたら見つかるのやら」

自らが作り出した地獄が、まるで何でも無いかの様に、不気味な位いつも通りに、彼は呟いた。

自身を研究する施設を捜索するに当たつて、手掛けが殆ど無い中で彼が出した答えは、實に明快な物だった。

自分を研究する施設がまともな所で有る訳が無い。ならば、強行突破でも構わない。

秘匿される研究内容を、態々調べる必要は無い。

未元物質<sup>ダークマター</sup>が調べれる範囲で、思想統一<sup>デマゴーグ</sup>が関わる分野。この二つの要素が共存して居そうな施設を、片っ端から当たつて行くだけ。

出来るだけ穩便に行きたいのだが、研究成果を開示しろ、などと無茶な要求が受け入れられる訳も無かつたので、今まで巡った三

件とも残らず潰す次第になってしまった。

あいにくと、相性次第では普通に負けるが、一般的な攻撃にはほぼ無敵の俺に、あの程度の防衛は全然欠片も意味が無い。彼らにとつては残念だが、そんな物は気にしない、樂なら一気にやらせて貰う。精々人道を破つた事を後悔するがいいさ。

「今日も後二件、周つて行くかな…」

何でもない様に、唯の作業の様に、頭の中に地図を浮かべ、示す場所へと足を進める。

闇から闇へと、彼は消える。

闇は深く、見通す事はとても出来ない。

一人の人には、深すぎるその闇は、もはや抜け出す事も難し過ぎる。或いはもう、本人もそれを諦めているのかも知れない。

生きねばならない。その思いもまた、彼を縛る鎖なのだろう。その思いは、闇に沈んだ者の身にはあまりに重く、重過ぎる事だった。

彼にもまた、余裕など有りはしないのだ。

闇は続く、其処に居る以上は、何所までも、歩かなければならぬ。

いつか、願つた世界に届く日は来るのだろうか？

分からぬが、分からなくても、進めるなら進んだ方がお得だろ  
う。

…まだ、大丈夫。

明るい世界は、手の届かない所で、回っていた。

## 第6話 協力から進展まで（後書き）

更新、遅れています。1週間以内には更新する予定だったのに…。

腑甲斐無い作者をお許しください。

一応理由と言いますか、事情と言いますか、言い訳が有るので言わせて下さーい。

何と言いますか、急に眼が見えなくなつたんですよ。いえ、別に危ない物では無いと思いますよ? 眼が見えないと言つても、白内障とか、緑内障とは全く違います。

視界がぼやけると言いますか、薄田を開けた感じが近いでしょうか?

疲れ眼では有りませんよ? その辺りのケアは気を使っています。

他にも、パソコンの電源が急に落ちたり、逆に勝手に電源が入つたり、自分以外に誰も居ないのに足音が聞こえたり、ちゃんと仕舞つて置いた物がひとりでに落ちたり、何なんでしょう? 何かいるんでしょうか? 謎は深まるばかりです。

まづくろくろすけとか、プリズムリバーな三姉妹とかなら歓迎なんですけど…。

如何でも良いですね、すいません。

今回のお話は会話が全く有りませんでした。一応次回から増える予定です。

感想、評価、指摘、これからも宜しくお願ひします。

では、また次回。

## 第7話 進展から幕開けまで（前書き）

更新遅れて申し訳ござりません。

前書きでダラダラあるのも好ましく無いので、この辺りで。

じつはお楽しみください。

## 第7話 進展から幕開けまで

夜の学園都市。

獣が眠り、草木が眠る、闇の時間。しかしそんな時間に有つても、人も、人が暮らす街も、眠る事無く、その巨大な存在感を示す様に近未来の街は闇と獣を遠ざける輝きを湛え続けていた。

そして彼、回鋏意澄もまた、眼を開き体を起こして、とある研究施設を目の前にして佇んでいたのだった。

其処には人の気配はおろか、現代の街に有るべき街灯すら無く、まるでこの一角だけが学園都市から切り離されたかの様に、町並みは夜の闇のされるがままに黒く、暗く塗り潰されていた。

まともな人間であれば、己の心の根底に潜む恐怖心を想起させずにはいられない光景の中にいて、無感動に自然体を保てる彼は、有る意味では最も不自然な存在と言えたかも知れない。

或いは、この暗闇の中心こそが彼ではないかと錯覚する程に。

「ふう、やれやれ。まさかこんな所で研究を続けていたとはね……これは早く潰してくれと誘っているのかな？それとも君を放す気は無いという意思表示かな？…どちらにしても下手クソなアプローチだ。速やかに潰してあげないといけないとね」

何時もの調子で彼は囁く。口調こそ楽しげだが、しかしその顔は、笑顔どころか表情らしき物の一切が欠落している、人がこんな表情を浮かべられる事が疑問に思える、實に歪な薄気味悪い物だつた。だが、彼に対してその疑問は考えるだけ無駄なのだろう。

どうり、と、体が崩れる。

頭が、腕が、足が、胴体が、ドクドクと脈打つ赤黒い何かへと変貌していく。

所々に、血管か神経線維のよつな筋が走つた、肉塊の様な、スライムの様な質感の、人形の何か。

ただ赤黒い人の輪郭を持つてゐるだけの塊としか表現のしようがない、間違つても人間には見えないそのおぞましい生き物が、元はただの少年の姿をしていたと誰が信じるだらうか。

ねぢやねぢや、ぐぢやぐぢやと、怪物は蠢きだす。聞く物の皮膚を泡立たせる、寒氣のする音が夏の夜道を這いずり回る。

戦うのに、人である必要はない。

彼の持論である。

人は、素手では鉄パイプを折る事は出来ない。ならば機関銃を使つたので有れば、当然結果は変わるだろう。しかし機関銃程度では、戦車や、駆動鎧の装甲を貫く事は出来ず、また戦車や駆動鎧でも、高空からのジェット機による爆撃にはひとたまりも無いだろう。

唯の鉄の塊すら人は壊せないので、ジェット機など、夢のまた夢だ。

しかしそれも仕方ない。それらは全て、壊すため、或いは壊れない為だけに生まれてきた物なのだ。生きる為に生れてきた物とは、桁が違う。

壊すため、壊れないため、…戦うために生まれてきたその存在こそ、この世で最も戦いに向いていと云つ事実に反論など出来る筈が無い。

当然、それらの兵器群を操るのは人間ではあるが、果たして、その要素がどれ程のプラスと成り得るだろうか？

どんな戦車もコクピットに榴弾を撃ちこまれただけで、機体はまだ動くと言うのに戦闘の続行は不可能となるし、音を越え超高空を行く戦闘機も、大抵の人間は低酸素と強力なGに負けて、その機体性能の半分も引き出す事は出来ないだろう。

戦うのに、人である必要はない。そもそも向いていないのだ、戦いと言う行為に対して、人はあまりにも貧弱なのだから。

故に彼は兵器となる。

「この世で最も戦いに向いた存在。壊し壊れぬ、戦うための、それもどきりの、剣にも槍にも斧にも銃にも盾にも毒にも爆弾にも、そして能力者にすらなる、古今無双の、『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>と言つ名の生物兵器に、彼は、回錠意澄は变成するのだ。

グバア、と、突如、彼の体の胴体部分から、太く長い、全長の中程に關節を持つ、例えるならば、バッタの足に分厚い筋肉を張り付けた様な物が八本、勢いよく飛び出て、アスファルトに舗装された大地を掻む。

同時に、彼の体が、夜闇に溶け込むような深い黒色に変色していく。

保護色である。流石に、今の姿で目立つのは不味いのだ。この辺りには居ないが、今からやる事を考えると、若しかしたら、一般人の目に入つて仕舞うかも知れないと言つ、言わば保険である。

ざあざあと、街路樹が揺れる。

何時の間にか、風が吹いてきた。しかしそれが自然現象かと問われば、素直に頷くのは難しいだろう。

全ての風は、ある一点に向かつて、黒い何か、回錠意澄を中心には渦巻く風に巻き込まれる形で、動いているのだから。

『ハーフスキル  
『多角能力』

脳内に『<sup>ハンド</sup>空力使い』のパターンを構築。

本来、一つの脳に宿る能力は一つだけ。その原則を越えれば、二つ以上の能力を植え付けてしまえば、たちまち脳の神経はズタズタに焼き切れて、一度と使い物にならなくなつて仕舞う。負荷が大き過ぎるのである。

能力者にとっては、当たり前で絶対の原則を前にしかし、彼にその原則は当て嵌まらない。いや、当て嵌まつた上で、その枠を超えて行くのだ。

コンマ〇秒以下で、起動・制御される肉体構成の操作、及び高速再生。<sup>ティ</sup>圧倒的な経験とサンプリングに裏打ちされた、<sup>パーソナルリアリティ</sup>自分だけの現実の超効率化。

そして、もつと根本的な、能力者の、人間のステータス全てに例外なく関わる物。：脳と言う内臓器官、それそのものの拡張。

これこそが、『<sup>デマゴーグ</sup>思想統一』の秘密にして本領。

ふと、気が付けば、あれ程激しかつた風が、止んでいた。そしていつの間にか、彼の8本足が、有り得ない程に、いつそ冗談の様に、変身した時の何倍にも膨れ上がっていた。

仕上げと言わんばかりに、八本足の中心の彼もまた変形する。辛うじて人の形を保っていた彼は、今や流線形の、ミサイルの様なフォルムへと変わっている。…最早、生き物にすら見えない。

直後。

ドガアアアツツ

と。

アスファルトに鱗を入れ、鼓膜と空気を突き破る爆音を撒き散らし、彼は跳んだ。

集めた風を推進力に、八本足はそのまま羽に、『<sup>ハロハンド</sup>空力使い』により理想的な場を形成。

風を搔き分け、重力を蹴り飛ばし、迫り行く遙かの彼方。数トンの鉄と火を用いてようやく踏み入る事を許される領域に、容易くも、わずか数秒、単身で飛び上がる彼の威容…あるいは異様は、レベル5の称号に立つ者の、隠しようも無い、果てしない怪物性を物語ついていて、…やはり彼は、もう戻れないのだろう、と。

上空三六〇メートル。

最終的には此処まで到達して、到達したからは、当たり前だが後には落下が待っている。

落下地点には、彼の目的とする研究施設。

突然だが、彼は自分の肉体を操る能力を持つてはいるが、重さまでは操る事が出来ない。質量保存の法則までは、抗えないと言つ事だ。

故に、彼は自分の肉体を常に一定以上蓄えている。増やせない以上は、予め外部から取り込んでおくのは、それは当たり前の事とも言える。

斬られる刺されるならば兎も角、焼かれる吹き飛ばされる等は、質量を一度に持つていかれて非常に危ないのだ。

RPG風に例えると、HP回復には限度があるの、HPの上限自体を増やす必要がある、と言った所か。

無限命の種。流石レベル5はやる事が違う。

蓄えられた肉体は、当然相応の質量をもつていて…。

つまり、有体に言えば、彼の体重はとても、重いのだ。

七四〇キロ。

学園都市の裏を相手取るために、蓄えに蓄えた怪物が、一つの施設を田掛け、落下を開始する。

今度は、可能な限り、小さく、堅く、研究施設の地下深くにまで、抉り込む様に。

ドツゴオオオオオオツツツ

発射時以上の、爆音を越え最早音が爆発したと錯覚するレベルの、暴力的な音の濁流を伴って。

怪物は。

今宵限りの戦場へと、降り立った。

「随分と、嘗めた真似してくれるじゃない……」

「むぎの、落ち着いて」

声が、響く。

「あ？…私は落ち着いてるわよ、要するに、依頼通り、コレをしたバカをぶち殺せばいいんでしょう？」

「……」

声からは大人びた少女の印象を受けるが、果たして、これ程濃密な殺氣を放つ少女が、唯大人びただけの少女と言えるのか。…否。この場に居るだけで、彼女が、彼女達がまともな少女と言える訳がない。

「あー超良いですね、それ。賛成です。そうと決まればやっちゃんしよう。超最速で、超徹底的に」

「…結局さ、みんな私の心配なんてしてくれない訳よ」

つい今し方、敵対者からの凶悪な威力を持った攻撃を、自分達が護衛する施設が受けた筈なのに、…その凶悪な攻撃力を振るう敵と戦わねばならぬ筈なのに、少女達からは、恐怖も、緊張感も、微塵も感じ取る事は出来ない。

彼女たちもまた、戦いこそに日常を置く者なのだろう。

フレンダ・セイヴェルン。

滝壺理<sup>リ</sup>。

絹旗最愛。

そして、レベル5、序列第五位。

『メルトダウナー  
原子崩し』 麦野沈利。

『アイテム』が、動き出す。

「…君の能力が関つていそな研究所？…一体、それを聞いて如何するんだ…」

「如何するも何も…、研究成果を頂戴しようかと。既に出ている成果が有るなら、それも一緒に組み込んだ方が木山先生も持るでしょう？」

「そうじやない、…君は既に、何件か潰して回つたんだろう？何故今さらになつて…」

第七学区のとあるマンション。本来であれば四人から五人…つまりは、家族で住む事を想定された4LDKのその建物のリビングに、被験者である回錠意澄と、研究者である木山春生は、顔を向き合わせて座つていた。

「何件では無く、何十件だよ木山先生。…だからこそ聞くんだ、これだけ潰しても見えてこないのは、少し考えられない。餅は餅屋、研究者である先生に聞きたい。…何か、心当たりは無いかな？」

「心当たりか…、それは言われてもな…。君が期待している様な物は持つていない。そもそも、君の能力はそれ一つで生物学と超能力関連のほぼ全てを網羅出来るじゃないか、…ただ漠然と心当たりと言われても、答え様が無い」

そう言つて、木山先生はお手上げだとばかりにソファに背中を預けて天井を仰ぎ見る。つむつた眼を手で覆うような形で揉み解す姿は、研究者然として居てとても様になつっていた。

かなり疲れた様子ではあるが、しかし、その動作から体の運び方まで随分とこなれた感じである。

巷では、脱ぎ女などと、世に売り出す気が有るのかさえ疑わしい、地方都市のゆるキャラにも似た不名誉な扱いを受けている彼女ではあるが、その本質はやはり優秀な科学者で間違いないらしい。

「ふむ、要はヒントが欲しいと？ 成程ね。まあ、その意見は尤もだけど…、そのヒントがねえ…」

ヒントにならうな物。一応、有るには有るのだが。

「…先に、何十件の研究所を潰して回つたって言つたよね？…それで、生物学と超能力関連の施設は全部潰しちゃつたんだよね。…あと残つていいのと言つたら、表の施設が機械工学くらいの物じやん？でもさ、それはかなり微妙だと思わないかな？」

と、問い合わせたのだが…。しかし、木山先生は、閉じかけていた眼を僅かばかり見開いて首を傾げていた。頭の上に、？マークが浮かんでくるあの感じである。可愛らしいのは結構な事だが、今の話の、一体どこに疑問を待つたと云うのだろうか？

「…機械工学…？…。まさか駆動鎧か？…しかし何故それが微妙なんだ…？」

「…ふむ、如何やらまだ、資料を全部読んだ訳じゃ無いみたいだね。…まあ、あれだよ、簡単に説明するとだね…。需要、…もつと

「…」と、氣分、の問題だよ

やれやれ、全く、そんな事も分からないと。木山先生は専門外のあれこれには疎いらしい。しかし駆動鎧パワードスイツへの応用は自力でたどり着けた様だ。中々やりある。…と思つたが、そう言えれば見せていたAIMバーストね、幻想猛獸の時、美琴ちゃんと合体してゐるのを。

まあ思い出話は置いておいて、しかし今はとりあえず、説明モードへのスタイルチェンジが重要だろう。…重要だろう。楽しんでいるとか、優越感とかは、そう、如何でも良い。これより、怒濤の追い込みだ。さあ、君の海馬に、俺の言葉を刻むがいい…！

「成程な、…人の体格を、大きく外れたモデルが流行らないのと同じ理由か…。機械に使われると知つて、喜んで乗り込もうと思う人間など居る筈が無い…」

「…うん、…うん、そうだね、大体そんな感じで合つてるよ。人に足りない部分を、内と外から機械で補強すると言えば聞こえは良いけど、…あれはもう、洗脳みたいな物だからね…」

フヨイントを織り交ぜて来るとは、また味な真似を。この余つた勢いは、一体何処に放てば良いのだろう。青い春を未だに迷う若い頭では、全く皆田見当もつかないよ。教えて、木山先生。

さて置き。

…道具とは、ただ単純に性能が良いだけでは役に立たない。使い手の技量が伴つて初めて、自身に備わった威力を發揮するのだ。

そして道具とは、性能が高い程、出来る事が多い程に、使いこなすに至るまでのプロセスは、より多く、複雑な傾向に在るのは言うまでも無い。難しいからこそ、その道具の性能の全てを引き出し、存分に扱いきる者が達人と呼ばれるのだ。

しかし扱う者全てが達人になるのを待つていては、効率が悪いにも程がある。汎用性を捨てては、科学の街など到底名乗れない。

其処で、内側からの補強だ。

学園都市が誇る駆動鎧<sup>パワードスイツ</sup>、その最大の特徴。

最も効率的な操縦に必要な、知識、経験、認識力に思考力を補強、補正し、着る人間全てを達人に変える。実に利に適つてはいるが、人の脳を勝手に書き換えるそのシステムは、洗脳と呼ばれる物ではないだろうか？

さらに、駆動鎧<sup>パワードスイツ</sup>によって得た力は、自分の力では無いのだ。当たり前だが、学園都市の技術にとつて、当り前とは容易に忘れさせてしまえる、軽い一線だったのだ。

駆動鎧からの恩恵は、駆動鎧<sup>パワードスイツ</sup>を脱げば消えて無くなる。、それによつて齋される障害は、決して小さくは無い。

得体の知れない技術で刷り込まれた駆動鎧の使い方は、自分の体の使い方と両立できない。

自分の体の使い方を、忘れてしまう。

埋めなければならない、なのに埋められない巨大な齧齧は、人の体を壊して余りある、技術だけでは越えられない、駆動鎧の限界なのだ。

まあ何を言いたいのかと言つてしまひ、駆動鎧には、既に先が見えているのだ。

先の見えた技術に、スパイを送り込んでまで『思想統一』<sup>デマコーグ</sup>のデータを取り込もうとするような、そんな無謀を、計算だけは得意な科学者連中がやるとは思えない。

俺の所に、あの研究所にスパイを寄越す事がどれほど危険か、そんな冒したりスクに釣り合うだけの、相応の利益を出せる分野なんて、それこそ医学か脳科学くらいの物だ。

そんな事情が有る故に、その手の施設を狙つたんだけどねえ……。

「と言つ訳でほら、何て言つか、何かいつ……、無い?」

丸投げしてみる。

「…、たつた、これだけの情報で…。取り敢えず、今までの襲撃で気付いた事を紙にでも書いてくれないか。流石にこの程度では…」

「お困りの、様子だ。これを見れただけでも、無茶振った甲斐があると言う物。達成感も一入だ。」

しかしニヤついてばかり居ては、…可能性は低いが若しかしたら、全力でど突かれるとか、そんなキャラ崩壊が起きるかも知れない。

…そうなっては堪らない。自問してみて寒気がした。素直に、思いつく限りを紙に書いてやる。

飴と鞭は使い分けと、何時だか研究員のカバンの中を漁つっていて見た記憶がある。もしやこれはその第一歩なのか?ドキガムネムネとはこの事かも知れない。ちなみに、紙は無かつたので自腹である。文字通り、自腹。

そもそもパソコンと食糧以外の品も、一通り位には用意しなければいけないか…。

「…本当に、これ程の数を潰したんだな…。これでは…。」

…

木山先生は、俺が渡した紙（偽）を熱く見つめて思案顔である。注意深く観察すれば分かる事だが、会話を始めてから、彼女の脳は働きっぱなしなのだ。特に、切り換えて観れば一目瞭然。ビリビリのバリバリである。

彼女の心をこれ程までにスパークリングさせる俺の手腕には、中々如何して光る物があるんじゃ無かるうか。持つて良かつたぜ、人質。功労者たる少年少女等には感謝せねばなるまい。

「……少し、いいかな……？」

「はいはいはい、何か分かったかな？木山先生」

早速何かに気付いたらしい。頬もしい、やはり持つべきは人じて協力者だ。

勿体ぶる訳でも無さそつだが、…これは何だろう？眠いのか？此方の反応を窺つている…、でもないか。はてさて、彼女は一体、何に気付いたのかな？

「君は全部潰したと言つたが…。一つ、足りないんじゃないか？」

「……は？」

…………は？…………いやいやいや。無い無い。それは有り得ない。記憶を自在に操る俺が、取りこぼしなんてそんな事…。はつはつは。いやいや君、まさかそんな馬鹿な事があるわけ…。

：如何言つ事だ？

：木山先生が口を開く。何かを、言つてはいる。研究所の名前の様だ。つて其処は。

「木山先生、其処つて今稼働してないんじやないかな？」「ああ、だが」… 何かな？」

言葉に割り込まれた。珍しい…、と言える程、知つた間柄でも無いが。仕方ないので先に進めるより、言葉を促す。

木山先生が答えたのは、ある日付だった。何でも、その研究所が稼働を止めた日とか。

だが…、その日付けは…。

「…ふむ…、それはそれは…、…都合の良い事で。これはまあ、指摘されてからで何だけど、意外と簡単だったね」

「…仮にも、スパイを送る程度に君に興味が有るならば、確かめに行つた筈だ、…そして徹底して、データの一切が消去されている事を、知つたんだろう。…研究を続けて欲しくないと言う事を、其処から連想するのも簡単だつただろう。…ばれれば、次は自分達だと言う事も、な」

「だから隠れたと、ふむ……しかし俺が外に出た翌日にはもう閉鎖とは……。あからさまだねえ……」

……ふう。やれやれ、一息つく度に次から次へと、暇も隙も余裕もない。

…………。

……ああああ、……全く、踏んだり蹴つたりだ。

そもそもが絶対能力進化実験。<sup>レベル6システム</sup>どうせ家の所の連中が、予め申請していたんだろう。申請していた間に潰れたから、宙ぶらりんになつた答えだけを別の施設が引き継いだと……。

……仕方ないや、此処は、そういう街なんだから。レベル6に成れる。そんな答えだけならまだ何とか……、と思つていたんだけどなあ……。スパイ、か。

今までこそ、一部に留まつているが、早く潰さなければ、第2位が知つていた。その気になれば、調べられる所まで、……もう来ている。知られてはいけない。欠片も、痕跡も残してはいけない。残つていれば、何時か必ず引き戻される。

..... .

「 もて、善は急げ、当りが付いたし、早速言つてくるかな。 … 木山先生は？ もうお休みかな？」

「 … 冷蔵庫に、栄養剤がまだ残つている。無くなるまでは続けるよ」

「 … ふむふむ、真面目だね。少しば休んでも罰は当たらぬんじやないかな？ … どう思つ？」

「 … 人質を取つた、当の本人のセリフでは無いな。右から左から、… 本当に、不都合は忙しないな」

「まあまあ、そんな物だよ。不幸とか不都合とか、数だけは、それはそれは立派なんだからねえ」

そんなこんな、被害者と加害者とは、一目見てもどれだけ見ても思えない緩い遣り取りが、この街の感性とは、かくもぞれた物なのか。

「 … あの子たちは、本当に治るのか？」

「まあね、むしろ、あれの直し方を俺以上に心得ている奴が居ない位さ」

木山先生も、子供相手によくもまあこれ程本気になれるものだ。  
…ロリコンでショタコンか。…業が深いな。

「じゃあ三時間ちよつとで戻るよ、…、こつてきまーす」

そして跳ぶ。

…今日は何とも言えない嫌な感じがする。…潰し回って早一日、  
そろそろ、暗部も本腰を入れてくる頃か。…今のうちに蓄えておく  
か。大体、七〇〇…四〇キロ辺りが良いかな？使える機能も、全部  
起動して…。もし、こんな感じか。

常盤台の時のアマチャヤんと違つて、クリーンヒットなんぞ貰つた  
ら一気に殺される。

.....。

何かが始まつた。

それは戦いであつたり、邂逅であつたり、運命と呼ばれたり、物  
語と呼ばれたり。

まあでも所詮その程度。

大した事は無いし、何て事も無い、取り留めも無い。現代日本で、怪物一人が出歩いた程度。まつたくもって他愛も無い。その風景こそ学園都市。

これは、そう。少しだけ、：風が吹いてきた。

ただそれだけの、幕開け。

## 第7話 進展から幕開けまで（後書き）

感想、指摘、評価、お待ちしております。

更新、遅れて申し訳ございません。

これでも、色々あつて書けなかつたり。色々あつて七割程度まで書いたのを、最初から書き換える羽目になつたり。

まあ、読者さま方は、詳しい話なんて聞きたくも無いでしょうし、言い訳臭くなるのも格好悪くて嫌ですから、この場は割愛させて頂きます。

もし万が一、聞きたい方が居ましたら感想ページにでも書いてください。言い訳させて頂きます。

それでは、また次回。

## 第8話 幕開けから窮策まで 上(前書き)

遅れました。

それはもう、大胆に。遅れました。

すいません。

取り敢えず、本編をどうぞ。

## 第8話 幕開けから窮策まで 上

此処はとある普通（裏）の研究所。三百幾つだかの上空より、星の力の導くままにノックをしたら、建物が半壊してしまった。中に居た人達は全員無事だらうか？まあ無理か。だから設計は確りしろとあれほど…。

今やこの研究所の中心は、一階から地下二階まで吹き抜け構造といつ何ともオシャレなストラクチャーとビフォーアフターしてしまった。匠の技である。

「ひつひい！なんつ何だつ！何だお三

グチヤ、つとな。

汚い花火だとかではない。しがない意澄が（？ダジャレ）、ハゲジジイの頭をなでなでした音である。髪の毛を巻き込んだ気もするが、概ね微笑ましい光景だらう。欲しい時に欲しい物が手に入つたのだから、そりやあ微笑むぞ。

神経をつなげ、直接脳を掌握する。完全な洗脳には時間が足りないが、日々バージョンアップを繰り返す俺ならば、記憶の閲覧と行動の刷り込み程度であれば、そう時間はとらないのである。

しかしこのツルッパゲは、何故こうももアワアワしたのだろう？俺の方を見てとつた反応であると考えれば、俺が原因だと考えるの

が自然だが……。

……いや、俺の様な模範学生に對して、あの妙な反応をしたと決め付けるのは、些か乱暴と言わざるおえない。全く以って、ナンセンス。ホームズさんならいついついついついついつ。ワトソン君、もつと状況を良く見たまえ。と。

あのハゲは、俺では無く、俺の方向を見た。

ならばと後ろを振り返つて、しかと見る。赤くなっている。真っ赤っかだ。そして水浸しだ。ああもびぢゅやびぢゅだと、転びやすくなつて少し危ない。

たしか、落ちた先にモルモットがいっぱい居たのだ。こゝは脳の思考形態について研究していたのだったか。流石に良く躊躇ただけあって、件のハゲの一聲で一斉にじゅれてきたのだ。

所がこのモルモット達。お兄さんが折角相手をして撫で回して上げたのに、すぐに音を上げて弾けてしまったのだ。根性が足りない、全く。シャボン玉ぢゃあないんだから。

サンプルとしての価値も無いし。もう少し、バラエティを見せて欲しかつた。

しかし、ふむ。なるほど。良く見るとこの惨状は……。スペインのトマト祭りに似ている。

トマト祭りでは、男女も貴賤も隔てなく、みんなの人や建物がトマ

ト色に染まる。…トマト色、即ち赤色だ。

トマト色に染まつたスペインの町並みは、あたかも其処で虐殺が行われたかの様にも見えるだろう。人は赤色を見るとまず気分が高揚し、人によつては危機感を覚える。

それは赤色が、人にとって多くの場合、血液や、火などの、怪我や危険を連想させる色として、頭の中で結び付けられるからだ。

成程。彼は、トマト祭りを連想して、そして過去に体験したと思われるトラウマに、結び付けてしまつたのだ。

取り乱すのも、無理は無い。

「オーダーコード、認証、完了しました。これより、施設内コンピュータ、ならびに現在接続されているデバイス全てにアクセス。クラッキングを開始します」

作業の完了と共に、ハゲの野太い声が発音される。無機質で無感情な声は、むしろ音と捉えた方がしつくりと来る。

読み取つた記憶には、コンピュータ経由では消去できない紙媒体での情報や、接続されていない電子媒体の保管場所も示されていた。

そして都合の良い事に、職員でも情報の持ち出しは厳禁だと言つ事も分かつた。今回もちょろい仕事だ。仕事に向かうハゲに、実行

のためのウイルスデータを渡す一方で調子に乗つてみる。

だがそれとは別に、懸念事項が無いでもない。

何でも『アイテム』が護衛に就いていたらしい。際物集団はお呼びでは無いのだが、さて…、これは如何した物か。予め補給した分だけで、十分足りるとは思うのだが…。

そろそろ暗部でも、上方に位置する組織が動きだすと、予感した現実は見事当たつてしまつた。

うーん……。

たぶん、勝てないだらうなあー。

戦う以前の命題として、俺の能力では、ああ言つた手合いとの戦闘には向かない訳だ。ああ言つた手合いとはつまり、単純な力の強い、パワーファイターが揃つてているという事である。

リセットボタンとか、その辺りに落ちて無いかなあー…。

.....

…まあ、そもそも言つていられる状況で無いのは至極明らか。まずは早急に対策を練らなければ。

真正面から戦<sup>ヤ</sup>り合つのは不味い。不意打ちから入るのは、取り敢えず基本だろう。しかし、そう簡単に不意を打つてるのは疑問の残る所だ。向こうには、『<sup>AIMストーカー</sup>能力追跡』が居るのだし。

とはいえ、不意を打てなければ此方がトマト祭りになつてしまつ。別にトマトに思い入れが有るでも無い俺としては、流石にやつは『遠慮願いたい。

…少しばかり不安だが、あれを使うしか手はないかな？連中が油断してくれるか否かが、命運の分かれ所か。

分は悪くない賭け。なのだが、そもそも賭け事その物が好きではない俺に言わせれば。そこまで追い詰められた時点で、負け組の様な気がしてしまつ。これは俺だけの気のせいだろうか？

やらぬいなどと書めた選択肢は初めから無いので、結局やるにはやるのだが。

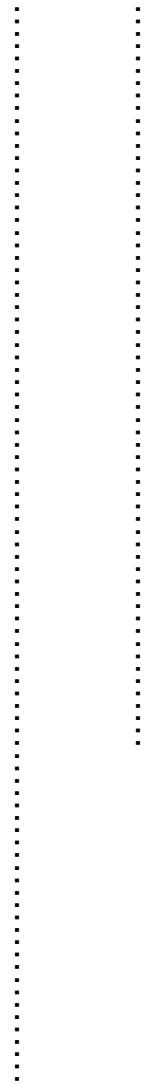
実行に移すことが、既に決まつている計画だから。ネガティブのよりは、ポジティブに走り抜けた方が、考え方としては冴えた物だろう。

さあ。久方ぶりの楽しい楽しい潰し合<sup>ショータイム</sup>いだ。…なんぢやつて。

楽しいとか、そんな物が有る訳無いじゃないか。

…そうだ、これは唯の…。

殺し合いだ。



『<sup>デマゴーグ</sup>思想統一』。

その名を施設の研究員から聞いた時。俺は、回錠意澄は。不覚にも、中々如何して的を射た名付けではないかと。不覚にも、感心してしまつたものであつた。不覚にも。

生まれてから十年目の夏だったか。日の光が、やたらとまぶしく感じる様になつたのも、丁度この頃からだつた気がする。前の夏はそれでも無かつた筈なのだが。オゾン層はちゃんと仕事をしているのだろうか？ 大分急激かつダイナミックなサボタージュである。

地球の大気も、五月病にかかるらしい。七月病？

さて置き。

話を戻して。遂にレベル5からレベル5・2へと進化を遂げた、そんな大体いつも通りの夏の日に。学園都市でも蝉が鳴くのかと、今更ながらにしみじみする思考の片隅で驚嘆したのを覚えている。不覚だぜ……。

『デマゴーグ思想統一』。

『デマゴーグ、とは。何でも扇動者を指して言ひだす語らしい。嘘やら、噂やらをアグリーマと行つたりするが。まあそういう意味であるとか、何とか。

子供に向かつて『今日から君は扇動的大衆指導者だよ！ やつたね！』とか、喜び跳ねまわって直言する辺りは、こいつらはどんな時でもブレないんだろうなあと、確信するかのように感動して（不覚）みたりしたのだが。

しかし、普通にならえば、まだ小学四年生の児童に対して、もう少しオブラーートに包んだ言い方は出来なかつたのだろうか。贅沢は言わないけれど、せめて『今日から君の奴隸になつて上げるよ！早くぶつて！』位は言える大人で在つてほしかつたのだが。

もう此処の大人は駄目だと、諦観だらけで嘆息したかつての自分は、決して間違つてはいない筈である。

とは言え、常識的に考えて多分に不名誉なこの称号も。ああ確かに、この力にその名前は、この上なく、實に相応しい名前だなあと。思つていた、否。今でも思つている自分が、非常に多くの割合で頭の中を占めているのだと。其処を否定できないのは、自分のことながら困つたものである。

善人にも悪意があり、悪人もまた善意を持つ。普段見る知人の顔も、それはあくまで一面で、人は本来多くの顔を持っている。

ありきたりで面白みも無い、使い古された常套句だらう。

けれど。

紀元よりも遙かに前の昔の歴史より。胸か、それとも頭か。あらゆる生き物に宿ると信じられてきた心が、時に持ち主さえも裏切つて動き出す事は事実であり、そして昨今においても割と知られた事柄なのではと思うのだ。

たとえば鬱病とか、躁病とか。有名所では、解離性人格障害とか。

愛だとか恋だとか、恨みだとか憎しみだとか。恐怖とか、驚愕とか、呆然とか、自失とか、空虚感とか、罪悪感とか。

考え付くだけでも幾らでもあり、それこそ『以外』などといった言葉が昔からある様に。

人は頭の中で無数に同居する自分と、折り合い誤魔化し合ひながら生きている様に思えるのは、哲学者で無くても誰もが通る、思春期の通過儀礼にも似た自己分析であるのではないだろうか？

心が宿ると言われてきた二つを、意志の赴くままに自在に駆使する自分こそは。正しく『デマゴーグ』と名付けられるに相応しい人間で間違いないと。相次ぎ不覚ながらも、その点は研究者のネーミングセンスに納得したという訳である。

誰しもの裡に、生きていれば必然に渦巻き、それぞれがそれぞれに向かおうとする数多の意志。『思想』と名付けられた心の機能。

まともには把握も出来ない曖昧なその機能を、四肢の延長の「」とく使いこなし、点在するそれらに『統一』を与えた奇跡の力に。

研究者たちは、自らが築き上げた俺という比類なき奇跡を讃え、『デマゴーグ思想統一』の名前を与えたのだ。

もつとも、『思想統一』を『えられた当の本人に裏切られるとは、彼等からしても『以外』と言わざるおえなかつたかもしぬ。上手いこと言つた。

まあ、『思想』の称号を背負つた俺が、そつ言つた諸々の期待に応えないのもカツコ悪い。『思想統一』の名折れもいい所である。

見かけ倒しとは、呼ばれたくない、カツコ付けたいお年頃なのだ。お兄さんも男の子なのである。

あえて言つまでもないが、『思想統一』の強さとは即ち、その常識を外れた圧倒的汎用性にある。

通常の『肉体変化<sup>メタモルフォーゼ</sup>』と共に、他多数の能力をサンプリングした数だけ使う『思想統一<sup>デマゴーグ</sup>』の汎用性など、レベル4以下のその他大勢からしたら心がボッキリ逝っちゃうレベルだろう。昔のクラスメート曰く、『やつてらんねー』だとか。

学園都市のトップ3にも迫る、絶大な力。：或いは、美琴ちゃんレベルならば、もう超えるに足る力に作り変える日も、そう遠くなきかもしれない、そんな力。

必然、戦闘においてもその汎用性を活かす戦術に頼る事になるの

だが……まあ、当たり前ながらも普通に強い。

ありゆる相手に対して、自分からして有利な相性で戦える訳だから、強くない訳が無い。携帯怪獣はびこるバトルタワーにミユウ？手持ちに殴りこむ様なものある。基本的にワンサイドゲームなのだ。

たとえば、『発火能力』<sup>バイロキネシス</sup> 系統には酸素の道、或いは真空の壁を。  
『電撃使い』<sup>エレクトロマスター</sup> には同じく電気で作った避雷針を。

特に、『精神感応』<sup>テレパス</sup> 系統の能力には『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup> そのものを。

精神とは、脳が機能していて初めて存在する事を許されるのである。

精神の根本が脳に在る以上、『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup> は精神系能力に対しては、ほぼ、絶対に負ける事は無いのだ。

『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup> は分類上、『肉体変化』<sup>メタモルフォーゼ</sup> から派生した肉体系能力の一種とされている。が、脳を操作する特性故に、精神系能力、またはA.I.M系能力にも分類する事が出来る。

さらに、代謝速度の調整により生体電流や細胞呼吸の制御<sup>：・</sup>、つまり『肉体変化』<sup>メタモルフォーゼ</sup> 単体で『電撃使い』<sup>エレクトロマスター</sup>、『発火能力』<sup>バイロキネシス</sup> の行使すらも可能としてしまう。

『肉体変化』<sup>メタモルフォーゼ</sup> 単体とあつては、所詮は些細でひどく脆弱なもので

しかないのだが。しかし、この力は紛こと無く、電子系能力・火炎系能力としても扱えるのだ。

各種内分泌物や、人体には存在しえない受容体の生成も行えることも考慮すれば、知覚系能力との捉え方も出来るだろつ。

まあ、こんな無理矢理感満載の、屁理屈未満の恥ずかしい理論が、そら寒くて世知辛い、魔天楼ひしめく大都会の往来をまともにまかり通る筈が無く。木山先生の耳にでも入ろうものならば苦笑必死の、まさか街にまで流れた日には、もう表も裏も出歩けなくなる。超絶理論の域を出ない、良いとこ妄想の大暴論である。

所がどっこい。

たとえ嘘に、妄想に、暴論に、工セ科学に。たとえどれ程こじ付け臭い有象無象に見えようとも。無理を無理矢理押しとおせる現実を、研究以外にやる事が無い暇人共がその手で叩きだしたのである。

能力者の能力に対する相性と適正。

学生からすれば、この世の格差の象徴たる打破すべき敵の最たるものだ。

『システムズ妹達』

が、所詮は欠陥人形にしかなれなかつたのと同じメカニズムだと思うのだが、相性と適正の問題の全てをクリアーするのは、

性格から演算パターンまで、脳みその隅から隅までをどれだけいじるつとも不可能であった。

しかしそれを覆さなくて何が超能力者か。長きにわたる研究は、ただの確率を可能性へと昇華させ、遂には現実を呼び起こす事に成功したのである。

夢物語と打ち切られたかに見えた『多重能力<sup>ペベル<sup>5</sup></sup>』は、この俺『思想統一<sup>ゴーグ</sup>』の真髓にして真骨頂。『多角能力<sup>ハーフスキル</sup>』と名前を変えて大成するに至ったのだ。

『多重能力<sup>デュアルスキル</sup>』が長らく不可能とされて来たのは、人の脳みそのスペック的な限界ゆえの、絶対的な壁が有るからであった。

即ち。一つの頭に、能力は一つまで、だと。

悩める彼らは頭を抱え、地を睨み、唸り猛り吠え、そして叫んだ事だらう。

おお、神よ。あなたは何故人にこの程度の力しか与えなかつたのか。それとも悩み続けることこそが、我々への罰なのですか。と。

暇人共が、確かにそんな感じで語つていた。

あれは恥ずかしい。

中二の頭のまま大人にまで、二十年間体を延ばすとああなつてしまふ様だ。

経験のある自分としては、体感的に拷問か刑罰に全く違ひなかつた。

ああ、あの酔ったドヤ顔が憎い。

酔いしれる中年は確かに「うざい」が、しかし実際にかなり思い詰めていたのは間違いない様で、俺を見てしゃべくる彼の目には、確かな安堵と喜びが、それはもうありありと見て取れた。

「うざさは百倍だ。」

「うざわ〜る。」

ああ、「うざ〜い。」

闇話はさておき。

そんな進化の袋小路に、天からの閃きの「じとく」、あつらえたかの

ような能力をぶら下げるこの俺が現れたのだ。研究者達の目には、天使か何かに映った事だろう。

『超能力者<sup>レベル5</sup>』にだつてなれる。馬鹿な。それで満足しておけばよかつたのに。

とは言えこの力だけ、万能ではあるが全能ではない。

全能はおそらく『絶対能力者<sup>レベル6</sup>』の領分だろう。おかげでこちらは苦労している。全く以つて、嫌味以外の何物でもない。

要するに。

実はこの能力、現在のレパートリーでは『大能力<sup>レベル4</sup>』が限界なのである。

しかもそのうえ、『大能力<sup>レベル4</sup>』での発動が許されているのも『電撃<sup>エレクトロマスター</sup>』、『精神感応<sup>テレパス</sup>』、そして最近手に入れた『能力追跡<sup>AIMストーカー</sup>』の三つだけ。

そして、同時に展開できるのも三つまで。

当然レベルは関係ない。3でも、4でも、能力は能力。頭の領域は、同じくらいの取るのである。

また展開する能力の切り替えにも、上は一秒から、下は0・一秒

も。

戦闘中ではあまりに分かりやすく、あまりに致命的な隙を生まなければ、この能力の最大の利点、圧倒的な汎用性を活かしきれいのだ。

すごいと言えば確かにすごい、その点は明々白々な真実であるが。だがその真実もいい変えれば、ただ『大能力』<sup>レベル4</sup>が三つあるだけ。最大出力が『大能力』<sup>レベル4</sup>程度のモノしか出せない、という事になってしまふ訳である。

肝心の『肉体変化』<sup>メタモルフォーゼ</sup>も、出力が秀でているとは言い難く。といふそもそも戦闘自体に向いていない。

いくら変化させても肉体は肉体。生物は生物。コンクリートの壁を砕くか、鉄の板をへこませるのがせいぜい。限界である。

残機を削るつもりで力を搾れば、限界だつて超えられるが。溜めがいるし、連発も出来ない。残機を削るのも本意ではない。

結局。限界は、限界のままなのである。

もつとも、死に難さのみに焦点を絞れば、文句なしのナンバー1なのだが。

やはり戦闘には今一つ向いていない。

死なないだけでは殺せないのである。

『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>。『大能力者』<sup>レベル4</sup>三人分。

雑魚三人と互角程度の戦力。：『超能力者』<sup>レベル5</sup>にあるまじき汚名である。

そう易々と負ける筈もないのだが。『念動力』<sup>テレキネシス</sup>の様な、隙の少ない類の相手は遠慮したいのもまた事実。

特攻かまして距離を詰めて、『精神感応』<sup>テレパス</sup>か『能力追跡』<sup>Aイムストーカー</sup>で動きを縛れば問題ないのだが。無効化されれば骨折り損だし、近づけなければ言わずもがな。三人寄ればフルボッコ。

徒党を組めば、雑魚の牙も届き得る。魔人の喉元もいまだ人のモノなのだから。

その辺りのバランスの取れたチームとは、可能ならば絶対に戦いたくは無い。

正直、『裏』の組織は鬼門である。

『アイテム』怖い。

超怖い。

『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>が殆ど汎用性だけで今の地位につけたとすれば。『<sup>メルトダウナー</sup>原子崩し』は破壊力だけでかつての地位に居座つていたのである。<sup>第4位</sup>

あれが俺を殺す気になったのならば、俺もただでは済まないだろう。

そして顔芸だけならこそ知らず。『アイテム』はチームとしてのバランスも、かなりの高レベルで保っている。

最高レベルの歩兵と、最高レベルの士兵に、揃って道を阻まれては、最高レベルの生命力を誇るこの俺も、なすすべもなく最高レベルの砲台に駆逐されてしまつ。

『アイテム』は、俺を殺せる戦力なのだ。

金髪…？

テケテケにでもなつていればいいんじゃない？

『アイテム』と俺は互角の戦力だ。

それ故に、まずは不意を突く。

攻める隙を『』えず、守る暇を『』えず、探る知識を『』えない。 そうして初めて優位に立てる。

そうして初めて戦いになる。

さて、準備は整った。

気配も近い。

勝負は既に始まっている。

彼ららもその気だろ？

だが、気付かれてはいけない。

負けるわけにはいかない。

負けは死を意味するからだ。

一度の負けで死が決まるなんて、全く理不尽極まる修羅道だ。来る所まで来てしまった感じが半端で無い。いったい俺の世界はどうなっているのや？。

俺はまだまだ死にたくない。だから負けるわけにはいかない。

負けるわけにはいかないのだ。

絶対。

絶対に。

勝つ必要はない。負けなればいいだけ、それだけでいい。

そうだ、負けるわけには、いかないのだ。

前を見る。

女性が歩いている。スタイルが良く、髪の長い美しい女性だ。

中学生…、に、換算できる年になつても、成長の兆しが一向に見えない、ちんちくりんの自分とは大違ひだ。

中身が野獣のぐせに生意氣である。

隣を見る。

同じく女性が歩いている。彼女は相変わらず何を考えているか分からぬ。少なくとも、それを表情から窺う事は出来そうもない。

そして胸がでかい。かと言つて太つてはいる訳でもない。つまりスタイルが良い。

ろくに運動もしないぐせに生意氣である。

最後に後ろを見…別に良いか。

これ以上、無暗にくこむ必要もないだろ？

使いつ走りのぐせに生意氣である。

彼女らの足取りは重い。『彼女ら』とは、当然自分も含んだ言葉

だが。普段ではあまり見ない様子だ。何となくこの空気は、死亡フラグの様な気がしてしまつ。どうだらうか？

今回の任務では、普段を覆す事態が降つて出てきたのだから、仕方ない、と言えば仕方ないのだが。

まあ、文字通り降つて出てきた事態、なのだから。こんな重苦しい空氣にもなるだらう。

肩を切つて前方を行く一人だけ、『重い』のニュアンスがやや異なるのも…、仕方ない。運が悪かつたと割り切らう。

ズカズカ歩く一人に、トボトボ付き従う、そんな自分達の何と市民なことか。

やるせない。

「…麦野さん。もう少し落ち着いては如何でしょうか？超死亡フラグですよ」

頑張つて逝つてみた。

「んー？何が言つたカナーン？」

「…いえ、何も言つてません」

よかつた…、伏字は出なかつた…。

じゃなくて。

危うくほつとしそうになつたが、声以外笑つていなかつた。もし  
これで犯人が、手応えも無くあつさり死んでしまつたら、私達がと  
ばつちりを食らひ羽目になる。

せめて顔だけは笑えとあれほど。なんて言つたら、私が笑えなく  
なつてしまつだらうが。

「Jの際もう笑えとは言わないので、手加減とか、手心を覚えてく  
れはしないだらうか。弱つたネズミへの猫の対応とかでも、もうこの  
際構わないから。切実に。」

こんな時に、手軽にやつ当たれる下つ端とか、いないだらうか…。

…いる訳ないか、そんなアホ。

「……はあ……。麦野さんも、落ちてきた埃を超思いつきりかぶ  
つて怒つてるのも分かるんですけど…どう思いますか、滝壺さん」

「…………」

「…滝壺さん？」

反応が芳しくない。いつもはボーッとしていても、水を向ければそれなりには返してくれるの。」

「滝壺さん？」

再度問い合わせる。

…はたしてそれは、私が何かを期待してのことだったのか。

「…おかしい」

たしかに、いつも泰然としているあなたが、そんな不安そうな言葉を口にする、おかしい事だろう。

「超びつしましたか滝壺さん。おかしいとは聞き逃せませんね。何か超気になる事でもあつたんですか？」

「…相手のことが掴めない。こんなのが、おかしい」

「はあ…？それは…、あなたと同系統の能力者が向こうにも居るつて、さつき超言つてませんでしたっけ？そいつが超妨害してるつて。…もしかして違つたんですか！？」

問いかける。

「…違わない。たぶん、それは合ってる。…けど、これは…」

「…?」

「…たぶん、数は三人だと思う。で、その内の一人がA.I.M拡散力場に干渉してる。それは間違いない。…けど」

「けど?」

問いかける。

「…これだけ近づいても、何の能力かがまだ分からない。…それに」

「それに?」

…問いかける。

だんだん雲行きが怪しくなってきた。

これではまるで、本当に何か、私達を殺せる奴が待ち構えているみたいで…。

「…それに、それにその三人の能力が、…ちょっと変で」

「アンタ達ー?何しゃべってるの。バカがこの先に居るんでしょ?  
?…せっかく行くわよ」

言いながらもさつさと進む、彼女は私達を置いていくつもりじや  
あないだらうか。

進む先に待ち受けていた扉も、彼女の異能の前にはその役目を果たす事も出来ずに、粗大ゴミになりながら吹き飛んでゆく。  
果てしなく彼女は女王様だつた。世俗の常識など、塵芥と等価と言いたげな背中だ。

はたして進んだ先のへやには何が有ったか、漂つてくる鉄くさい風の湿り具合からして、碌なものではないとの保証は頂いたが。

だがそこには何もなかつた。

いや有るには有るのだが。しかしそこに繰り広げられた惨状は、想像していたものとは大分違うと形容して、なんら差し支えないほどに、違っていた。

むせ返るほどに濃い、生々しい鉄の匂い。スクラップとなつて散乱している、何らかの機材の数々。へこみ、ひび割れ、所々にクレーターを残した床や壁。そしておそらく、『実験動物』を繋げる為の枷の様な物。

そうか、此処はそういう実験をしていたのか。

ならばこそ、より不自然なこの惨状。力のある存在が、激しく暴れたことが容易に想像できるこの場所に、一番無くてはならないものが。見当たらぬ。

死体が無い。血液も、所々、床や壁のクレーター附近に、点々と。

少なすぎる。あの体中にじびり付く濃い匂いは？…全くじぶり合はない。死体に限っては、肉片すら見当たらない。

これは…異常だ。

「おかしいわね」

眼を細めながら呟いて、の中央にまで歩いてゆく。

臆することなく、堂々と。

彼女が『アイテム』のリーダなのだ。あんな姿を見る度にそう実感する。

「燃やした跡は無いわね…。なり『空間移動』？…いや、そもそも今の状況で死体をかたずける意味なんて…」

そう麦野が言つた、その瞬間。

「危ない！」

普段聞きなれた声の、聞きなれない叫び声。

直後、轟音が響き渡る。

クレーターが一つ、増えていた。そしてクレーターの中央には、背景たるこの一室に溶け込む、だまし絵のような、鈍色の、保護色とでも呼ぶべき服を着た人影が…。

人影？あれは…、人？

と言うか、あれは服なのか？あのどこか生物的で自然な質感は、むしろ皮膚のような…。

見事な色彩により詳しくは見えないが、見えないなりにも良くなたら、尻尾の様なシリエットも見える気がする。

そいつが片膝立ちに良く似た格好で床を踏みしめている。

予想するにかかと落としを決めたかったのかもしれない。

まともに当たりでもしたら、そつそつたるこの部屋の風景の仲間入りを果たすこと間違い強烈な一撃だが。

しかし刻み込まれたクレーターが、血で赤く染まる未来が訪れることは無かつた。

彼女は彼女で、何かしらの勘に従つて動いていたのか、それとも滝壺さんの気合一発が効いたのか。余裕をもつてとはいかないまでも、でのど元にまで届きかねなかつた一撃を、見事にかわしていた。

彼女の軌跡を、光の跡が糸を引く。

直後、閃光がほとばしる。

一條一條と、線を重ねて放たれるそれは、見るからに下手な鉄砲も、といったあいさまだが。しかし構わないだらう。

当てることが目的ではないのだから。

能力の反動により彼女はさらに大きく距離をとり、保護色の奴も、少なからぬ距離をとるしかない。

なにぶん至近距離だから、下手な鉄砲でも一~二発は期待出来るかなとも思ったが、憎い事に奴は無傷の様だ。

アドリブで狙いも付いてないとはいって、奴の着地を狙つて放たれた攻撃を、こうも軽くいなされる様だと、避けられることも織り込み済みだったのだろうか？

……だとしたらかなり厄介だ、見かけ倒しの線は、これで完全に消えた。

などと思考を巡らせる内にも刻々と戦況は変化する。

麦野さんは体勢を立て直し、滝壺さんは一歩下がり、私は一歩前に出て、フレンダさんは既に退避した後だ。

回避した直後で動きの止まつたそいつに向かい、拳を振り上げ距離を詰める。

先程の拳動を見る限り（と言つてもまともに捉えられなかつたが）においては、期待はかなり薄いだろうが、牽制位にはなるだろう。

「ツはー。」

何！？、いま何が！

ツモ、そつだ！そつと言えば奴は何処に！？

混乱の極み。

思考が錯綜して自我が曖昧になる。なにー？なにー？一体なにがー？！？そつーこの感覚前どこかでー？

「縄旗あああああアアー！なにやつてんだああアアアアーーー！」

麦野の殺意全開の一喝を受けて、一気に思考が覚醒する。

そうだ、今のは『精神感應』だ。

精神攻撃を受けて、脳みそに直接ダメージを負ったんだ。

廃人にならずに済んだのは、間違いなく滝壺さんの能力の賜物だらう。

つ！

滝壺さん！

彼女は今、私よりも無防備だ！

しまつた！だとしたら滝壺さんが！

しかし、同時にちらめく幾つもの閃光。

『原子崩し』<sup>メルトダウナー</sup>の光線だ。

慌てて眼で追うよつて振り返り、そして滝壺さんが無事な事を確認し、いまだに奴が健在なことも確認した。

「…私とした事が…」一生ものの不覚だつ！

「絹旗アアアー！滝壺から離れんなアー！」

「分かつてます！」

急いで駆け寄り無事を確かめ……。

良かつた大した怪我は無いようだ。

「すいません滝壺さん、超助かりました

「…ん…おやすござります」

会話しながらも警戒は怠らない。

滝壺さんがいる以上、一度引っかかった手にはもう乗らない。物理防御力は隙の無い私の場合は、これでもう大丈夫だろう。

だがそれは滝壺さんが、周囲の警戒と私のサポートにつきつきりになる事を意味する。

麦野さんはおそらく大丈夫だろうが、やはり心配だ。あれは底が知れない。

「きぬはた、気おつけて。」

「ええ、超分かつてます。」

「あれたぶん『デュアルスキル多重能力』だよ」

.....

衝撃の仮説。だが。

「滝壺さんの目から見ても、やっぱりそう思いますか？」

安直な発想は、出来る限り避けたいが。『テレパス精神感応』は射程が短い。

少なくとも、視認可能な範囲内にいなくては、あのタイミングで私に膝をつかせるのは不可能だったはずだ。

それが、無暗に私が突っ込んだ理由でもある。

誰だつて、ああもあからさまな『メタモルフォーゼ肉体変化』が『テレバス精神感応』を持つているとは思わない。

「滝壺さんが先程から超おっしゃっていた三人つて、あいつ一人の事だつたんですね」

「……うん。あと一つの能力で、わたしのチカラをジヤミングして

そして彼女は、そんなことより、と、会話を切つて。

「向こうは多分、こいつの手札を知つてゐる

ドーンーと、再度轟音。

度重なる衝撃の仮説を、まるで裏付けたいがごとく、あいつはまだ元気に跳ねまわつてゐる。

『メルトダウナー原子崩し』相手に、一步も譲らざる。

「麦野さん？」

少し様子がおかしい。

あれで割と肉体派のきらいがある彼女が、ある一か所からほとん  
ど動かない。

動きたくない…。動けない…？

「たぶん、さつき私を助けた時に、かなり焦つて能力を使つたん  
だと思ひ」

力の反動にまで気が回らなかつたのか…！

「たぶん、狙つてやつてる。少なくとも、最初からの一連の流れ  
から今まで、全部」

それは…。

数秒の、重い沈黙。

連續する破壊音だけがそこに波紋を投げかける。

絶望的とまではいかないまでも、その手前までは、阻む術もなく、  
土足で踏み荒らされている様な、そんな感覚が、背筋を伝う。

麦野さんが倒れたら、次は私達も…。

絶望に進むこの状況で。

死神の足音が、今にも聞こえて来そうな狂氣の渦中で。

その中心が唐突に。

「……ツ  
……ツ  
……ツ

ツツツ！－！－！

総毛立つ。怖氣が走る。

異音、騒音、雜音。正しくそれら全てを合させた様な、異様な不快感を抱かせる、そんな声。

翻訳など出来ようもないが。だが分かる、一つだけ確かなこと。

嘲っていたのかも知れないし、憐れんでいたのかも知れないし、喜んでいたのかも知れない。

それともただの威嚇だったのかも知れない。

そのどれでもいいし、全てでもいい、何だって大して変わらない。

あの怪物は、笑ったのだ。

すべてお見通しだ、今さら気が付いたのか？

そう言いたげに。

笑ったのだ。

活路に迷う私達を、まるで道化だと。

笑った。

怪物の哄笑が響き渡る。

「んなやつ、どうすれば……。

歯噛みする。無力な自分に腹が立つ。

進路も退路も、闇に包まれた。

希望の光明は、いまだ見えない。

## 第8話 幕開けから窮策まで 上（後書き）

遅れてすいません。

web小説である以上、明確な期限なんてありませんが、流石に此処までだと不味いと感じております。

すいません。

感想、指摘、評価などがありましたらお願いします。

それでは、また次回。

第9話 幕開けから窮屈まで 下（前書き）

「とにかくせ。

ちなみに今日はの後には、いい天氣ですね。と繋がるやつです。

お茶を濁していふわけではありますんよ？

ええ、決してそのようなことは。

本編を、どうぞ。

## 第9話 幕開けから窮策まで 下

夜の学園都市。

とある学区。とあるビルの、とある一室。

既に時計が、一巡の後に明日を刻み始めて、久しいこと。

パソコンのモーター音だけが、規則正しく、静かに波紋を広げる  
静寂の中。

研究者、木山春生は、死んだ魚と言えば、そちらの方がまだしも  
生きているといった死人の目で、椅子にへばりつくオブジェと化し  
ていた。

彼女のその全力投球な死に様は、このまま朝まで放置すれば、ど  
こからともなくハエがたかりに現れるのではという有り得ない想像  
にすら、信憑性を与えるほどに説得力を放っている。女優はこり  
ごりと笑う明石家さんまくらいの説得力だ。

いつそ芸術的なまでに洗練された唯一教師の寝姿は、暖かくも  
厳しい、もはや後光のごときオーラを纏う、涅槃に至つた聖者のそ  
れだ。悟りを開いたブッダもきっとこんな姿をしていたに違いない。

教師とはかくあるべきなのか、これが眞の教師の資格なのか、教  
師とは皆すべからく境地を語れるべきなのか。

木山先生は全く全然動かない。だつて寝てるし。しかし威容に満ちた顔は、たとえ一切残さず表情が抜け落ちようと、一つだけ確かな事を教えてくれた。

私は執念に果てたのだと。そしてこう続けたかつたに違いない。

無理はダメ、ゼッタイ――

「まあ[冗談はさておき]、寝るなりパソコンの電源を切つてからにしてね。つねにセーフ」

「…………」

我が家の大黒柱こと『思想統一』<sup>トライバー</sup>のお帰りである。ここはの主人である。ただいまである。ならば、お帰りの挨拶を返してしかるべきではなかろうか。全くヒロインのくせしてなつていない。これだから脱ぎ女は。

「おいおい、そりゃあないなあ木山先生。つれないぜ。返事がないなんて、ただのしかばねじやあないんだから。ほら、ファイト、ファイトだぜ――」

「…………」

「おや?先生?...木山先生?返事はー、木山先生」

「…………」

「……ああ。これは木山先生もしかして、何かボールしちゃったりなんか、しちゃったのかな？」

「…………」

「……いやいや、いやいやいやいや木山先生。違うよ？まだだよ？  
ボールはまだまだそこそこなこと？君はまだ上手く飛べないよ？あと少ししながら頑張りつけてー」

「…………」

「せんせー、せんせー、ねえってばー、ねえせんせー、ねええ起きてよー、起きよつよー、ねえせんせーー」

「…………」

「・・・・シエナルギーが、きれた…？」

「…………」

「起あら、起きあら、起きあら起きあら起きあら、起きあら、起きあら  
よーーこまやらなきや、こま田覚めなきや、右手が暴れ出したやう  
んだよー。もひとつせー今日は疲れたんだよ。だから、起きてよーー」

「…………」

「…………」

「…………

起きた。

超起きない。

さすが研究者。集中した時の突っ走り方は実に突き抜けている。俺の突っ込みも追いつかない程だ。脱ぎ女なんだから、着てている時くらいは変態はお休みしたっていいのに。常に戦場とはこの事か。彼女の変態強度は、同じく変態を駆使して戦う俺の経験を持つても脱帽せざるおえない。流石伝説、格が違つ。

しかしここで諦めては男がすたる、名がすたる。

そう、こんな苦しい時こそバシッと決めて、主人公の格と威厳と言つものを見せ付けてやろうではないか！

もう思つだらうー？木山先生！――！

…………

「む……、貴様、起きているなーー？」

「……今日は珍しく元気じゃないか……。それとすまない、少し寝ていたようだ」

おやおや、新たな伝説の幕開けに水をさすなんて無粋な脱ぎ女だなあ、田をつぶっているものだから気付かなかつた。それにしても流石流石、Hマークのミスリードはお手の物だぜ。

「…今は、午前3時…、どうやら、それが滞りなく終わつたみたいだな…、収穫はあつたのか?」

そして田はつぶつたままでしゃべり始める。本当に疲れているようだ。そんな先生に、これからこんな答えを返せなきゃいけないなんて、心苦しいつたらありやあしないぜ。

「ふむ、収穫。収穫ねえ…。ふふふ。聞いて驚くといこよ。なんと収穫はゼロだ」「

「…ゼロ?それは…。なり結局、君の情報がどこから漏れたのかは分からなかつたと…とか…」

「そうだね、まあそつなよ。いやほんと、気が滅入るね。…ああそれと、一つ訂正だ。滞りなく終わつてなんていないよ。むしろ、今丁度滞つている最中だね」

はあ?

みたいな表情で訴しむ木山先生。まあそつなだうつ。注文通りの顔だぜ。

だけどまあ、このくらいで驚いてもらひつつ困つてしまはづ、ま

「……」

「それは一体どういってんだ……だ……？」

「……」木山先生を向きながらそのまま固まる木山先生。半分とじた眠そうな目を僅かに見開き、残業したのに残業手当をもらえないのが当たり前と知ったサラリーマンのような疲れ顔を驚愕で彩る。

正に期待した想像そのままの無間抜け面。追加注文にも抜かりはない。重畳、重畳。いやほんと、うちの脱ぎ女は良く出来た脱ぎ女だぜ。

「……その姿は……、一体どうしたんだ……？」

「ん？……」の姿ねえ？ふむふむ、気になるかい？ふふつ、気になるのも仕方がない。本当は秘密の安売りはしないんだけど、まあ仕方ないついでに、折角だから教えて上げよつ。どうしてだと思つ？」

「……そんなに勿体ぶる必要がどない……」

「必要がない事はしちゃあいけないかい？はははは、全く木山先生は科学者だなあー。そんなんじゃあ何時まで経つても脱ぎ女だぜ」

途端にめんどくさそうな空気を感じになる木山先生。おや？いまの和やかなやり取りのどこにそんな要素があつたのかな？変な…、変態な木山先生だな。脱ぎ女の考える事は良く解んな

いぜ。

しかし勿体ぶつてばかりいっては、一向に話が進まないのもまた事実。かぶせは三回までが笑いのセオリーだそうなので、せつかくだからあと5回はかぶせたかったのだが、仕方ない。

「ふふ、いやね、ひょんなことから体重がいつ間に100キロくらいいまで減っちゃってね。ここまで減っちゃうと、ほら。いつも姿のままだと、身動きすら取れないじゃなし。だから……これってわけ

「……成程……。それで、そんなに小さく……」

そう、今の俺は、ちっちゃくなっちゃったのだ。体が…ちっちゃくなっちゃったのだ。耳がでっかくなっちゃったり小さくなっちゃったりすることは多々あれど、全身がちっちゃくなる事なんて、東の高校生探偵でもなければそんそうない。マギー審司もこれにはびっくりする」と間違いないのではないだろうか。

ちなみに普段の身長は一七七センチちょい、体重は一〇〇キロ前後である。これはなかなか突っ込みたい所かもしれないが、俺だって結構大変なのである。

内臓の代わりに筋肉を隙間なく詰め込んだり。その他にも骨とか皮膚とかに、いろいろと違うものを詰め込んだり、せつとこんなもんだぜ。ぱっと見は中肉中背のイケメンだが、そのじつ脱ぐと凄いのだ。腕なんてもう、ショコラちゃんみたいなんだぜ。

しかし、今の俺は何と言つゝことでしょう。身長一〇〇センチ程度

の、木山ホイホイなショタボディーではありませんか。以前の隆盛など、見る影もない。いやん見ないで、恥ずかしい。

「……そつだ、忘れるというだつたが、わちきの言葉せどりひ言ひ意味なんだ？やはりその姿と関係が？」

「……ふむ、『今一度滞つてゐる』……。その言葉通りの意味だよ。なに、ちよつと敵が予想外に強くてね、手こずつててゐるんだ」

「…………」

正直に、分かりやすく噛み砕いて答えた筈が、何を思つたかまたしても木山先生は黙つてしまつ。寝てしまつたのかな？…眼を開けながら眠るなんて、器用なことをやつてのける。

なにも知らない小学生児童を寝かしつけた事との関係を暗に示しているのかな？

無慮的だなあ。もつとフリーダムでアミコージングに暮らせばいいのに。そんなに疲れを溜めこむような事ばかりしてては早死にしてしまう。溜めこむのは、田の下のクマだけでいいのだ。…あれ？、今なんか変なこと言つた気が…？まあいいや。

「……もしや、…早く逃げた方が良いか？」

別に寝てなかつたみたいだ。心配はたんなる俺の杞憂で、文字数稼ぎにしかならなかつたらしい。心配し甲斐のない奴め。木山先生

のややこしさにはホトホト呆れて物申したくなつてしまふ。

「んー？…逃げる？…ああ。別に追手なんてないぜ。一体なにから逃げる氣だい、木山先生」

「…違つのか？」

「ふふふ。三十六計逃げるに如かずなんて諺は有名だナゾ、だからつて逃げ込むほど分かりやすくなつた覚えは無いぜ」

「……」

あれれー？今日の木山先生はよく眠るなー。話の途中で寝るのは、失礼な。一度ならず一一度までも。傷つくぜ。…許すまじ。この恨み、どう晴らすべきか。

「そんなわけで木山先生。この野口さんを上げるから、ちょっとくら出前を頼んでくれないかな？足りない分は自分で払ってくれたまえ」

「……すまない。もつと分かる様に言つてくれないか？」

おやおや木山先生、今ので伝わらなかつたのかい？俺と木山先生の仲だと言つのに、僕らはいつも以心伝心と思っていたが、間違いだつたかな？

「仕方ない人だなあ木山先生は。ピザでも寿司でも、炭水化物だつたら何でも良いよ。量はまあ、とりあえず、一番でかいのを20

個ぐらい頼んでくれたまえよ

「い、いや。…それは分かったから、もう少し説明を…」

「そんな訳で頼んだよ、木山先生。俺は今からちょっとの間眠るから。出前が届いたら起きてね。起きないようだったら、適当なもので温めれば起きると思つから」

やや強引な注文だつたせいか、木山先生があわてて何か言つて、やる様だがどうでもいい。て言うか聞こえない。

…………。

「ツ大丈夫か！？」

突然叫ぶ木山先生。なんだ、意外と元気じゃないか。そんな無駄なことを、わざわざ大声で言つちやうとか。

大丈夫な事なんて、いままで一度も無かつたことは分かり切つているくせに。

……おつと。そんな些事などでもいいんだ。大事なのは寝る場所だ、寝る場所。

……おお、あつあつた。そうだ、ソファはここに置いてあつ

たんだつけ。

「……そうだ木山先生。悪いけど、冷蔵庫の栄養剤は全部飲んじゃつたから。今田のお務めはもうこいよ……」

ぱたり、ヒンファにぶつ倒れる。

でかい、そして柔らかい。しかも変な手触りもしないし、そのうえ蒸れない。べたつかない。なんだこの布。半端ねえ。

伝えなきやいけないことは伝えたし、木山先生なら寝込みを襲うことも無いだらけ。あとせわっと寝るだけだ。ああー……、疲れた。  
「んなに疲れたのはいつぶりだらけ。ああマジ疲れた。ありえねえ。

さて。

おやすみ、木山先生。

戦争。

仮に今のこの場所を見る者がいて、そして表現するとしたら、この言葉が一番しつくり当てはまるのではないだろうか。

激しい音が鳴り響き、暴力の乱舞が、嵐のごとく瓦礫を舞い上げ  
蹂躪する。

例えそこにいるのが、たった三人の少女と一人の化物としても。  
彼女らが戦い、駆け回り、作り上げたせめぎ合いの闘争風景は、まさに戦争であり、それ以外の何物も入る余地はなかつた。

そう。今の此処は、法治国家に一夜限りで生まれた、紛れも偽り  
も有り得ない、戦場なのであつた。

(…ふむ、しかしまあ。戦況はこっちに傾いているわけだけど…)

実力では本当は互角な筈だったのだが。出だしの不意打ちが、見事に功を奏したようだ。頑張った甲斐があつたってやつだぜ。

いやもつマジで。あれは鮮やかで、美しくて、勇ましくて、素晴らしい。いま思い出しても鳥肌モノだぜ。あれは絶対オーラとか出てたよ、マジで。ゼッタイ。イケメンにも程が有り過ぎだよ。今回のMVPは、この俺で間違いないね。いただきだね。

で。

閑話はさておき。このまま押し切り通すには、色々働く必要が有つたり無かつたり。まあ有るんだけどね。いつも位の敵ならいらなくんだけどなあ。アイテムってめんどくさい。

今現在の状況を整理せねば。

まず、アイテムのリーダーこと麦野、麦野…、し…しず、…。茶髪のババアはかなり動きが鈍い。体の右半身をかばうようこそよたよたと。とてもぎこちない。

アバラビ…、あと足にも来ているみたいだ。そろそろ、杖が必要になんじやないかな。麦野おばあちゃん？

いかん。ちょっと爆笑しちゃうこうになつちやつた。

自重、自重。

あの二人も、似たり寄つたり、随分と窮まつたご様子だ。見事なまでに死相が出ている。頭の中身を直接つかまれたみたいなもの

だし、当たり前か。

窒素じや心は守れない。先手必勝か何か知らないが、正体不明にホイホイ近づいたのは、迂闊が過ぎたね。

電波モヤシに守つて貰えたからよかつたものを、彼女のジャミングが少しでも遅れていたら腸が詰まつただけの人形になつていた所だぜ。まあ、お蔭でこちらの日論見どおりに状況が完成したのだが。

いかんなあ最愛ちゃん。君のお友達は、ただでさえ吹けば飛ぶようなポンコツなのに、今ので更に壊れちゃつたよ。浜面君と会う前に死なれちゃあ、こっちだつて困るんだぜ？

「ツーこの…一ちよこまか動いてんじやねーぞ化物がツ…！」

おばあちゃんが、王の危機を知つた蟻みたいなヤバイ形相で何か叫んだ。ヤバイヤバイ。色々駄目だぜ、その顔は。

女としてと言つか、いやそもそも、人としてあの顔はいががなモノだろう。クトウルフの何かに、あんな感じのアレがいた気がするんだけど。

いあ いあ？ あい あい はすたあ？

よく分かんないけど、これから彼女に對して、人として接しているのか迷つてしまつ。麦野…、ええっと。麦野…しづ、しづ…。麦野シズウルフちゃん？ 本当に、大丈夫だろうか。

それに、ほら、怪我もしているわけだし。そんなに大声を出しちゃあ体に障るんじゃないかな？シズウルフお・ば・あ・ちや・ん。  
…やっぱり大丈夫か。シズウルフだし。

で、『ご苦労様なことにも、わざわざ冒んだ甲斐もむなしく、自慢の『原子崩し』<sup>マルトダウナー</sup>での砲撃も、結局ただの一発も当たらない。かすりもしない。フレッシャーにもなりもしない。

やれやれ、だらしない。狙いはぶれるし、発射は遅い、弾幕だって薄過ぎる。ふふふ。まつたくもつ、狙いにドンピシャ過ぎて笑いが止まらないぜ。

そんな俺の現在地は、ここ。電波ちゃんを守るように構えて塞がり立つ最愛ちゃん。そしてその向かい合わせに、シズウルフみたいな顔芸で、ドンパチ鉄砲<sup>じゅうぱち</sup>に興じるシズウルフちゃんと。その間。

彼女達一組の間で。つまり、挟み打ちを食らつ形で立ち回るのが、今の俺だつてわけだ。

挟み撃ちってあなた、不利じゃない、追い詰められてるじゃない？…ノンノン。そいつがそうでもないんだぜ？

前門の虎？後門の狼？そんな視点はナンセンス。焦眉の急などもつての外。火中の栗なら無視して通るこの俺が、普通の挟み撃ちに飛び込む訳がないじゃないか。

あれは違うよ。電波ちゃんと最愛ちゃんは、シズウルフちゃんのサポートをしているんじゃない。

あの二人は、いわば俺の人質なのだから。

シズウルフちゃんの能力は強力だ。ほかの連中がどうかは知らないが、少なくとも、俺だったら一撃食らつただけで死ぬ。

まあ、予備動作を見れば余裕でかわせるのだが。かわした先が完全だったら、こんな煩雜な手を使ってまで戦わない。策を練るほど暇だったら先に殴っている。

相手は『撃ち抜く』のではなく『押しつぶす』を座右の銘に据える、前々時代の脳筋ゴリラだが、ゴリラだけに、殴り合いでは分が悪い。

彼女の作る領域は、文字通りの光の弾幕。ビームの城壁。

真正面から彼女に臨んで、原形をとどめたまま凌ぎ切るのは、至難の極みだろう。

しかし、まあ。

当たり前に常識的で、あえて掲示するまでもなく、みんな知ってる事なのだが。ビームが当たれば死んじゃうのは、別に俺だけに備

わった特徴つてわけじゃ ない。

街の表で、へらへらへらへらシャレでいる無能共など言つに及ばず。帝督くんや通行くんだつて、肉に直接あたれば劇的なイメチョンを遂げることだろう。スマロボのシンジくんもまつ青の。：おつと、ここはじつちかつて言えばアスカちゃんの方だつたね。いやむしろ、シンジくん以外は大体かな。失敬、失敬。

それにしても。帝督くんと通行くんのイメチョンは、ちょっと見てみたいかも知れるね。

だつてあれだぜ、聞けばおののく天下のトップ2様だぜ？平たく言えば夜王だぜ？みんなのアイドルの、嬉し恥ずかし錦上添花の艶姿だぜ？絶対見たいって！！ フヒヒ…。…あぶない涎が。

見たいなあー、見たいぜえー。もう通行くんとかどうでもいいから、提督くんのそれだけでも絶対見たいぜ。

ようは、つまり何が言いたいのかと言うと、電波ちゃんや最愛ちやんマルトダウナときが『原子崩し』の砲撃を耐えるわけが無いって言つたいのだ。

だから、それを利用する。

常にボケガキ二人組と顔芸ババaシズウルフとの対角線上に、自分の立ち回りを絞ることで確実に『原子崩し』の流れ弾が突き刺

マルトダウナ

さるよつて、各自の陣地をコントロールして、流れを握る。

味方の攻撃はノーダメージなんて、まるでどこかのスマブラみた  
いな、とぼけたルールは幻想をぶつ壊すまでもなく存在しない。

最愛ちゃんは、電波ちゃんを、実に一人の怪物から守らねばなら  
ず。シズウルフちゃんは、自分に並ぶ怪物を、全力で押さえながら  
も、全力で手加減しなければならない。

対する俺自身も、かなり有利ではあるものの、三人の高レベル能  
力者からの攻め手を必ず先手で潰さねばならない。

じつちもあつちも、三者三様に攻めきれず。必然的に場は膠着し  
逼迫する。

だからこそ、俺の勝ちは揺るがない。

初手の不意打ちが活きてくる。

刻んだ傷は次第に広がり、殺し合ひの最後の瞬間まで止まずに響く。  
それは、例えどれだけ煩く痛もつとも体を侵し蝕み続ける。

苦痛の毒が、全身にくまなく沁み渡った時。その時に、俺の勝利  
と言つ形でもつて、この戦いの運命は集約されることだろう。

なんて完璧なタクティクス。不沈艦の『超能力者』が、今やまな板の上の鯉、火傷を負ったメタグロスである。

もはやケーシイすら落とせまい。ラティアス（俺のこと、可愛いところとか特に）を落とせる道理なし。…いや流石にそれは言い過ぎか。シズウルフ（はがねタイプ）だって、歯を食いしばりながら頑張っているのだ。踏み躊躇つては泣かせてします。

まあ、無理な物はどうせ死んでも無理なのだから、いい加減諦めてくれれば万事丸く収まるのにね。不思議なババ♂、シズウルフだぜ。

さて、まあ眞面目な話。彼女らが俺に勝つのは、もう確実に不可能だろう。断言できるね。

と、言うのも。俺は『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>の力ゆえに、今まで演算を間違えたことが一度もないのだ。

今まで、とは。当然この力を得てからの話なんだが。

少なくとも、その時以来、入力値に不備がないかぎり、意図しなかつた答えが出ることはあり得なくなつていた。有るとすれば、情報不足に因んだ想定外だけだ。

速さと正確さが定評の『思想統一』の演算である。頭の巡りの良さでは、足元に及ぶ者すらいはしない。

演算能力だけで『異能力』<sup>レベル2</sup>を『強能力』<sup>レベル3</sup>に進化させる位はヨゴー

だね。多少計算が得意だつたら『無能力<sup>レベル。</sup>』なんてそういうある訳ないのに。怠慢だねえ。

おつと。かとんぼのことは関係なかつた。軌道にテ「コ入れしなくては。

修正、修正。

さて、さつきから戦闘描写が一つも入つてない事に、ビックの誰かが、きっと疑問を抱えてモヤモヤしていることだらう。

この際せつかくなんだしフォローしようぢやないか。

おおつとー・シズウルフ選手、ここで渾身のビームストレートオーナー

しかしかわす！意澄（イズミだよ！忘れないでね！）選手、かわす、かわすかわすう！！！乾坤一擲の攻撃をかわしきつたあ！！！まるで流れる水の様な淀みない身のこなし！ギャラリーは釘づけです！！

おおつとーここでハプニング！シズウルフ選手の放つたストレートが、観客席に一直線！！！これは直撃かあ！！？

はじいたああツツツ！観客席の小学生イイ！なんとシズウルフ選手の剛速球を弾いたあ！！！これには会場盛り上がるうーー隣に伏せる鈍くさそうな彼女も、驚きを隠せません！！！

一進一退の大乱闘う！…選手達の明日はあ…！

どつちだあ！…！…！…？？

…………

大体こんな感じ。

突っ込みは無しの方向でお願いしゃ ッす。

…………

事実なのだ、仕方ない。

実際、見ているこっちからしたら、テレビの向こうのドラマが特撮みたい感覺なんだから。だつて体が勝手に動くんだもの、そんなもんだつて。あれだよ、あれ。反射、反射。いや、白いのじや無くて。あっち、条件反射の方。

適当なプログラムをアレでナニして、そのへんから神經を引いてくれば、はい完成。体を弄れるつてことはつまり、そういうことだよ。ドヤ。無意識の演算なんて、朝飯前の一度寝くらこにヨゴーで

すよ。

余つた頭は今晚のオカズでも考へていい。勝手に体が一件落着してくれるんだしね。似合わないよ。博愛主義の俺とあつちやあ、戦いなんて、とてもとも。

あとオカズは個人的には木山先生がベターだとこの辺で提唱したいんだけど、どうよ？

もも肉辺りなら、外れたことはほとんどないし。特に女性だったり基本的に食いややすいし。きっと木山先生のそれも中々に味の玉手箱だと舌舐めずりな訳なんだけど、大丈夫かな？大丈夫だよね？大丈夫じやあないかなあ？

……うーん。

…やつぱりいいや、筋張つてて栄養もなさそりだし。

それに、オカズどころか主食とデザートまでついて目の前に揃っているんだからね。据え膳を残しちゃあもったいない。欲望のままに、行つてみよ！

「笑つてんじゃねえぞ化物が！！追い詰めたとでも思つてんのかあああツツ！…！」

ふふつ。シズウルフが顔芸やつてるぜ。笑つちまうね。おお、怖い怖い。

それに、そんな建前丸出しの強がりは、誰かに見せたつて誘えるのは失笑だけだぜ？ほら、スマイル、スマイル。笑顔で逝つちまおうぜ！！

怪物と怪物がともに唸りを上げた一進一退だつた攻防は、何時の間にやら偏りだし、もはや猶予は一刻程度。

シズルウフちゃんの一拳手は鎧びたように鈍くなり、一投足にはかつての精彩がぬけ落ちていた。やれやれ、冗長な戯劇も、ようやく飽きたのか、ついに緞帳も下りる氣を起こしてくれたらしい。終わりは近い。

避けて、避けて、避けて、避けて、避けて、避けて、避けて。あいだいいだで、ちょいちょい牽制を挟んだらまた避けて。予定に沿つてパターンを繰り返し、気にする事と言えば、位置取りの微調整をほんの少し。

体が軋む、傷が叫ぶ、痛みが滲む。死ぬ？ふざけるな！テメ　が死ね！

震える？焦る？望みが絶たれた？隣にいても、決して自分に牙を剥けなかつたそいつが、今はこっちねめつける。

怖い？私が？ありえない…ツ…！！

生憎なことに、電波ちゃんが往生際が悪くも張り切つておるおかげで、『精神感応』は少し感度が悪い。

が、そんなもの無くとも、ありありと彼女が教えてくれる。リアルタイムで親切だ。臨場感が伝わってくる。

認めたくないかい？

ははっ、甘いよバーカ。

死ぬんだよ、君は、今ここに。

ほおら、見えた。

光の壁に、ひびが入った。

「ツ…ガアアアアアアア…ツツツ…！」

ブチブチブチイ、と、嫌な音。しかしそこには赤がない、飛沫がない。おや？ 以外だ。まだ逃げる体力が余っていたのか。ちょっと驚きながらも、離脱用の『原子崩し』をいなすのは忘れない。全自動だ。忘れない。

手につかんだのは無数の髪の毛。何だつけ?プロンドリヤツ?手の中でグツチャグチャだ。うわつ、きもつ。

狙い外れたが、まあこれで終わりだ。髪の毛と言つても、強い力でひつかければ当然危ない。色々と。たとえば体勢とかね。もつと体をいたわらなくちゃ。怪我をしているんだから。ねえ?

瞬時に近づく。その間三秒。迎撃は不可能だ。ろくな対応も出来まい。もう目と鼻の先。あとは足を振り切るだけ。シズウルフちゃんからしたら焦眉の急つて感じかな?この業界じゃあ、火が見えた時点ですッズゾーンだぜ?...そんな説教はいらないか。

じゃあ、ちょっとなり。

どかん。

音を破る轟音と共に。

ぬるい空気が、真っ赤に滲んだ。

.....。

あれ?

.....あれ?

何で俺が倒れてるんだ？

攻撃、…いつたい誰だ？

シズウルフちゃん？

最愛ちひさん？

電波ちやん？

…ああ。

「イタタタ…。か、肩がはずれ…。女の子にこんな銃、撃たせるなんてありえないってわけよ…」

いたつけ、そういうば、そんな奴も。

ああ、化物に備えるんだつたら、武器の一つか二つ用意しているか、普通。

くそ、ぬかつた。

はあ、終わりは俺、か。

じゃあ今度こそ。

さよなら。

アイテムの諸君。

極大の閃光が、駆け抜けた。

「……」んなひどい仕打ちを受けたんだよ。酷いよねえ、泣いちゃうぜ。鬼畜の所業だよ。そう思つよね、木山先生」

「…………」

「ねえねえ木山先生ー。…ねえ、慰めて！傷ついたからー！…あ、このイクラ美味しい」

「…………」

「ああ、木山先生も疲れていたんだっけ？」めん「めん、じゃあ話はまた今度で。もう寝ちゃつていいよ、木山先生…おおつ、パツツアうめえ」

「…………」

「……んん？木山先生。どうしたんだい？カピバラみたいな顔で。悩みでもあるのかい？…うーん、えんがわはあんまり好きじやあないかな」

「…………」悩み、ではないが。…君は、その…………今の、話だと。君が死んでしまったように、聞こえたのだが……？」

「ん？…木山先生が、目の前の現実を信じられない節穴アイの持ち主だと思わなかつたなー…ふふつ。…ふづ、水が超うまい」

「…………ああ。現に君はここにいる。だからいや、…意味が分からないんだが」

「意味いー？そのままだよ。つまつ、ほり。お話を出していく、そ

いつが死んだんでしょう？それくらい理解しよーゼー。……あ、ピッタ  
アのみみはあげるよ」

「…………みみだけくれても困るんだが……」

「まったく、もう。そんな意気じやあ俺の相棒は務まらないぜ！  
木山先生。……困るんなら仕方がないね。しつかり食べると良じよ

「…………はあああ。…………」

「もひつ。木山先生は仕方ないなあ。簡単に言えば、簡単だよ。  
ほひ、囮を、囮。分身の術を。……うめえ、しなしなの海苔がうめえ  
！」

「…………自分の体を作ったのか？……そんな事が、いや、可能、なの  
か……」

「ああ、ひとつおきだぜ。何せ正面からぶつかるのを避けたかつ  
たからね。三十六計逃げるに如かず。有名だぜ？……いつも思うんだ  
けど、かつぱ巻きつて数が少なくて物足りないよね」

「…………それあんなに消耗を…私はかんぴょつ巻きがもつ少しは  
しいな」

「いいやあ。ちがうよ。たしかに分身は消耗が激しいけどね。あ  
の時は補給もしてたし、倒れるほどじやない。そんな技は使わな  
いよ。まあ、何故だか百パーセント誤差なく「コピー」が出来なくて、  
どうしても本体より劣化しちゃうんだけどじね。お蔭でこう言つ時以  
外では使いづらいんだよねえ。……てつか巻きが泣いてるぜ？」

「…………そう、か。君が一口で全部食べ切った時から諦めたよ……」

「消耗の原因はさあ、変な能力者達がいてねえ。たぶん俺が食べたのとは別のモルモットじやないかな?七人で、相性が悪くてさ。手こずつちゃったんだ…あれえ?てつきりいらないと思つていたぜ」

「……成程。とこりで、分身とはどうやって情報交換をしたんだ?やはり『精神感応』か?開けた直後に平らげておいてよく言つ。てつか巻きは最初に食べるネタではないだろ?」「

「『』明察。コングラチュ『』いや、別に褒めるほどす『』くないか。あとは他にも『電撃使い』とか『能力追跡』なんかでも出来る筈だぜ?とは言え、伝えるだけなら『精神感応』が一番手っ取り早いんだけどね。…さて、『』ちそつさま。俺はそろそろ寝るとするよ。おやすみね木山先生」

「…ああ私ももう寝るよ、おやすみ」

ひつして、やたら長く感じた一夜の騒動が幕を閉じる。

結局、当初の目的は果たせないままだった。無駄足と言われば、無駄足だ。

しかし、先程は収穫がゼロだったと言はしたが、厳密には少し違つた。彼には、ある予感が生まれたのだ。

今日起こした襲撃は、言わば最後の希望だった。そして希望は、

淡くも響く、靈のよみに消えてしまった。

もう、無理かもしない。

あるいは、それは予感であり確信でもあった。

ただ、たとえ確信でも、認める訳にはいかない。

あの掃き溜めを打ち壊し、這い出た時から。もしかしたら、それ  
ひとつと前から。決めた事だから。

まだだ。

まだ認めるには、早すぎる。

歩みは止めない。

だつてもう、戻る気なんて、ないのだから。



## 第9話 幕開けから窮屈まで 下（後書き）

「とにかく、いい天氣ですね！」

台風はいい天氣です。え？情報が古いですか？

予定ではもっと速かつたなんて言えません。

アイテム戦が終了です。

やつたね！

まあそれだけです。

誤字、脱字、その他ご指摘。

感想、評価、その他一言。

待つてあります故じじじして下さい。

それではまた次回。

## 第10話 窓策から散歩まで 上（前書き）

じんにむかは、お久しぶりです。私は生きていますよ。

北沢です。

別に病氣もしないし、殊更忙しくなるのを選ぶほど体育会系ではありません。部活？ 家に着くまでの歩数を数えてたりしますが何か？

開き直りもなんだかどうにもあれなので、更新です。更新しましたよ？

ほめてもいいんですよ？

まあ、まちまち四ヶ月。一言なにか有るとすれば、日常パートって難しい。

どうぞ。

## 第10話 窓策から散歩まで 上

「寝ぐせOK！」

「……………そうだな」

「ファッシュンOK！」

「…………私はあまり詳しくないんだが、いいんじゃないか？」

「天氣は良好！」

「…………夕立には気を付けた方が良い。最近はたまに外れるそうだ」

「ふふふつ！行つてきます！」

「……ハンカチとティッシュは持つたか？」

「オールグリーン！」

「そつか…、行つてらっしゃい」

木山先生、のりが悪いぜ…ッ！

俺だけ元氣なのが際立つて、木山先生の存在感がどんどん雲散霧消だぜ？

そんなんでは、巫女服すら取り上げられて、個性はなにかと聞かれたら、声が能登だといつ！」とへりこ、あの噂のシャドーガールになっちゃうぜ！

だからほら、いつもみたいに脱ぎ脱ぎしようよ、ハリーアップ！キヤストオフ！変態なんでしょ！？それが先生のアイデンティティ一なんじょ！！？いいじゃんいいじゃん！しようぜ、お医者さん『ヒツヒツ！

……ツは！……危ない危ない。危うく変態がうつるところだつた。この『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>に病気をうつそうとは、一生の不覚。大胆不敵な変態だぜ。

しかし、ふと疑問に思つたのだが。

……精神病つてうつるのかな？

……ツまさか！魔術師の仕業！？

なるほど、それならすぐて説明できる。

木山先生が変態なのも、木山先生がだらしないのも、木山先生がどうしようもなく変態なのも、木山先生が救いようのない変態なのも。何もかもが納得いく！

そうだ、そうだよ。誰かのせいでもなしに、あんな変態でいられるほど、木山先生が残念なわけがないし、俺が変態になっちゃうわけがない。

ちくしょう魔術師め！覚えてやがれ！

そんなこんな昼下がり。

変態はおいといて、今日は休日、日曜日。太陽の日。そして神様がサボった日である。まあ、俺は無宗教なので、そんな寝言などセント・ニコラウスがクリスマスの夜に不法侵入に手を染める事実よりも信じていないのだが。ほら、禁書的に、ね？

だがあえて言おう。日本人的には、セントと言えば鹿である。譲れないぜ。

ともあれ今日は休日だ。休日を過ごすとは、それ即ち休むことこそ意義であり。意義であれこそ、一口に休むと言っても、その在りようは個々によってさまざまであるのだが。

しかし、ここは学生の街。平たく言えば、今をときめく青春の街。休日ともなれば、跳んだ跳ねたのアグレッシブさを發揮して騒ぎ散らすのが、変わり映えのない常であろう。

もつともらしいだけの、全米が泣いたり笑つたりな映画を見て時間潰したり。ひどく衝動的で短絡的な変なノリで、適当な買い物をして大量の後悔を買つたり。最近どおり？とか、実りのない会話

で頭の悪さを演出してみたり。

そんな感じで大体の奴らは、休日を有意義（笑）に過ごすために外に出るのではないだろうか。

つまりあれだ。一体なにが言いたいのかと言つと…。

ほら、俺も子供じやん？

最近は忙しかったから。できる遊びなんて、子供に化けて木山先生をたぶらかす程度のお粗末なものだけだったのだ。

始まつて早々にバトルパートの突入して以来、怒濤と形容するほかない殺し合いのバーゲンセールのさなかでは、気を抜く暇などあつたものじゃない。あの日々にはホトホト参つて、疲労困憊とは、実は今の俺の姿を大昔の誰かが予言してできた言葉では、と錯覚していたくらいだぜ。

合間の貴重な田舎パートを、羽をのばすために潰したつてそういう罰は当たらない筈である。いやむしろ、俺の怠けを妨害するやつにこそ、罰が当たつて然るべきだぜ。

…そんなわけで、もつもと俺は出かけよつ。しかし変態はお留守番だ。放置プレイにはきつと喜ぶはずである。変態だもの。仕事だつて片してないしね。

「行つてきまーす……！」

万感の思いを噛みしめて、泣き出す。

「しかしこの後、彼の身に、今日の安らぎの全てを打ち壊す悲劇が訪れる」と、この時の彼は、まだ知る由も無かつたのである。

「……君は、何を言つてこるんだ……」

とくに意味は無いぜ。

じゃあ、行つてきまーす。

1

「あ、『ダーフマター未元物質』」

「あ、『アーヴィング思想統一』」

おお、これが世間に聞く孔明の罠。

なんと。諸葛亮孔明は、己の死後、一千年近く経った後にも、こんな罠を残していたのか。

働き過ぎである。先を見据えすぎである。名軍師にも限度がある。もはや嫌がらせとしか思えない。意外と、彼は暇だったのだろうか。

いやしかし、いかに蜀に先見の明ありとうたわれた天才なれど、手がかりどころか、とっかかりすら、微塵すらもかすむ程に希薄な二千年後を、予測できたと考えるには、常識的にも非常識的にも無理がある。

孔明ではないのか？だが、だとしたら誰がこんなにも高度な罠を

…。

…つ。まさか…つ！

「まさか…、まさかアレイスターの正体は、…孔明？」

「あ？ なに言つてんだ、お前」

「え？ 何の！」と、お兄さんはナーモシリナハイヨ？」

危ない危ない。迂闊だったぜ。この歴史を搖るがす、1989年のベルリンの「」とき壊滅的事実は、世の純粹な三国志ファンのためにも、墓場まで死守しなければならないのだ。

「それを、こんなキャラキャラの、クソ頭の軽そうな変態クソ勘違いクソホストもどきクソ虫クソボケクソ野郎クソ末元クソ物質クソなんかに明かす訳にはいかないぜクソ死ねやクソ」

「誰がクソだテメエ喧嘩売つてんのか」「！」

クソメールヘンが、何やらお怒りである。最近の若者はカルシウムが足りんなあ全く。やれやれだぜ。ビタミンEも一緒にとらなきゃ意味がないと、あれほど言つたのに本当に全く。

現在、チンピラに絡まれる俺が踏みしめるのは、第七学区のアスファルト。つまり何の変哲もない普通の場所。そう、何の変哲もない普通の場所だ。

現在時刻、午前十一時。多くの少年少女でごった返す、何の変哲もない場所を、モザイクをかけて、ばかさけなければテレビにも映せない、倫理的には問題しかないようなケダモノが、そう易々と、躊躇いなく出歩いていい程に特殊な場所では無いのである。

だのに、全くこいつときたら、TPOにシカドぶついや、子供たちの平穀を、ケンシロウの革ジャンもかくやと残酷非道に破りせしめ、あげく反省の欠片も見せず、果てには俺に盾突くと。

驚くほどの皮相浅薄、軽薄短小、厚顔無恥。彼は法治国家をなんと心得るか。

「ふむ、ダークマタ最近の若者のモラルの低下は、まつこと由々しき問題だね。『未元物質』よ」

「人に向かつてクソクソ言つてた奴が、なに諭そつとしてんだよ。モラルについては同意するが、てめえにだけは言われる筋合いはねーぞ。…ってオイ。なんだその、コンビニの入口の前で駄弁つてる

不良じもを見るよりな田はよ。ちげーだろ。その目を向けられんのは断じて俺じゃねーだらうがよー馬鹿にしてんのか殺すぞテメエ！」

「……ふう。やれやれ。逆ギレとはね。みつともないなあ『未元物質』。それでも第一位かい?」

「……なあツーーのツ……。一ツ。…………。ツハ。……まあいい。雑魚のおふざけ程度は見逃してやる。格上相手に吠えるしかできねーなんぞ、テメエにはぴったりの醜態だしな。第四位」

???

彼は、一体何を言つて居るのかな?

今のはまるで、俺に対する皮肉や嫌味みたいじゃないか。『ミニユニケーションの潤滑油とすべく、この俺の、拡張に拡張を積み重ねた、文殊も敵わぬ超越的に優秀な頭脳の記憶領域より、一般常識とされるカテーテゴリーの内から、適当な挨拶を選んだだけのつもりだったのだが。はて、何所かに間違いがあつたのだろうか?』

それとも、会話を交わすことそれ自体が、『氣を悪くする理由に足るほどに嫌われていたのかな?俺は。

まあどうあえず、いじめ謝つておくか。

「まつはつはつ。怒らせちゃつたみたいだねえ、帝督くん。めんめんめん!」。謝るぜ。他意も悪意も無かつたんだよ?」

「……ああ。…………あー。明らかに他意と悪意だけを選ん

で吐き出してやがったじゃねーかよ。テメエ。まあこい。俺は寛容だからな。悔い改めるつてんだったら許してやる

「ああわうそう、帝督くん。話は変わるけださあ。……あ、この話も別に、何か他意とか悪意とかを含ませてる訳じゃないんだけどね？」

「あ？」

「哺乳類のくせして、羽を生やして空を飛ぶ、コウモリって動物がいるじゃん？あいつって股間の生殖器がさ、……あ、当たり前だけどオスの話だぜ？」まあそれで、そのナニが体に比べると、それはもう立派なんだってさ。そして当然、性欲もね。んで、反比例みたいに頭は軽いんだとか。上も下もかなりのエネルギーを使う部位だから、進化することは、どちらかしか取れなかつたんだって。……、うん。凄い説得力だわ。……あ。他意はないよ？他意は

「テメエやつぱり馬鹿にしてんじゃねーかよ」「うー。

「え？馬鹿にするだつて？変なの。君は馬鹿にするまでもなく馬鹿じやないか。今さらだよ

「馬鹿！？今さら！？じゃあテメエ、他意も悪意もなく普通に俺をバカだと今まで思つてたつてえのかよ！て言つか、大体お前どいで俺が羽はやす」と……

「ああ、ほり、また馬鹿が騒ぐ。

「……うー…………うー…………」

チャラ男が何を伝えたいのか。

「…。愛すべき日本語が、ひどく乱れつづると、どこかで聞いた覚えがあるのだが…。なるほど、確かに。これはひどい。」

あるいはこれが、近く若者の間で流行る、ギャル語とか言う奴なのだろうか。こちらはつい最近まで、深窓ごろか窓もない部屋でくつちやねしていた、引きこもり界のいわばエリートである。彼がそれと知つて、あえて伝わらない言葉で人を惑わすゲスだったとはなるほど、人は見かけによるものだ。

まあ、エリート様は、俗悪な俗塵にまみれた俗調にてよしとする、俗世の凡俗なる俗人が信じる、俗学と俗気に濁つた俗悪な俗眼によつて齎もたらすされる俗言、俗習、そしてその他卑俗な俗趣の数々。そう。エリート様は、そのような俗世間のペカペカしたアレやコレやなど意に介さないのである。

「ゆるふわ? モテかわ? ブレンド? 今年の新作?」

「はつはつはつ。なんとかそれ、知らんがな。」

一応の基礎的な教育は履修済みだが、流石にギャル語は未履修である。青春はまだ遠いぜ。

「ツチ…。ああークソ。全然話が進まねーじゃねーか。…ってああ、そうだ。今日は話があつて、わざわざ会いに来てやつたんだよ。それをテメ ふざけ倒しやがつてクソッ…」

ほほー、これはこれは。なるほど、彼は俺に用があつたのか。あんまりにアレなものだから、てっきり日常パートの一部として、偶然にも運命的に鉢合わせたとばかり。出会いは意図的な物だつたと。はあー、きな臭いねえこれは。

まあたしかに。このままこいつとコントを続けて滑り通して。まかり間違つて、俺までゲテモノだかイロモノだかに分類されではたまらない。丁度いい。聞くだけならば、聞いてやろうじやないか。帝督くん。

それにそろそろ飽きてきたし。……うん。丁度いい。

「ええっ、話い？用があるならわつさと済ませてよ。はあ、まつたく。コイツは何をモタモタしてるんだかねえ。さんざん手間を取らせてからこ、ここの股間が」

「こかつ……なんだつて？」

「股間。耳、悪いの？」

「あー……なんつーか……股間？」

「帝督くんが……股間でしょ？」

「……」

沈黙。

チャラ男が黙つた。もつとも、黙つているのか黙りたくないのか、どうも、何か言いたげなふうだが。まあいいや。股間の一つや二つ、誰も気にはしまい。

「」は捨て置くのが、クールな男の回答だぜ。

……おや？

チャラ男が、大きく息を吸い込んで……。

……。

……来る！！

「テメエ……ッ この野郎ツツ……！ 股間、だとッ！？ この俺をにむかつて…股間だと！？ まさか俺の個性そのものが股間とでもいう氣がツツ！？ ふざけてんのか！？ ふざけてるよなあ！！ ふざけんじやねえぞ！！！ 股間は俺の体のごく限られた一器官であって明らかに俺自身とは別物だろうがツ……別物だろうがツ！！ それを…股間だとっ！？ ああ。ああ分かつて。直訳的な意味じやなくて、つまり比喩的な意味で、要するに俺のアイデンティティーが俺の股間だから=股間が本体であつて俺自身も股間に準ずると言いたいんだろ！？ なおさらふざけんなよ！ この…、テメエ…。顔とか、能力とか、お前の敵とか、いろいろ…つ、いろいろ目立つのがある中で！ 何故、あえて、股間なんだよッ！！ 認めねえぞ。絶対認めねえ！！『垣根帝督』股間』なんて頭の悪い等式なんて断じて成り立たせねえぞ「え？ 勃たせる？」どうで

もいい部分に食いついてんじゃねえッ！「つぐ、食いつくだんて卑猥な」ウルセエツツ！！死ネツツ！！黙れツツ！！口を閉じろツツ！！何でもかんでも口を開けば股間に結び付けやがつてツツ！！！股間じやねえだろ、何で股間がそんなに好きなんだよテメエ曇休みの中学生男子か中学生からやり直してえツてかコラクソテメエいい加減に股間から離れろ！！つて何回俺に股間を言わす氣だツツ！！！テメエやっぱり話を進める気がねーだろ！グロ肉の分際がつ！！調子に乗つてんじゃねーぞ第四位イイイツツ！！」

ズサアアアアアツツ！！！…と。

まるでそのような効果音が聞こえるのではと思い違うよ。そんな旋風にも似た、不自然で、激しく、なにより突然な空気のうねり。人の規格の上に立つ俺が、『突然』と認識してしまう突然さ。

それは間違いなくそこに、『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>を持つてしても未だ理解の及ばぬ力が働き、かつその力が、ほんの数歩挟んだ先で、目尻を吊り上げ激情あらわに相対する男の意志に呼応したものだと認めるには十二分に足りるものだった。

理解不能の怪力乱神。

『<sup>ダ・クマタ</sup>未元物質』のそれである。

そしてその力の顯現が、彼がふざけた会話の応酬に、割合本気めに怒っているのを示す分かりやすい指標でもあった。

彼自身にここまで普通にキレてしまつのもそこそこ珍しいもので、そもそも普段仕事でまみえる有象無象相手に、ウザがる事はあっても、それでキレるのは有り得ない。

何故ならそれは、相手が取るに足らない有象無象で、あえて分別するならば、クラゲに勘違いされがちなカツオノエボシや、RPGでは基本中堅モンスターことレギオンのことくに、ある程度のかたまりになつてやつとこを一個体として見れるような。矮小脆弱虚弱貧弱前後不覚の無知蒙昧、赤子の手の方がまだしも捻りがいのあるよつな。軽く手を振るっただけではたき落される虫けらのよつな。いやいや手どころか、睨んだだけで落としちゃえるよつな。

虫けらって言つた虫の死骸？

つまり、いちいち相手にする程の連中ではなく、当然そんなのに怒る訳もなく。

それでも怒つたと言うのは、何だかんだで『思想統一』のことをそれくらいの存在だと、<sup>デマゴーグ</sup>ただの踏み台ではなく、そこそこ以上の存在だと、彼の思いのほかに高い評価を意味する所なのだが。

だが。

だが。

そんな片手間での分析なんてどうでもいい。そう、どうでもいい。

上条当麻がこれまで落としてきた女の数よりもどうでもいい。『<sup>アクセラレータ</sup>一方通行』の本名よりもどうでもいい。浜面仕上が鼻にピアス穴をあけるに至った経緯などにどうでもいい。神裂火織やオリアナ・トルソンのバストサイズよりもどうでもいい。

…おっと。最後のは余分だつたか。俺が胸などよりも尻の方が好きなことは羞恥の事実である。周知だけに。

と言つか。いくら成長したからって胸がでかくなるのってなんか変だと思うんだよね。人体の神秘も程々について言うか。起伏があり過ぎても萎えるって言うか、むしろ起伏がない方が燃えるって言うか。

いやそんなものもひとつでもよくて。

…………。

……ぐる……に、く……？……？……グロ肉、……だと……？

聞き逃せないぞ。

この、俺が……？

グロ肉？

グロ肉。 グロ肉。 グロ肉。

グロ肉。

「.....」

「シチ。やつと黙つたかよ。……んで話なんだがよ……」

「.....」

「まあ話と言つても、そう大した事じやねえ。よつはアレだ。おまえ俺と……」

「.....」

「……おこ『思想統一』。ちゃんと聞いてんのか?」

「.....」

「なに黙つてんだよ。口がきけねーわけじゃねーだろテメー。さつきまで黙れつつても勝手に騒いでた奴がいきなり黙るなよ、何とか言えよ。おこ『』。聞いてんのか?」

「.....」

「あ?……はあ~。さてはテメヒビツてやがんのか? まあ無理もねえ。当てる氣でやつてりゃあ今頃お前、どうなつてたか

分かんねえもんなあ？」

「…………つて……た」

「あ?」

「グロ……つて……た」

「…………おい……」

「グロ肉つて言つた……！」

「いや……」

「グロ肉……ツ」

「…………」

「俺のことかアア――――シツ――――」

「バゴオオオオオッ!!!!ヒ。

直後。猛り狂う渾身の雄叫びと共に巻き上がる、おぞましい破壊音と、力の奔流。

髪は逆立ち激情張り詰め、溢れる気合は天高々に通り抜ける。見開かれた双眸は爛々と怒りを湛え、たぎる心をなにより熱く、そし

て強くみなぎりせる。

剣刀のごとくに鋭利な殺意を裡に宿し、そして彼は爆誕する。怒りこそが彼の撃鉄。それこそが彼を解き放つ唯一の引き金。

鮮烈にして壮絶。炎の名を字に戴くその情動は、まばゆいばかりの黄金の光を、己の化身と威容を顯す。

金髪青眼、筋骨隆々。闘氣オーラをまとひきの姿、正に超戦士。

「…『未元物質』。お前は、俺を怒らせた」

「…マジギレかよ！ 怒りで覚醒とかお前…、少年漫画かッ！！」

「いや、勝ちフラグかな、って」

「んな訳ねえだろイミフすぎんだろバカ、どこのサイヤ人だクソが」

意味わかつてんじやん。と言おうと思つたら睨まれた。

なん…だと……。

たしかに、たしかに俺は、煽り文句を使うべき場面で、正しい目的で、空白を挿んだ2行まえで使つた。彼をバカにしたと言えばそうだろう。だって楽しかったし。あいつ嫌いだし。自分の気持ちに嘘はつきたくないかったし。

だがその煽り文句は心の中でのセリフであつて、ある界隈では地の文と呼ばれる文章形態の一つで、この物語においては全体の内のおよそ8割を占めるそれである。俺が主人公だとあえて仮定するならば、つまりところ、地の文とは謂わば俺のプライベートフロアであり、何をやっても許される無法地帯。殺伐としたダークファンタジーが席卷する世界観の渦中で一所懸命と侵食を食い止める清浄なる結界、絶対聖域、意澄の世界、ザ・ワールド、時よ止まれ、君は誰よりも美しいから。あとATTフィールド。それ即ち心のオアシス。

そんな地の文に対して、タイミング良く睨み利かせた彼には、寒氣にも似たある種の戦慄を禁じ得ない。判然とせぬその正体。名状しがたき股間のような彼は一体…。

まさか…。彼はエスパー！？ そうだね、『超能力者<sup>レベル5</sup>』だね。

とか考えてたらまた睨まれた。… サーセンwwwクソメルヘン先輩  
… wwwww。

睨まれた。

「…てめえ俺の話聞くのがそんなにイヤか」

「そん『ナニ』！？ おいおい帝督くん。その話題はもう終わつたんじやあなかつたのかい？ しつこい人は嫌われるぜ？」

「……」

「冗談だつて睨むなよ、ちょっとした遊び心も必要なんだぜ帝督

くん？

まだまだ睨む帝督くん。せっかく釈明までしてやつてんのに、不<sup>ふ</sup>貞腐<sup>てくさ</sup>れたようなこの不愛想。やれやれキレる子供は了見が狭い。ぶつ殺してやろうかコイツ。

なんぢやつて。

「しかし話…話、ねえー…。まあ、聴きたくないと聞えれば…。  
うん」

気になるね

でもその話つてや。『けいけい』側の話でしょ？

今の言葉は音にあらず。喉ではなく、別の場所を使った超常の言葉。

「……あ？」

俄<sup>にわ</sup>かに滲む、不穏な気配を感じ取ったか。だらしなくたるんだア水面を引き締め、彼の顔色は次第に真剣身を帯びた、神妙とも言い換えるべきものへと変わつていった。

はて。その表情、ホスト顔にはかえつて不格好だと忠告するべきだろ？ 非情な眞実に打ちのめされるであろう彼は、伝えた

として、それも自分だと受け止められるであろうが。

ともあれ。

聞かれちゃまずい。そりでしょ帝督くん。

「…何が言いたい

何が？　ああ「何がといえば、そういう、一度言つてみたかったんだよ。言つぜ？　言つちやうぜ？　垣根ーッ！　後ろーッ！　後ろーッ！」

よつやく、事じこに思い至つた帝督くん。思い至つたとは、あれだ、自分の不用心さとか。

そして大抵この場合、振り返つた時にはもう遅い。

さあ、君の驚愕と絶叫を見せてくれ！

「あ…、ええと…。な、なに？　もしかして私、邪魔…、だったかな？」

空氣を読まない登場だが、あえてこの場では歓迎しよう。

「別に邪魔とかじゃがないぜ、美琴ちゃん。」の股間が一人いきり立つて空回りしただけだからね」

「股間じゃねえつつてんだろグロ肉ツツ！……」

「」かっ…。アンタ達なにへんなこと叫んでんのよツツ！……」

それにして同じのバカ二人、ノリノリである。

別に海外のテレビ番組とかは流れないけど、何かしらの絵になりそうな光景ではある。股間がどうのと叫ぶホストと中学生では、一体どんな危ない絵にするつもりだと言つ話だが。

しかし、まるで表しようのないこのときめき、或いは躍動感は、その絵が決して悪いものではない事を、どこか予言めいて教えてくれている様な気がした。

味わつたことのないこの清々しさ。

まさか、これは…、いやこれが…。

「青春、つて奴なのか…？」

「もうここからテメエは黙つてろツツ！……」

つあ、せっぱ違つわ。

「青春、つて奴なのか…？」

相変わらず何を言っているか分からぬ彼はまた何をわけの分からぬ事を言っているんだろう。

「もういいからテメエは黙つてろッ…！」

ああ、名前も知らない青年の苦労が日に浮かぶよつでたまらない。  
だからといって、真昼の往来で憚りもせず股間はねだと叫ばれては、  
こっちだってたまらないのだが。

しかも周りの人は、おそらく私までもをこのイロモノコンビの三  
人目なのだと思つてゐるのだろう。勘違いも甚だしい幻想なのだが、  
口惜しくもその誤つた認識を正すすべを私は持たない。残念。その  
ふざけた幻想はぶつ壊せないのだ。

違うのに、彼らはあくまで彼ら一人の「コンビ」であつてトリオでは  
ないのに。世話になつた知り合いだからと、せつかく会つたんだか  
ら声をかけようと思つただけなのに。その健気に対して股間とはな  
んたる仕打ち。

他人のふりでやり過ごせばよかつたと、後悔先に立たずのこのままである。私は何を血迷っていたのだろうか。一分前の私に出会う奇跡が許されるのならば聖杯にでもドラゴンボールにでも祈りたい所だがしかし、ここは科学の街。オカルティックな遭遇をさっぱり淘汰してしまったこの街には、胡散臭い薬と生々しい機械から生じる鬱屈とした超能力しか存在しないのである。ああ、あの頃の私はまだきれいだった。

などとらしくもない現実逃避をしている場合ではないのだった。放つておいたら、手がつけられないを通り越して耳をふさぎたくない事態へと衝撃にファーストブリットしかねないのは、初対面でみつちりと、時が止まる思いで黒子が経験済みである。

そうと決まればさっさと止めなければ。眼先に危機が迫つてなお見て見ぬ振りなど愚の骨頂。そして私は、己の愚かを黙つて認めるような生き方を選ぶつもりは毛頭ない。

「つーかよ、何を理由に、お前は俺のことを見出しちんだよ。説明しろ説明」

が、

「理由？… そう言えば何でだらうね。理由なんて、考えもしなかつたよ。しかし君も、いきり立つたと思えば頭をひねつたり、忙<sup>せわ</sup>しないね。股間くん。思春期なの？」

しかし。

「「」の…つ、グロ肉が…つ。考えもせずに人を見て股間に例えるとかどんな思考回路だ、完全にシヨートしてんだろテメエ」

しかし。

「まあ確かに帝督くんのそれはショートかもしれないけどさ、俺のそれまで一緒にしないでほしいぜ。俺のはアレだ、もう、ビックカンマグナム？ アハトアハト？ みたいな？」

しかし…。

「なんのツ、話だよツ、このツ、グロ肉が…ツ！  
ウグウウアアア…ツツツ…！ ック…、抑えろ…ツ 抑えろ  
俺エ…ツ…！」

しかし…ツ。

「……んん？ 抑えろ？ ……？ ……ツ！！ イヤ、イヤうん確かに魅力的だと思つよ美琴ちゃんは…？ だけど…、だ、だけど彼女もほら、まだ中学生なんだからさ、好きな人とかも、いつ、いるんだろうし、デリケートな年齢なんだしその、そういう話題は…、あ、その…、もう、も、もう少し節度つて言つか何て言つたらいいいか…。… 分るよね！？ … ってああそうか。考えなしに、直感的に股間だと思つたてことは彼が比喩的にではなく本当に股間だからだつたんだ。じゃあ仕方ないね。鳥を見て羽が生えてる、つて思うのと同じことだもの。これで疑問が一つ解消できた。イヤーすつきりすつきり。ははっ。先に俺だけすつきりしちゃつてごめんね。まあ俺のすつきりと君のすつきりじやあ意味が違うけどね。嫌にスー、っと出てきたなつて不思議に思つてたんだよ。おつと、この出たも君とは意味が違うから、一緒にしないでくれたまえよ、股

間（小）くん

しかし……ッ！

「……どこから突っ込んでほしいか言ってみろよ、怒らねえから。ボケが多すぎるのも目をつぶってやるから。ほら」

「突っ込む！？ クツ……！…… どうやらもう抑えられないみたいだな、股間。 美琴ちゃん。 ああ、俺が食い止めておくから、早く逃げなさい。 なに、心配はいらない。 君の……は必ず守つて見せるから……」

しかし、ツツー！！！

「テメエのことだよバアアアアアアアアアアアツツツツツツカ  
アツツツツツツ！――――死ネツ――死ネエツツツ！――――  
死ネエエエエエエエツツツツツツ！――――――グロ肉ウウウウ  
ウウウウアアアアアアアアアアアアアア――――――」

「ツな、んだとー? まさかー! ツ! 一ノ刀! 、流……」

しかし……ツツツ！――！――！――！

これは ツ、これは ツツ！――

「アンタ達はあ…ッ、いい加減にしろ!」のッ、ボケコンビ共がああああッッッ…！…！」

ほとばしる紫電。舞い踊る肉。迫り撃つ不可視の力。

平和に色めく白昼の表通りに突如として現れる血生臭い異空間。牧歌的休日風景にこれでもかと震撼を見舞う無慈悲の破壊はまるで全てを誅する硫黄の雨、灰色の嵐、極大の衝撃波。子羊たちはひたすらに通り過ぎるのを待つに甘んじるしかない。

ただ恐怖し震えることのみを許すそれは、毒々しき暗黒世紀を創造する災禍を担いし三人の魔人が繰り出す殺人的小宇宙。極彩を放ち靈毒を極める、異形の腕にて暴力を運ぶもの。巻き込まれしは塵へと還し、悉くに生の祝福を奪い消し去る。

もはや逃れるには遅すぎる。

至高の力は、ただ戴天たいてんするのみ。

切られた火蓋は、爆ぜるのみだ。

「レベル4…、じゃあねえな。この強度は、…なるほどな。第三位程度が、この俺に勝つ氣か？」

その青年を撃ち貫くべき神速の雷撃は、前触れもなく消え失せた。激しい音も光も熱も、青年の纏まとうナニ力に阻まれ、空しく消えた。

見たこともない、不自然この上ない拳動と反応。疑問だけを僅かな余韻と宙に残し、それら全てを必然と、青年は不敵に嗤わらう。

まだ終わりじゃないだろ？

「嘯ぐがごとき眼光は如実に語る。彼の余裕、実力、届き得ぬ運命。  
即ち『未元物質』を。

「血の気が多いね、美琴ちゃん。流行りの肉食系女子かい？ 確かに牙の使い方に心得はあるようだけど……、さてその牙。お兄さんに届くまで、ちゃんと折れずについられるかな？」

泰然とたたずむ焼けた体。仕掛けも変哲も感じさせない体には、しかし余裕には不相応の、雷に匹敵する電圧を受けた証明たる傷を、絡みつく薦のように全身に這わせていた。

ゴムを焦がしたような匂いを侍らせる体は、耐え難い苦痛の疾駆へはを容易く想像させた。地にうずくまるが相応の痛みは、『思想統一デマコーグ』の位を以つてすれば、意識する価値もないかも知れない。この程度、傷にも不自由の範疇にも入らないのだ。

そんな思考に相槌を打つように、見る見る内に傷は傷の色を淡く失わせていく。

次に瞬きをしたころには、何もかもが元通りに再生していた。皮膚も、髪も、服すらも。

ニヤニヤと、彼がよく顔に張り付けている人を食った微笑みも、今は何割増しにも効果を上げて、心を薄くなづつける。

分かつていたことだが、荒事の経験値はかなり高くまで積んでいるらしい。他でもない、攻撃を仕掛けた側の自分が飲まれそうになるのが感覚で分かる。

立場の対等を感じさせていたあの青年もそつだが、やはり、強い。

たしか、『未元物質』<sup>ダーラクマタ</sup>と名乗っていたか。噂に聞く、いや、噂にしか聞いたことのなかつた、『有り得ないナニカ』を操る、学園都市第一位の名を、己の名だと。

驚きよりも早く、まず納得が先だつた。

なるほど、普通っぽそうなホスト然とした姿にも、どこか違和感を少ないながらも感じていたが。そう言つ事だつたとは。

レベル5<sup>デラゴー</sup>と、対等ならまだしも、教師でもない同年代の青年が上から田線で罵倒を浴びせるなど、中々珍しい光景の真相としては非常に納得のいく理由だ。数が圧倒的に少ない超能力者同士が何かしらの巡り合わせを持つのは、ある意味宿命のように思える。

だがしかし。いふらゴントをする位に中がよからうと、女の子の前で、股間なる公衆では語るべからざる単語を、広辞苑で初めて見つけて胸を高鳴らせる小学生をも上回る軽妙さで連呼する罪への免罪符にはならないのである。下ネタに恋をしていたあのころとは違うのだ。

人は学ばなければならぬ。進化しなければいけない。より広い視野と深い洞察を、日々の日課と鍛え続けて磨き続けて大人にならなければいけない。中学生でも知つてゐる。

なのに、こいつらは…ッ。

そう、彼らには少しばかり足りないものがあつた。

たとえば…。

「デリカシイイイイ-----！」

そう。バトルだなんだとかつこいい言い回しを覚える前にまずはこれ。女子中学生は普通は下ネタが嫌いだと言つことを心得なさい。

眩く閃く光がひろがる。過激で鮮やかな雷光は、彼女の魂の叫びの体現だったのかもしれない。

## 第10話 窓策から散歩まで 上（後書き）

遅いけど更新です。当然です。約束は守るためにあります。いいこと書いた。

頭の中では、詳細な流れと終わりまで一通りこなしてこられるのだが、この指が動かない。

富樫働けなんでもう言えない。

これからは取り敢えず、遅れるような活動報告あたりにでも進み具合を記しておこうかと思います。

ではまた次回。

## 第1-1話 窓策から散歩まで 下（前書き）

「とにかく、北沢です。前回に引き続き、比較的まつたりの田常  
系です。

田常とか……はあ？ みたいな感覚で、ちょっとびぱかりシリアス好  
きの私にこういった話は荷が重かつたようです。

……むずい。とくにペ・ス配分。気が付いたら一万文字とか……。

いつもよつ若千長めですけど、疲れ眼に気を付けてじうかん覧下  
せこませ。

ではどうぞ

「つは。お姉様のピンチ！？」

彼女、白井黒子は変態である。私がその事実に気が付いたのはどれくらいの時だつたか。初対面の時は、こいつちょっと生意気だなーとか思つたくらいで、まあ、比較的には、あくまで比較的にはまともだつた気がする。

少なくともあの時は、好きな人の下着に欲情するなどといった、ガチレズビ変態の性犯罪者ビストレートの女子の皮をかぶつて化けた、股間の怪物ではなかつた筈だ。

平気な顔で表を歩いては、清く生きる健常者たちをドン引きさせることを日課と日々罪を重ね続ける彼女を、まさか風紀委員だと一眼見て看過するものは、同レベルの異常者でもなければ眞無だらう。

既に志まで性犯罪者となり果てた彼女の、90年代の多摩川をも凌ぐとされるどす黒く汚れた精神汚染Aの心をかいぐつて正体を見破るなど、かの名高きリモコン女、『心理掌握』<sup>メンタルアウト</sup>を以つても難しいと言わざるを得ない。

どこをどの角度で切り込んだって、明らかにジャッジメントされる側の彼女は、きっと来世に生まれ変わつてもまた懲りもせずに会いに行くのだわつ。あの麗しの『お姉様』の所へと。

「行くなら仕事を片付けてからにしてくださいね、白井さん」

しかしそれは今ではない。あわただ慌しさを増しに増して日まぐるしく走り抜けたここ数週間の出来事に、じたばたして積み重なり白き摩天まてんを築くに至つた、オリュンポス山を思わせる、那由多の彼方へ林立するこの書類を、たつたの一厘弱りんりょうほど解体しただけで逃げ出されは、末まで恨み連ねて来世に持ち越し、禍根を残して祟つてしまふことだつ。

そんな非道を田井さんによいがるなんて、辛くて辛くてとてももともとも。

「ねぐべつ……。しかしのままではお姉様が大変なこと……、なるよつけな……、気が……」

口答えをしようとして、後ろにおわす固法先輩こくぽうせいけいの一警いちペッピをもらい、言葉も尻すぼみに作業に戻つてしまつ白井さん。中学へあがる以前の研修時代に色々あって、年功序列をぬきにしても彼女は先輩に対してはなかなか強く出られないのだ。

その先輩も一緒にになって、こんな雑用にひーこら勤しむ事態とあつては、流石の変態も鳴りを地下へとひそめるほかにはないのだろう。

めつたことなど、たとえ口答えとて出来る道理はない。しかもそれが、まさかただの勘だなんて。

まあ彼女の勘は、いつ見えて結構、特に御坂さん関連では当然になるのだが。まあ心配はないだろう。彼女の実力があれば、そんじよそこらの大変な事なんて、むしろ向こうから逃げ出すこと請け合いだ。

しかも。

「超能力者<sup>レベル5</sup>が一人ですよー？ めったなことなんてありませんつて」

そう、しかも今は、最近お世話になつた彼、御坂さんと同じく超能力者の『思想統一<sup>デマゴーグ</sup>』がついているのだから。

彼は口も達者だし、御坂さんの心配な所も上手くフォローしてくれるはずだ。予想外の厄介事も上手くいなして、平和に休日を楽しんで帰つて来て今日は終わりなのである。それが必然である。危機だと焦つて駆け付けたつて、また黒子か…。とかなるだけに決まつているのだ。

だいいち。それでも駆け付けて、御坂さんの冷ややかな目線に快感<sup>リゲ</sup>を覚えつつもビリビリされた、その先に待つてているのは『思想統一』たるあのお方。<sup>あさって</sup><sup>しあさって</sup>明後日明々後日の方向に常識を飛ばして捨てて置き去りにした、あのトンデモないお兄さんの話相手ではないか。

私からすれば、ふざけながらも色々と教えてくれるあの人の話はあまり嫌いのものでもないだが、それでもない白井さんでは余計に疲れて仕事も残つて、二時間だか三時間だかの後に、老けたアホ面だけを土産に引っさげてすゞすゞと帰つてくるという結果はシャンデラに焼かれるナットレイを見るより明らかではないか。

きっと、来年の夏が終わる頃には逃げることも叶わなくなつているだろう、なぜ無謀にも立ち向かうのか。

一日の意義をどぶに捨てるのが日に見えていく以上は、明日の意義のために仕事を消化する方がよほど利口な選択だと思つただが。

やはり、変態に理屈は通用しないのかも知れない。能力者の理屈と言えば…、エスパートタイプなのだろうから、通用しない彼女はあくタイプといつになってしまつが。…まあ妥当か。虫とか苦手そうだし。

「だから心配ですの…。あの殿方は、…『幻想猛獸』でしたつけ？ 件の怪獣との決戦の折にもふざけ倒すよつな方ですのよ！？ そのような方がお姉様を誘つて『明日の日曜あいてる？』だなんて！ まして『ちょっとお兄さんとお話ししようぜ』『だなんて！ 絶対なにか企んでいるにちがいありませんわ！』

「こんな、こんな仕事さえなければ…。

そう話を締めくくつて、暗澹あんたんと沈んだ顔で焼け石に水をやりにデスクに向き直る白井さん。

仕事さえなればナニをする氣気だつたのだろう？

またぞろ何かしらの凶行に走り抜けることは想像に容易たやすくいが、しかしこれ以上道を踏み外して、彼女はこちらに戻る気はないのだろうか。変態という名の所謂一つの霸道を突き進む彼女には、たとえ同僚のよしみとてついていけそうにない。今ままでだめなのか、現状維持は甘えだとでも言ひ氣気なのか。

外道に逸れれば、ますます御坂さんから遠ざかっていく事実は、もしかしたら彼女の中ではタブーとなつて既に忘却の彼方なのかもしない。

「なんだかいやに具体的なもの言いですね、白井さん。たしかに

『お兄さんとお話へ』だなんて、いかにもあの人人が言こやつでそつくりでしたよ。さすが白井さんですね

よく弄<sup>いじ</sup>られていただけあって。といつ言葉は呑み込んだ。

「昨日の夜、お姉様の携帯を覗いた時には心臓が飛び出るかと思いましたの…。お姉様と！ テートだなんて！ グゥアアツツ！ おのれレベル<sup>5</sup>だからと調子に乗つてエエエツツ！」

…………。

そんな事だから御坂さんから避けられるんですよ。意澄さんからも弄<sup>いじ</sup>られるんですよ。

その言葉を飲み込むのにどれだけ苦労したか。

救われない魂をここに見た気がした。

ふむ、しかし、なるほど。やつらとどうだったのか。

「はいはい分かりましたから、やつらと書類を片付けましょうねー白井さん」

仕事を放り出すのは、後が怖いとしてもできないが、やつらといふなり、気になるのだって無理はない。

だつて、ほら、私だつて女の子なのだから。

(助けて…、黒子…)

すすけた服に、ほつれた髪の毛。無敵の電撃姫（笑）が、そこにいた。

「美琴ちゃん美琴ちゃん。クレープだつてよクレープ！ ワゴン車販売だぜ！ 始めて見たつて！ やべーよ買おうぜ！ 絶対あれ買おうぜ美琴ちゃん！ まあアレより美味しいものなんていつでも食えるけどさー」一 ゆーのつて雰囲気なんだろ？ 買おうぜ美琴ちゃん！」

「お前こんなキャラ設定だつたんだな『思想統一』。眞面目にやつてる」つちがバカラしくなつちまう…。それが狙いか？ テメエのそのキャラ設定は」

あの後、暴走する勢いのままに、誰とも言わず挑みかかった私と意澄さんが、ものの見事に股間…、じゃなくて『未元物質』の片手の一振りに這いつぶやる事となつたのがつい先刻。

そんな無様な私達を一笑に付し、ボコり返した張本人は一人ふと我に返つて『うわバカラしつ』と至極もつともな一言を身も蓋もなく言い放つて、この不毛な鬭争に終止符を打つたのだ。

病院沙汰はごめんだつたのか、三人互いに全力は惜しんだ加減の結果、怪我という怪我はしなかつたがこの通り、服も髪もぼろぼろである。

だと脣の間に意澄さんはいつの間にやら一人でピシッと元の姿に戻っているし、かと思えば間も置かずに『あれ美琴ちゃんボロ雑巾ごっこなんて変わった趣味だ。面白いけど交ぜて欲しくはないかなー』などとふざけた口でのたまつて。

一体、私の立場とは何だったのだろうか。『デリカシィー？ 欲しいなら勝ちとつてみろよ』だなんて成程そうかと頷かせておいて、開幕一秒で序列一位には勝てぬと悟つたのか『道連れだー』と外道をほざいてこちらに突っ込んでくるものだから、彼の実力の一端を知る者として唖然としてしまつた。

いや敵前逃亡って…。

かつての勇士はどうやら。全容じを見てないまでも、『<sup>デュアルス</sup>多重能キル』じみた力を振るう彼がほぼ何もせず尻をまくつて逃げ出すとは、予期せぬ事態にも程がある。もしやあれだけ長い前ふりも、無意味に人をかき回したいだけの悪ふざけだったのか。

逃げるくせに、笑顔そのものの変わらぬ表情から彼の胸中を悟り、もうこの人本当にどうしようもないなと諦め混じりに電撃を放とうとしたがそのまま直後に横槍入れるにかの嵐。八倒する五感のなかで、それが『未元物質』だと思いつた頃には時すでに遅くこのままである。

一体私が何をしたのか。いやしていない。

どうせなら、せめて何かをしてから倒してほしかった。

「大体お前。グロ肉とか浅い皮肉を言われた程度で、何でそんなにむきになつてんだよ。あれか、キレる子供かテメエ」

「あ、ボロぞ…、美琴ちゃん。お駄賃上げるからクレープ買ってきてくれるかな？見ろよこれ、諭吉さんが五人だぜ？是非この兵力でクレープ屋さんの在庫を攻略しててくれたまえ。ああそれと、おつりはちゃんと返してね？」

「この期に及んで無視かよグロ肉。今さら基本に戻つてんじゃねえよ泣かすぐリカ」

全然『駄』じゃないお駄賃を、私の右手に握らせて、道連れだから年下の女の子に抱きついて無様を露出したダメンズにパシらされる私つてもう何だらつ。もしかしてあれが、舐められているのか。この、グロ肉に。

「グロ肉つて誰ですかー、知りませんねー、そんな名前の人なんてここには居ませんよー。仮にそれが俺へ向けられたものでもー、俺つて美少女でも侵略者でもないしー？まして純愛なんて、テーマにないしー？」

「だからテメエマジで何の話してんだよ！このセリフはもう言わねえと思ってたのにまた言わせてんじゃねえよこのバカッ！」

「名作の話ですけど何か？」

「グロ肉と美少女と侵略者と純愛がじつや混ぜの名作って何だよツ！そんな嫌な予感以外に何もない名作があつてたまるかツつーんだよそれ作つたやつ絶対なんか病んでんだろうツ！」

「同感だけど、この前のやつは比較的まともな終わり方だったぜ。いやほんと。世界も滅ばないし、永劫の戦いを強要されることもないし、悪い奴だけが良い思いをすることもない。全くまともな終わり方だったよ。うん、魔法少女の力はやっぱり絶大だね」

「……だから嫌な予感しかしねえ……んだが、魔法少女だと？ カナミンみてえなカラフルな奴か？ 気になるじゃねえか。どんな感じだったんだ、言ってみろよ」

「主人公が、アナタノコトヨイツデモミテルカラネ？ みたいなことをヒロインに言つて、それを示唆するような描写が最後に出て来て、そのヒロインが追い立てられるかのように一寸散に駆けだした所で幕が引くんだ」

「ストーカー発言…！ サスペンスものの手口じゃねえかそれ…！ どう受け取つても後味最悪だらうが目え腐つてんのかッ…！」

「さらにそのヒロインの走る先にはおびただしい数の獣の群れが

…

「絶望しかねえのか…。何でそいつ、魔法少女で作るうつと思つたんだよ…」

…。

もうヤダこの人たち。

変人一人から少しでも離れようと、今やこの街では珍しい現金を握りしめて大人気ない大人買いに走る私。

別に意澄さんることは嫌いではないし殊更苦手でもない……、と思う。少なくとも黒子ほど酷く意識してるわけではないはずだ。そのはずだ。が、なんか自信がなくなってきた。悔しいが、今となつては黒子の気持ちはよく分かる。

彼はアレだ。ふざけるのが大好きだ。人もてあそを玩んで、限界までいじくり倒すことに趣味を費やすドSの系譜の人間だ。悶える姿に笑みを深めて、苦悶を肴に酒をあおるタイプのヤバイ人種なのだ。

恐ろしい。

思惑に従うままに、手繩る糸に吊られて意志の在り処にも気が付かないままに踊る、愚鈍な人形の滑稽が好きで好きでたまらない変態の極致の体現である。私はその彼に捕われてしまつたのだ。

いま未だかつて、これほどの苦々しい屈辱を味わつたことがあつただろうか。いやない。ないが、しかし短距離走で誤つて転んだあの時に、口の中に入つたグラウンドの砂の味が、涙と共に思い出される。忘れたかつた恥と失敗と醜態の数々と。次々と甦る記憶の濺おりとなつては美しくすら見える。また一つ子供の殻を捨て去つた、夢く過ぎる刹那のひとつ時。幼い日に聞いた歌が、私の耳によみがえる。

大人の階段の一ぼるー……。

シンドレラなんて嘘つぱちだ。

休日の昼間なだけあってクレープ屋さんはこんでいた。列を連ねて並ぶ人々には辟易しないでもないが、それだけにこの店の味には期待が持てると言うものだ。というか、よくよく思い出してみれば、期待もなにも、ここって前にみんなと来たことがあるお店だし。

その経験から考えるに…、まあ外れないだろうから、この際前に買わなかつた奴を全部買つてしまおうか。うん、それがいい。そうしよう。うへへ、夢が広がるわ。

獲物の前で舌舐めずりなどと形容されでは確かに下品に聞こえるが、だとしても目の前の未来に見出した悦楽を、怠惰に喫して待つのはやはりおつなものである。そうでもしなきや、やつてられない。

五分は経つたか。手に持つものの重さから、普段よりも長く感じた鶴首の時の幻惑も、最後の一人が横にはけたことで終わりを告げた。列が開けた。握りしめた万札五枚を手放す時が満を持してついに来たのだ。

「全部、下さい」

待望の瞬間。

恐らく一秒よりも短かつたであるひ流れの中、巡りめく走馬灯に委ねられた意識はその狭間で、今日の日のさまざまな出来事を浮かべては消していった。

久々のグローリー、初めてのホスト、惨敗、裏切り、屈辱、御坂は目の前が真っ暗になった。ああ、出店で万札使って買占めだなんて。ああ、またあの混沌に戻らなければならぬなんて。

メールなんて無視すればよかつた、休日のお誘いだなんて色々と見え透いていたではないか。

なぜあの見苦しい言い争いを見てすぐに逃げなかつたんだ。大惨事を目前に、分別も忘れた愚劣を演じた私は飛んで火に入るなんとやら、のこのこ出てつて結果は玉砕。末代までの赤つ恥。馬鹿か、アホか、ド間抜けか。私はそんなに狂気を持て余していたのか。思春期か、これが思春期のなす業なのか。

抱えるスイーツ、溢れる涙。五枚の紙つぺらが随分とまあ重くなつて…。

さよなら、私のプライド。

御坂美琴の初めてのパシリ。ここに完了。

そしてもうこれ以上はないだろうとタ力をくくる彼女に、デパート、映画館、公園が再び地獄となつて待ち構えていることを、まだ知らないのであつた。美琴ちゃんの戦いはこれからだ！

所変わつて十八時。ここは普通の第七学区。

時間を飛ばして色々あつて、やや早にながらもぼちぼち帰りを意識し始めたその頃までで、この俺、学園都市序列第一位『未元物質』こと垣根帝督は、表にこだわらないもののその実、大いに戸惑い、そして驚いていた。君臨者の意中を揺らすその原因は言わずもがな、グロ肉もとい『思想統一』こと回錠意澄である。

別にカッコイイ訳でもないが間違つても不細工とは言われない、細くも太くもない輪郭に濃くも薄くもないなんとも絶妙なバランスの目鼻立ちを、邪魔にならない程度の長さで整えられた、若干くせはあるが鬱陶しきは感じさせない明るい茶髪で飾つている回錠意澄である。

上から白地のTシャツに黒のジーパンにスニーカーと、ひたすらにラフと夏らしさを主張するファッショングで斜め前を歩くあの回錠意澄である。

少し前にお茶の間を賑わせた『幻想御手』事件の裏で、影から影へと乱暴狼藉の限りを尽くして暗躍したともっぱらの噂のあの回錠意澄が、モザイクなしに表を歩けば、もれなく六法全書に引っかかるあの表現規制の申し子が。なぜ、素知らぬ顔で、御坂美琴などとまつとうな存在と人脈を結んでいるのか。

匂う。これは匂うぞ。

裏街道まつじぐらに線路が続いてどこまでも行つてしまつことがほぼ確定のグロ肉が、色々グレーな噂が流れているとはいえ、正道

を堂々と恥も汚れもなく邁進する純潔のお姫様との交流などとは。

……はつはつは。

気になるではないか。

序列による開きは依然として大きくとも、超能力者なる一定の士  
儀の上に同じく立っている者とあれば、どことも知らぬ場所で何と  
もなしに何かしらの関わりを持つたりしてしまつのはむしろ当然。  
その通り合わせはそう、今回の『未元物質』<sup>ダーダマタ</sup>と『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>のよつ  
に。

しかし果たしてそれだけか。『未元物質』<sup>ダーダマタ</sup>と『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>。  
例えにこそ挙げたものの、闇に属するというもう一つの共通項を持つ我  
々が表の者と友人とは胡散臭い。とくに『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>はつい最近ま  
で監禁されてたらしい秘中の秘。外のあれやこれや等は知る由もな  
かつた彼が、そのような機会に恵まれる幸運を、都合よく掴めると  
は出来過ぎって奴だろう。

こういった手合いは疑うのが常道。事情をいくらか聞くのもよさ  
そうだ。あまり見ないイベントなのだし、期待はしないが、暇つぶ  
しになるだけ無駄にはならないだらう。

それに、弱みなんかがあるんだつたら、そつと教えて上げるのが  
知人のよしみだろ？ ツハハ。

「それにしてもよお『超電磁砲』。こんな天気のいい行楽日和にグロ肉なんぞと散歩とは辛氣臭えな。他にもっとましな奴は呼べねえのか？」

「あつ。オイオイあれだけ言われたのにキミ、まだデリカシーが足りないのかい『股間物質<sup>ダーフマラ</sup>』よ。クラスでハブられてる子にその話題は禁句だぜ？」

聞いてみたのが、そこに割り込むバカが一人。

「つちよ。アンタ変なこと捏造しないでよ！　ハブられてなんかないわよ私は！」

「あれ、冗談のつもりがこの反応は…。おお！　もしかして、もしかしちゃうのかな！？」

「まあ、もしかするかは知らねえが、ハブられてる奴は皆そう言うんだよな。ま、あんま氣にすんなよ『超電磁砲』。それも超能力者の有名税とも思つて諦めな」

「違うって言つてんでしょう…、つてあれ？　なに、なんのこの空氣？…や、やだ！　やだ止めて！　だから、つちよ、ちが…、な、慰めなんてやめてよ全然そんなんじゃないんだから！　違うわよ！　ハブられてなんかないって言つてんでしょう！　だ、だから…、私は！」

「なんか、同じ常盤台の超能力者でもリモコンの方の人とは、こう、格差？　みたいなのがあるんだね。さしづめ美琴ちゃんはヘラクロスに対するカイロスみたいなもんだね。いや、ピカチュウに対するライチュウかな？　くくっ、ふははっ、哀れ<sup>あわ</sup>ｗｗｗｗｗｗ」

本当に哀れだ。もうこいつ今から泣くんじゃねえか、つてくらいに必死におろおろ返す刀を彷徨わせている。無理なら無理で、反論なんて早々にたたんで開き直るのが最高の反論だらう。」

「あーあ。ほら見ろまたグロ肉が面白がって……って、ん？　あれは……。

「いいじゃない、ハブられたって。だつて私は超能力者。キレイでカッコイイお姫様なんだもの。ハブる？　はッ！　そこのいらの平民はみんな私を崇めていればいいのよー！」

「つな……だ、だれよアンタ……」

そこにいたのは……二人の『超電磁砲』。顔も形も声も全く同じの、そつくりなんて次元を超えた鏡合わせの……そう、同一存在。幻覚なのか、錯覚だったか、趣味の悪い白日夢か。全ては、夢幻の虚構かも知れなかつたが。

「だがそんな些事は問うだけ無駄。見えるモノが何であつても、まあ、あの『思想統一』が待つわけない。」

「そう、あれは『思想統一』だ。が、はて、『超電磁砲』はちゃんと気が付いているのだろうか？……見る限り、そうでもないらしい。」

「有り得ざる状況は意識を混乱へ突き落す。『超電磁砲』のうろたえぶりは、そんな絶体絶命の心理状態を如実に教え明かしている。」

経験の浅さがここに露出させる形となつた。

現時点をもつて勝敗は決したが、さて、ドウを全身ここでおわせる  
グロ肉のバトルフェイズは、まだまだこれからつてか？

たんつ。ヒ。わざとらしい音を立てて『彼女』は、目の前の『御坂美琴』は、『御坂美琴』に向かつて、ゆっくりと歩き出す。うつすらと浮かべる氣味の悪い微笑みは、霧がかつた現実感をますます曖昧にぼかしてゆくようだ。

ホラーとしての完成度に力を入れたことを窺わせる見事な演出だ。遊びとして込める手にしては些か度が過ぎて見えるが、それは何事にも本気で取り組む、職人としてのプライドか。そうであつても相手からすれば遊びですまないのでだから、はた迷惑の限りだが。しかし、見ている分には面白い。ここは様子見か。

人知れず観察されているホラー映画のヒロイン、御坂美琴の表情は、驚愕と、疑問。それは思考停止。

理解がとても追いつかない、といった様子だが、しかしいくら呆けても全ては現<sup>うつ</sup>。グロ肉の引き起こす物理現象。待つてはくれず、気が収まるまで消えはしない。

硬直させた体を為すがままに、体の動かし方すら忘れて立ちぬくし、なに一つ状況を飲み込めずに、被害者は田線だけをただ泳がせていた。

踏み出すたびに鳴る足音も、やけによく聞こえる息づかいも、頬に触れた白い指も。狂おしいほどのリアルを突き付ける質感の数々も。『御坂美琴』は、なに一つ解らない。

しかし傍観者たる自分は解る。被験者として『思想統一』の名の意味を理解する自分は、むしろ良く出来たバラエティ番組を見た気分で、こみ上がる笑いを抑える方がよっぽど難しい。

御坂美琴が一人、ここにいる。なるほど脳の構造を変成する『思想統一』<sup>マコーグ</sup>は、今、間違いない一人目の『御坂美琴』だ。

ふむ、しかしこれは……、どこかで……。

……。

ああ。メタモンか。

シャドウだよ

だから意味分かんねえつづってんだろ、主人公が地の文に急に割り込んでんじゃねえ、一瞬混乱したじゃねえか馬鹿野郎。

弱み突いたり『超電磁砲』<sup>ケルガン</sup>。ここぞとばかりに調子に乗つて、女子中学生を追い詰める自称シャドウ。

「アンタだれ？ 私は私。そして、アンタでしょ？」

「な……、なにっ、アンタ、なに言つて……」

問われ、応える。それは質問。

何を言つているのか、目の前のそれは何なのか。解らないのか、解りたくないのか、最後には、氣丈に振舞う声も消え入り、…沈黙。

膨らむ不安。はち切れんばかりの逃避への衝動を、『御坂美琴』は、続ける。

「みんな弱いなあ、脆いなあ。やれやれしようがない、強い私が助けてやるか。ああ私ってちょーかつこいい。…あははっ、私は『私』。言つたじやないの、『私』はアンタで、『私』はアンタが思つたことを口にしただけ、…でしょ？」

「…ツ！ 違う！ そんなこと思つてない！ わつ、私は…つ」

何もかもを理解した風の、不愉快な『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>の声。それに触発されたか。瞬間、弾かれるように、やつと、事態を把握した足が動き、後ずさる。

これの一連の茶番劇を無意識にやつてているのだから恐れ入る。その姿は、まるで追い詰められたヒロインじやないか。ここまで來るといつそ感心すら覺ちまつぜ。

「違う？ なにが？ 雑魚を憐れんで何がおかしいの？ 強者が優越感に浸つて何が悪いの？ アンタがいつも思つていたこと。そうやつてふてぶてしくお姫様なんてやつてたんじよ？ それが私で、アンタでしょ。一体なにが違うのかしらねえ？」

「違う…、違う…、違う…ツ！ 私はツ、そんなこと思つてないッ！ 違う…ツ！ あなたなんかツ、（やめろー、よせーピヨ通行人A）あなたなんか、私じゃないツ！」

最後の言葉。否定の叫び、悲痛の訴え。その時、『御坂美琴』は浮かべる微笑みをより一層深めて、不気味に嗤つた。

対峙する『御坂美琴』と『御坂美琴』。照らし合わせた二つの影は、片や笑い、片や怯え。同じはずだった二人はいま、決定的に違う隔たりを晒していた。

すなわ  
即ち裏と表。

ゴオオオオツ！

噴出する黒いエネルギー。

『御坂美琴』はなおも笑い、告げる。

「…我は影、真なる我。あははっ。最近の流行らし<sup>はやり</sup>いぜ、これ。プレステからのファンとしてはやっぱ乗つかるんべきだよね。どうだね、びっくりした?」

声だけ男に戻した、女子中学生姿のグロ肉。女の子に男の野太さを備え付けた、そのアンバランスが奏でる絶妙なハーモニーは想像したよりも結構クルものがある。ぶっちゃけキモイ。

「どうよ美琴ちゃん。凄いでしょ、パないでしょ。これが俺の力だぜ。…ん？あれ、美琴ちゃん。寝ちゃったの？いやそんなわけないよね。路上で寝るのは酔っ払いかホームレスだけだもんね。

いぐりみすぱらじくても、まさか美琴ちゃんは違つよね。おーい、  
美琴ちゃん。おーい…」

年端もいかない女の子に、妙なトラウマを植え付けておきながらこの態度とはえげつない。やることなすことの端々から外道の育ちが滲みでている。裏の世界とはかくも人を歪めるモノなのか。

…おつと、また話が横にそれた。まあ今さうか。マジで、狙つてやつてんじゃねーよな？ こいつ。

AIMのパターンを読み取るつてことは人格やら人間性やらを読むのに近いと聞くが、裏相応に苦労したらしいこいつなら、能力なんざ使わなくとも『読む』位なら出来る…のか？ ならやつぱり狙つてやつてたのか。クソ鬱陶しい。こいつがどうやって表に取り入ったのかは解かつたが…、あー調子が狂う…。

「美琴ちゃん。美琴ちゃん。おーきーるー。美琴ちゃん。  
…起きねえ。これはもしさ、貴女にだったら何をされてもいいと暗に言つているのか…？ …うん。そうだよね。こんなに無防備で何でもやりやすい感じに出来上がつちゃつてるんだから何でも一つや二つかやつちゃつても差し支えオールナッシングだよね。トリック・オン・トリックでこだわりの技百連発の末にエルフーンきみに決めたらあの子のスカートのなかゲットだぜだよね。よし、やるぜ」

「寝てる間に悪戯<sup>いたずら</sup>していいのはプリンだけだぞグロ肉」

つは。とかの擬音が似合ひ仕草で我に返るグロ肉にはもう溜息しか出ない。何がしたいのやら。ああ、悪ふざけか。

「…そう言えば、まだ居たんだね『股間物質<sup>ダーフマター</sup>』。…え？ なに？」

キミも美琴ちゃんに、何でも何かやっちゃいたいの？別にいいけど、君が関わると本気で犯罪っぽくなっちゃうから、できれば遠慮してほしいんだけど……」

「変態と一緒にすんな。いらねーよ、俺まで得体の知れね一道に誘うんじゃねえ、一人で勝手にやつてろ」

その返答に満足したのがどうなのか、グロ肉は『超電磁砲』<sup>レールガン</sup>の顔に向かって何やらサインペン片手に作業を始めた。作業に打ち込みながらも終始絶やすことのなかつたニヤニヤ顔には、僅かな痛みと共に少しあきれたが、あきれなんて感情を抱かせた以上は、やはりこれもそいつた設定の一環なのだろう。

それを自覚したとしても、被害者のその後の運命を物語る、悪意に満ち満ちたヤツの表情を見る度に裏つぽくねーなー口イツなどといつた錯覚を感じるに、下手な抵抗の無駄を思い知るわけなんだが。

ヤツに対しても警戒すべき点は、恐らくそこにあるのだろう。

魔人だろうと超人だろうと結局は人なんだから、心を許したり、そうじやなくとも無意識で警戒を緩めてしまう『パターン』は必ず存在するわけだ。

例えば子供相手に大人が全力を出せなかつたり、恋愛的にタイプな異性に見栄を張つたり甘くしたり、なぜだか分からぬいけど如何しても嫌いになれない友達がいたり。まあ所謂性格やら、性質やら、本質やらといった類のものだ、それらは人が社会を築くに当たつて獲得した種族的な特徴で、誰であつてもヒトだつたら消すことは出来ねえつてことになる。ゆえに、付け込むには絶好のウイークポイント。

普通はその辺りは注意していれば済むレベルだが、容姿やら外分泌物やら果ては性格まで変える存在ならば、理性を超えた部分に直に殴りこむことだって可能だろ？

『思想統一』のいまの顔と性格は、確実にそのために用意したものだ。一目見ようと一目見ようと、アレが人を食料としか考えていよいよ化物だなんて思わない。いや、思つてたつて思えない。どんなモノにも变身できるヤツは、いまは本当に化物ではなく普通の人間なのだから。

弱者にも伴侶にも隣人にも变身できる、ヤツは正真正銘の『人間』（ぱけもの）なのだから。

「で、結局なにがしてえんだテメエは。そんな小娘と友達じつこがしたかっただけってか？」まさか今さら表社会で健全に暮らそうつてことはねえだろ。『思想統一』

どうせはぐらかすんだろうなと。これは半分は独り言のような問い合わせで、まともな返答を期待してのものではない。そのつもりだったが。

健全、ねえ。

呴くように漏らした言葉に、ヤツはどんな意味を含ませていたのか。一瞬だけ僅かにのぞかせた、今までとは少ししだけ質の異なった声色には追求したくなるだけの興味を覚えたが、呴いたつきりで、手を止めず悪戯に没頭するままではなにも掴ませてくれないだろ

う。

まあ、仮につかんだとしても好奇心を満たす以上に価値のある結果など程度が知れているが。

グータン的赤裸々本音トークなど、どうせ近く殺す相手に求めるものではない。

「…よし、できたぜ」

そうこいつしている間にも、『思想統一』のハイスペックボディーを無駄に駆使して『超電磁砲』への追い打ちにいそしんだ成果が披露する時がやつて来たらしい。どれ、折角だから見てやるわ。

未だ放心したままの『超電磁砲』の額部分。そこには腹が立つほど達者な飾り文字でこう書いてあった。

- b r e a k t h e i m a g i n a t i o n -

「…想像力の破壊？ んだこりゃ

「ノンノン、ちがうちがう、なってないぜ提督くん。これはねえ、その幻想をぶつ壊す！ って読むんだよ、解かつたかな？」

「…あー、はいはい解かつた解かつた。そつか、そいつはイカすな」

言いまわしの違ひじゃなくて、なぜそのフレーズを選んだのかの真意を聞いたかったのだが、あえて聞き直すのも逆に余計こじれそ

うでなんだかな。

…まあいい。ちようど『超電磁砲』もぶつ倒れて一段落ついた所だ。もうはぐらかすなんてさせねーぞ。

「まあ落書きも終わつた所でだ、いいかげん本題に」「その幻想をぶつ壊す！」

「邪魔な奴も寝てんだからいいか」と、その幻想をぶつ壊す！

「そもそもそこまで邪魔でも無かつたのをわざわざテメエに呟わ  
S 「その幻想をぶつ壊すつ！」

「おこテメエけんく」その幻想をぶつ壊すうつー。

100

「グロ肉テメー、その幻想をぶつ壊すつーーー！」

「ふざけた」その幻想をぶつ壊すツツツー！」

「おいとく」その幻想をぶつ壊すツツツー！」

「ちよ三」「その幻想をぶつ壊すツツツー！」

「！」「その、幻想を！ ぶつ壊すウウウウウウウツツツツ

！――――――――――――――――

「七」「そのつ！ 幻想をつづ―――――― ぶつこわす「ウルセヒヒ  
ヒヒヒヒヒエツツツツ―――――― ウルセエツ―― 黙れツ――  
こつちが下手に出でりやあ調子こきやがつてグロクソボケカスグロ  
肉がツツ！ 湧いてんのか!? ウジ虫でも湧いてんのか生ゴミが  
ツツ―――― 帰れツ―――― シンクの三角コーナーへ帰れツ・グロ腐  
肉ツ―― その幻想をぶつ壊すう!? 意味解かんねえことばつか  
並べてりやあそれで済まさるとでも思つてんのか、それをブチブ  
チブチブチ連呼すんのはアレか? こだわりか? 百連発か? テ  
メエのこだわりなんぞどうでもいいんだよこつちはツツツ――――  
！」

「ちよ…、落ち着けって『股間物質<sup>ダーカムラー</sup>』。ていうか、え? グロ腐  
肉? グロフニクってそれけよつとカツコいい」

「知るかボケツ! 大体テメエ『股間物質<sup>ダーカムラー</sup>』つてなんだよ、そつ  
きからちよいちよい挿んできて何だよそのアピール、どこに広める  
氣だよ上手いこと言つたつもりか面白くねえんだよバアアアアカツ  
ツツ――――――」

ゼー。はー。

疲れる。くそ…。

ひとしきり思いのだけを吐きだしきって、やつと一定の落ち着きを取り戻せたのは正に僥倖やくわいだろう。グロ肉のやつも、やれやれしょーがねーなーと溜息一いついてやつと話を聞く気になつたようだし。

「ツチ、まあいい。クソが、今度こそよく聞けよ『思想統一』」

あー、長かつた。

「お前さ、『未元物質ダーフマター』と『思想統一』が殺し合つて今回の実験…、第一の『絶対能力者進化実験』。本当に実行されると思つか?」

「…………へえ、『樹形図の設計者シリーダイアグラム』を疑うんだ。大胆だね」

『思想統一』の反応はごく薄いものだった。そこそこ重い内容だったと思うんだが…まあ予想通りか。

「ふん。別にそうゆうんじゃねえ。ただ実験が知らされてからこうも音沙汰がねえとなると…、なんか勘織かんくつちまうよなあ?」

「ああ。俺は帝督くんほど性根は曲がつてないから、そんな穿つた目線なんてね。あれじやない? 必要機材とか、実験前に資料を整理してるとかじやないの?」

「うだうだうだ。俺もそう思うが、果たして。

「本当にそれだけだか？ 数日ならともかくもう一週間以上たつてんだぜ？」下準備にしては、時間がかかり過ぎだろ」

「そうだね、 そつかも知れないねえ。 んー……。 でさ、 それは解かつたけど、 結局帝督くんはなにが言いたいの？ もつと要領よく喋ろうぜ」

「お前なんか心当たりあるだろ」

「ないよ」

.....。

即答。 そして一つ呼吸を挟んで『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>は続ける。

「一体なにを想定しての発言かは……、 まあなんとなく解かるけど、 帝督くんが考えているモノは多分ハズレだぜ」

「俺の考えが解かつてる割には随分と余裕じやねえか。 負け戦が先延ばしになつたのがそんなに嬉しいか？」

「俺は平和主義者だからね。 俺の居ない所で起こっているコトなんていどりでもいいのや」

実験に支障が出た。 … それが俺の考えだ。

『絶対能力者進化実験』<sup>レベル6シフテ</sup>は言つまでもないが、 結構な額の金が動いている実験だ。 高い重要性には妥当の、 相応の人材と予算も揃えていて、 ある程度の無茶だつて黙認される。

多少の支障は支障にならない…。つまりはそういうことだ。

こういつた手合いの実験に支障だなんて、そうそう滅多なことではない。それに、偏つた言い方だが実験なんて大仰に言つてもようは俺と『思想統一』<sup>ダークマスター</sup>を殺し合わせるだけであつて、必須はせいぜい場所取りだけだ。超能力者一人の戦闘に耐えなければならないことを考慮しても、精々が二~三日あれば十分に都合を付ける程度だろう。

それに必要機材つてなんだ。

そりやあ『未元物質』<sup>ダークマター</sup>が戦うのだから普通の観測機では不足かもしれないが、だとしても俺が普段使つているものもある程度融通がきくし、第一実験の要是『絶対能力者』<sup>レベル6</sup>の精製であつて観測ではない。この都市の最終目標が目と鼻の先にあつて、それを観測機の調達<sup>つまつ</sup>ここで連中が躊躇<sup>はなは</sup>しているなど甚だ不自然。いや、有り得ない。

だつたら、有り得るのは誰かの妨害だけだ。

つまりこの実験を気に入らない誰かが意図的に、観測機とか書類整理とか、その辺の雑事などとは比較にならない支障を仕込んだのだ。そう考えれば辻妻が合ひうんじやないだろうか？まあ、上が揉めてただけという落ちも考えられるのだが…。

しかし常に最悪を想定して行動するのは、人生すべてに共通する当然の心得。そしてそれは、俺が実験をこり押して延期関係なしに『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>を殺しにかかる可能性を意味している。まあ降つて湧いたこのチャンスを全て台無しにしかねないのでから、少なくとも

今はやる気はないが。だがもし最悪が起きたのなら……。

さて、俺の『考え』が分かつて『思想統一』はどう動くのやら。

「ん？ そろそろ十八時か……、そろそろいい時間だし、今日はお開きだね。俺は忙しい身分でね、色々と予定が詰めてるんだ。ああ、美琴ちゃんの後始末は頼んだよ、じゃあね『未元物質』ばいばい」

捨て台詞にしては、微妙に物足りないセリフを吐いて去っていく『思想統一』の後姿。そうだろう、今はまだそれでいい。どの道避けられる道ではないんだからな。それより今の問題は……。

あー……。あいつなんて言つた？ 『美琴ちゃん』は任せせる？

こいつと初対面の俺になんつ一ハードルの高い……。

去り際に押しつけられた、件の『美琴ちゃん』なる大荷物にどうしたものかと目をやれば、『うん』だか『んがー』だか間抜けに唸つて『超電磁砲』が視界に入った。今さら起きたらしい。取り敢えず手間が一つ省けたようだ。女を蹴り飛ばすのは、少し気が引けると思っていたところだったのだ。良かつた良かつた。

「ん……。ッは、そつだ、もう一人の私は！？」

「もつ帰つたぞ」

嵐を前にした小動物みたく右往左往に混乱する『超電磁砲』に、事と次第を教えてやつて『いる俺は今最高にいい先輩に映つて』いるこ

とだらう。当然ながら、グロ肉作の額の落書きにはノータッチだ。

常に基本を押さえて行動するのは、人生すべてに共通する当然の心得である。

「はー、そうだったわ。それが意澄さんの能力だったわね」

「気付くのが遅くねえか？ お前、意外と間抜けなんだな」

ぐうつ。の音くらいは出るらしい。

「そりいえば意澄さんとなにか話してたみたいだけど、ええっと

…」

「なんでもねえさ。大人の事情つてヤツだよ」

へー、とかなんとか口から漏らして、じあらの顔を上田氣味に見るその目は純真そのものだ。よく外れると定評の下馬評も少しは信用が効くらしい。

高い声価にたがわぬ姿。彼女の人となりを端的に見た気がした。

それはさて置き、グロ肉の言つていた後始末つて何だらう。まあ、ふざけ半分で言つただけの可能性もあるが、いやむしろそちらの方が高いだらうが。

しかし大して親しくないとはい、女の子一人をほっぽつて自分一人だけ帰つてしまふのも男として気が咎める。なら家まで送り届ければいいのか。いや初対面でそれは馴れ馴れしい気も…。というかだ、額に間抜けな落書き躍る常識知らずの恥知らずと並んで歩く

なんて罰ゲームの『』とき役回りは全力で辞退したい。いや教える気はないんだけども。

人知れず懊惱する『未元物質』だが、ふとそこで自分を見つめる視線に気付く。

『超電磁砲』だ。

じーっと視線を外さない彼女を訝しむも、黙つたままよりも話題があるほうが、この場を去る口実を見繕うに都合がいいと思い、話しかける。

「お？ なんだ、人の顔じろじろ見て。落書きでも書いてあつたか？」

「いや違いますよ、今どき顔に落書きって何ですか。そうじゃなくつて…、えーと、言いづらいんですけど、意澄さんに友達がいたのがなんか以外だつたつて言うか、いやいるのは当たり前なんですが、ちょっと想像出来なくつて」

「… よりにもよつて友達かよ…」

疑問符を浮かべる『超電磁砲』に、逆にこっちが疑問が湧くのだが。

だが客観的にさつきのあの言い合いに関してだけ見れば、そう言われば確かに悪友くらいには見えたかもしれない。

…………うわ、なんか吐き気が。

「あれ？ 違うんですか？」

「ちがえ。あいつと俺はそんなんじゃねえ」

「はあ」

「お前の方」レジデンス「なんだ？ あいつとの接点なんて、普通あんまりあるもんじゃねえと思つんだが」

「ああ……。一週間くらい前に……、前に……。ああ……。私、  
風紀委員ジャッジメントと交流があるんですけど、そこでちょっと……補導されてき  
た意澄さんが……」

「…………」

絶句。しそうになつたが持ち直す。

一週間前と言つたか。だつたら……、ちょうど『実験』レベルアップが伝えられ  
た頃……じゃない。そうだ、もうひとつ、『幻想御手』レベルアップ事件があつ  
たのもその頃だ？ ……その頃だ。となると、まさか『幻想御手』レベルアップの  
情報が欲しかったのか？ なら補導されたのは自然な形で風紀委員ジャッジメント  
内部へ入るため？ ……んな無茶な。あいつがそんな……いや、手段  
を選ぶ余裕がなかつた……？

……解からん。大体この辺りで推理はあつてると思つたのが……。

「それで補導された後も結構尋問で無茶苦茶やつて、あんな破  
天荒な人だから、あの性格について行く人が想像できなかつたのよ  
ね……」

「……そりが。まあ、あいつの友達が想像できねえってのは完全に同意する。なんつたって『思想統一』だからな。あの化物と一緒にいるヤツの気が知れねえ」

「私は別にそこまで言つてないんですけど……。化物は失礼すぎですって」

「ほお。『思想統一』の意味を知つてそれなら大したものだな。第三位つてだけはある」

「ああ『肉体変化』ですよね。なんか黒子が……あつ、私の友達ですけど、黒子が羨ましがつてましたよ。食べても食べても太らないなんて、って」

「……あん？」

……。

『肉体変化』だと？

間違つてはねえんだが……。

あー……。なんだこれ、違和感？ 気のせいかな？  
……少し探るか。

「なあ『超電磁砲』。お前……」

と、聞きかけた所で流れてくる場違いなポップミュージック。近い。というか目の前だ。俺の耳が間違つてなければ、目の前の『超電磁砲』<sup>「エルガン」</sup>の服のポケットから聞こえてきた。

女子中学生のポケットから音楽が聞こえてくる状況など限られている。着信アリだ。

「つと、ちよつと待つて下さいね」

席を離れる断り一つ、彼女は少し離れた所にかけてこき余話を始めた。女の電話は長くていかん。サバサバ男らしいあいつもそうだろつか。

と思って身構えたのは杞憂で済んだ。いくつか言葉を交わすこと数十秒の後、携帯を閉じてもとのポケットにしまい込み、彼女はすぐに戻ってきた。

「後輩からの要請? が有つて、やつと帰りの許可が出た? とかで…。急ぎの用ではないんですけど…」

戻った直後の開口一番で、彼女は困ったような、呆れたような、微妙な様相で帰りたいと告げてきた。

ふん、まあ、聞きたいことはあつたが…、もういいか、丁度いい、帰るには頃合いだ。

「んじゃあ、これでお開きだな。また会つかは知らねえが達者でな『超電磁砲』<sup>「エルガン」</sup>」

別れの言葉に手を振つて、彼女は人込み…ところは少しまばら

な道に消えていった。

今日の日を振り返ってみれば、大体いじめられていた彼女の姿しか浮かんでこない事に気がついて、最後くらい「<sup>ひがい</sup>」勞いの言葉をかけてやるべきだったかと思つ『未元物質』であった。

さて、終わつたことはどうでもいい。結局のところ、自分が考へるべきは日常生活でのコミュニケーション法ではなくて『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>をいかに実験の場に引きずり出すかであるのだから。

アイツが実験を嫌がつてゐるのは、その行動から薄々だが感じている。

『勝つた方』がレベル6に進化できるなんて、途方もない絶好のチャンスを自ら願い下げる思考形態はいまいち理解できないが、一人一人の行動指針なんてモノは決める当人しか解からないのだから理解を望むだけ無駄であろう。どちらにせよ狩り取れば済む話なんだしな。

ただ遅々として進まない実験を鑑みれば、座して待てばよかつた現状も変わつてくる。

誰かに邪魔されている…といつのは推測の域を超えるか超えないかの仮説の段階だが、もし仮説が真であり、その上さらに犯人が『<sup>デマゴーグ</sup>思想統一』だつたとすれば、今の内から動かなければ手遅れになる可能性が高い。

考え過ぎならそれまでだが、学園都市序列第一位として、それなりにアイツのことは評価してゐるのだ。

不意を突かれれば、あるいは…。そういうた存在に対して、樂觀せずに危惧すべきは言わざもがな。負ける氣はないが、だからこそ万全を期すべきなのだ。

既に俺は『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>が行使し得る、おおよそ全ての干渉への対策を用意してある。

『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>への対策とは、即ちこの街の全ての能力者への対策と等しく、達成までの道筋は決して容易に踏破できるものではない。何千何万の能力の統御による汎用性は凄まじく、實に厄介。序列は四位と言えどもそれがどれほど當てになるのかは怪しい限りだ。ヤツが持つ能力が自己改良を可能にするならば、極々短期間のうちに序列の壁を貫き駆け昇つて來ることも十分に可能ではないか。

だがそれがどうした。ならば『未元物質』<sup>ダークマタ</sup>はさりとその上を行くまで。

そう、俺の能力は既存の法則に異物を混ぜ、この世の全てを歪める、おおよそ全ての能力者の天敵たる能力なのだから。

相手がなんであろうと、『未元物質』<sup>ダークマタ</sup>の手の内が尽きることは絶対ない。

そしてその上で油断はせず、確實に叩き潰す。いくら奴が手練手管で上手を重ねよつとも、確實に、粉微塵に、骸も残さず叩き潰す。

さて、俺はここまで考えている。

お前はどうだ？

『思想統一』<sup>デマゴーグ</sup>。

## 第1-1話 窓策から散歩まで 下（後書き）

帝督くんは好きですね。正直小悪党とかで退場はなんだか悲しいやら惜しいやらですけど、でも一方さんが相手だしなー。

感想、指摘、誤字、脱字、良い点、悪い点、悪い点、悪い点、悪い点、などがあれば教えて下さいお願いします。

露骨でしたか？ すいません、若気の至りです。新約三巻が出てお祭り気分です。お気を悪くされましたら新約三巻を読むことをお勧めします。表紙絵がある十八巻ばかりにダンディで個人的に大好きです。時代はおっさんですよ、おっさん。

はい、どうでもいいですね。ではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9261q/>

とある頭脳の思想統一《デマゴーグ》

2011年12月17日18時47分発行